

博士論文

集団文脈と個人内過程が自己カテゴリー化に及ぼす影響

平成 17 年 3 月

広島大学大学院生物圏科学研究科

生物圏共存科学専攻

磯部 智加衣

謝 辞

本論文を書きあげるにあたり、多くの方々から多大のご支援を賜りました。ここに記して、深く感謝の意を表します。

指導教官である浦光博先生には、具体的な研究指導に加え、研究に携わる真摯な姿勢や指導者としてのあり方など本当に多くのことを教わりました。研究を始めた学部 3 年からこれまで 7 年間、立ち止まってしまうことも多々ありましたが、浦先生はお忙しいにもかかわらずいつも私が歩き出せるのを辛抱強く、また暖かくまってくださいました。先生を指導教官として尊敬し、研究を続けられたことを本当に幸せだと思っています。

また、同じく社会心理学研究室の教官として、黒川正流先生、坂田桐子先生、高口央先生には、研究を進めるにあたって、また論文をまとめる過程においても、多くの具体的な助言や暖かい励ましをいただきました。他に、生和秀敏先生、堀忠雄先生、坂田省吾先生、岩永誠先生、林光緒先生、入戸野宏先生には、貴重なご指摘や発展的なご意見をいただきました。研究と現実の社会とのつながりを常に意識することの大切さや、それを踏まえて自分の研究を興味深く人々に伝えることの大切さを教えていただきました。

さらに、社会心理学研究室の先輩や後輩の皆さんには公私にわたり本当にお世話になりました。とりわけ、長谷川孝治先生・山浦一保先生・西村太志先生・吉田綾乃先生・中村佳子さんには、色々なことを教えてもらいました。研究が進まないときにいつも頼っていたことを思い出します。また、角野さん、長沼さん、前田君、古谷君、阪井君には、細やかなサポートをいただきました。皆さんやフさん、山下さん、早瀬君、角心さんとの研究室の中でのたわいのない話が、私をいつも救ってくれていたことは言うまでもありません。後輩であり研究をともに行なった、俣野さん、平野さん、中島君、本当にありがとう。調査や実験で忙しい毎日に、いつも私に元気をくれ、研究の楽しさを再発見させてくれました。

私が 5 年間という期間で博士論文を書き上げることができたのは、研究室の同期である相馬敏彦さんのおかげです。同じく、想像以上に苦戦した博士論文の執筆活動を同志として戦った、小林麻美さん、小野田慶一君は、忙しい中でもいつも励ましてくれました。他にも、同級生であった、河崎さん、渡辺君、中尾君、本当にありがとう。同じ時期に同じ悩みを持ち、お互いに励まし合える仲間がいて本当によかったと思っています。

最後に、わがままな私を支え応援し続けてくれた父や母や姉、泣き言や逃避行動に文句を言わず付き合ってくれた友人たちに深く感謝いたします。

目次

第1章. 問題の所在	1
1. 自己カテゴリー化研究の現状とその問題点	2
1-1. 社会的アイデンティティ理論	3
1-1-1. 社会的アイデンティティ	4
1-1-2. 社会的アイデンティティと社会構造	6
1-2. 自己カテゴリー化理論	7
1-2-1. 自己カテゴリー化理論の一般的な仮説	8
1-2-2. 自己カテゴリー化の規定因に関する仮説	10
1-3. 自己カテゴリー化理論の問題点	12
2. 本論文の目的と基本仮説	14
2-1. 自己カテゴリー化理論の再検討に関する目的と立場	14
2-1-1. 社会的アイデンティティ理論の主張との相違	16
2-1-2. 自己カテゴリー化理論の主張との相違	18
2-2. 集団内の個人間関係の理解に関する目的	19
2-2-1. 社会的比較	21
2-2-2. 集団内での個人間比較と自己カテゴリー化との関連	22
2-3. 本論文における基本仮説	24
3. 第1章の要約	28
第2章. 集団間文脈が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響	29
1. 問題	32
2. 研究1 集団間比較が集団内の個人間比較に及ぼす影響	32
2-1. 方法	34
2-1-1. 分析対象者	34
2-1-2. 分析デザイン	34
2-1-3. 質問紙構成	34
2-2. 結果	36
2-2-1. 予備的分析	36
2-2-2. 操作チェック	36
2-2-3. 仮説の検証	37
2-3. 考察	38
3. 研究2 内集団成員との個人間比較に特性自尊心が及ぼす影響	40
3-1. 方法	43
3-1-1. 参加者	43
3-1-2. 独立変数	43
3-1-3. 手続き	43
3-2. 結果	46
3-2-1. 予備的分析	46
3-2-2. 操作チェック	48
3-2-3. 仮説の検証	47
3-3. 考察	51
4. 第2章のまとめ	52
5. 第2章の要約	53
第3章. 集団間文脈と個人の内的要因が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響	55

1. 問題	55
2. 研究3 集団間比較の方向と内集団評価が集団内での個人間比較に及ぼす影響	60
2-1. 方法	63
2-1-1. 参加者	63
2-1-2. 独立変数	63
2-1-3. 手続き	63
2-2. 結果	68
2-2-1. 予備的分析	68
2-2-2. 操作チェック	69
2-2-3. 仮説の検証	70
2-2-4. 付加的な結果	74
2-3. 考察	74
3. 研究4. 個人の内的要因が、内集団成員・外集団成員との個人間上方比較に及ぼす影響	78
3-1. 方法	81
3-1-1. 分析対象者	81
3-1-2. 独立変数	81
3-1-3. 質問紙構成	82
3-2. 結果	82
3-2-1. 予備的分析	82
3-2-2. 仮説の検証	83
3-3. 考察	86
4. 第3章のまとめ	88
5. 第3章の要約	90
第4章. 個人的アイデンティティを維持高揚しようとする動機づけが自己カテゴリー化過程に及ぼす影響	92
1. 問題	92
2. 研究5. 集団間上方比較条件の有無と別のカテゴリー共有度が集団内での個人間比較に及ぼす影響	96
2-1. 方法	97
2-2. 結果	97
2-2-1. 操作チェック	97
2-2-2. 仮説の検証	98
2-3. 考察	99
3. 研究6. 集団間比較の方向、別のカテゴリー共有度、特性自尊心が、優れた内集団成員に対する拒否的態度に及ぼす影響	100
3-1. 方法	101
3-1-1. 参加者	101
3-1-2. 独立変数	101
3-1-3. 手続き	102
3-2. 結果	106
2-2-1. 予備的分析	106
2-2-2. 操作チェック	106
2-2-3. 仮説の検証	108
3-3. 考察	109
4. 第4章のまとめ	111
5. 第4章の要約	112
第5章. 総括と展望	113

1. 自己カテゴリー化の規定因としての動機づけ機能の検証	114
1-1. 自己カテゴリー化の規定因についての結果の総括	114
1-2. 自己カテゴリー化理論の再検討に関する限界と今後の課題	119
2. 実践的貢献	122
3. 第5章の要約	125
本論文の要約	126
引用文献	130
付 録	138

第1章 問題の所在

自分が所属するある集団の評価を高揚させるような優れた集団成員が、すなわち内集団の優れた成員が、他の成員から拒否されるのはどのようなときであり、逆に、その成員が賞賛され、受け入れられやすくなるのはどのようなときなのであろうか。本論文では、優れた内集団成員に関するこのような問いに答えることを通し、自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) を見直すことを目的とする。

なぜ、優れた内集団成員が、他の成員から受け入れられたり、拒否されたりするのだろうか。その過程は、それぞれ次のように説明することができる。

ある優れた成果を得た内集団成員が、その集団の他成員から仲間として受け入れられる過程は、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) や自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) に関わる一連の研究によって説明できる。自らの属する集団に優れた成員がいることで、その集団に対する評価が高まり、その結果、その集団に属していることで自らの評価も高まる可能性があるからである。したがって、集団内の他の成員は、優れた内集団成員に対する優秀さをより高く認知し、より好ましい人と評価することが知られている (e.g., Hogg & Abrams, 1988)。

一方、優れた成果を得た内集団成員が、その集団の他成員から拒否されるという過程は、自己評価維持モデル (Tesser, 1988) を代表とする社会的比較の研究から説明できる。優れた内集団成員は、他の内集団成員の個人的な自己評価に大きな脅威となりうる。そのため、集団の他の成員は、優れた内集団成員による脅威を回避しようとして、その成員との比較を避けたり、遠ざかったりすることがある (Pleban & Tesser, 1981)。優れた内集団成員を拒否することは、個人にとって一時的に好ましい脅威回避戦略になるのである。人はそれによって、自己評価 (自尊心・自尊感情) を維持・高揚させようとするのである。これが、集団において、「足を引っ張る」「出る杭は打たれる」「優秀な仲間を皆で排斥する」という現象が少なくない理由であろう。

上記のように、優れた内集団成員に関する一見矛盾するかのような現象は、既存の理論を用いてそれぞれ個別に説明することができる。では、どちらの過程がどのような場合に起こりやすいのだろうか。本論文では、成員間でのやりとりがどのような文脈において行われたのかに着目する。たとえば、自分のクラスだけで行っている体育の授業において、クラスの仲間が、自分より速く走ったとすれば、人は、ネガティブな感情をもち、自尊心

が低下してしまうかもしれない(その人にとって、速く走ることが重要であるという前提である)。しかしながら、クラス対抗で、リレーを行っているときに、先ほどと同じ人が自分より速く走っていても、人はポジティブな感情を持つことがある。クラスの一員であるという認識が自己の中で顕現化したため、優れたクラスの仲間によってクラスの成績がよくなることは自分にとって誇らしいことになるからである。前者は個人と個人の関係への関心が高められている状況であるのに対し、後者は、自分が属するクラスと他のクラスとの関係への関心が高められている状況である。つまり、自分の属する集団と比較する集団が存在する状況であるのかによって、優れた内集団成員が個人に与える意味が異なってくると言える。

そこで、本論文では、このようにある集団の成員間でのやりとりが行われるときに、個人が自己をどのように捉えているのかを考慮することによって、優れた内集団成員に関わる一見矛盾した現象を統合的に説明することができると考え(e.g., Brewer & Weber, 1994; Schmitt, Silvia, & Branscombe, 2000; Blanton, Christie, & Dye, 2002; Blanton, Crocker, & Miller, 2000)。個人が、自己をある集団の一員として捉えるならば自己カテゴリー化理論から説明される過程が起こり、独特の個人として捉えるならば自己評価維持モデルから説明される過程が起こると考えられるからである。

つまり、冒頭であげた疑問に答えるためには、個人がそのとき、自己をどのように捉えているかを整理する必要がある。このような、個人が自己をどのように捉えるかを規定する要因について提唱しているのが、自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) である。自己カテゴリー化理論では、先に記した例のように、ある集団どうしが競い合う状況におかれると、その集団の一員として自己を捉えるようになるとしている。しかしながら、その主張に関しては近年いくつかの問題が指摘されている。そこで、本論文では、それらの問題点を踏まえて、人が自己をどのように捉えるかに影響する要因を見直し、整理することを第1の目的とする。

以下ではまず、1. 自己カテゴリー化研究の現状とその問題点、を整理する。そして、問題点を踏まえた上で、2. 本論文の目的と基本的な仮説、を述べる。

1. 自己カテゴリー化研究の現状とその問題点

この節では、「自己をどのように捉えるか」を決定する規定因に関わるこれまでの研究を

紹介する。自己を集団の一員として捉えることが集団行動にどのように影響するかについて、社会的アイデンティティ理論 (Social identity theory: Tajfel & Turner, 1979) は、自己評価維持動機に注目して説明を行った。そこでは、自己を内集団の一員として捉えているときには、内集団と外集団の比較を通して内集団を肯定的に評価しようという動機づけが働く、そのために、人は他の集団との肯定的な区別を可能にする集団間行動に従事すると説明されている。この理論を発展させた自己カテゴリー化理論 (Self-categorization theory: Turner, 1987) では、そのような内集団を肯定的に評価しようという動機づけに基づく認知・行動がなされるためには、個人が自己を集団の一員として捉えることが必要であり、それを導くのは「状況における集団 (カテゴリー) の顕現化である」と述べている。先に記した例のように、ある集団どうしが競い合う状況におかれると、その集団の一員として自己を捉えるようになるとしている。その結果、集団の評価をより肯定的に評価しようという個人は動機づけられると述べている。クラス対抗の場におかれると、個人は自分が属するクラスの一員であるという意識が高まる傾向にある。そのため、自分の属するクラスが優位になるように働きかけるというのである。しかしながら、近年このような考え方が批判的に見直され自己評価を肯定的に評価したいという動機づけが根本にあるのであれば、自己をどのように捉え評価するのかは、必ずしも状況に依存するわけではないという主張が散見されるようになってきた。たとえば、クラス対抗の場においても、自分のクラスが楽々と勝利すると確信している場合やがんばってもどうせ負けるとあきらめている場合、クラスの一員として自分を捉えるというよりも、クラスにおいて自分自身がどのような評価を得るのかに関心が向きやすいと考えられる。つまり、個人がおかれた状況の中で自分の評価にとって重要だと思われる自己を能動的に選択する可能性がある。このような指摘をふまえ、本論文では、自己カテゴリー化の過程について、個人の動機づけという側面からアプローチする。以下では、本論文の目的と立場を明確に示すために、上記の議論展開を詳細に説明する。

1-1. 社会的アイデンティティ理論

本論文の主要な概念枠組みである自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) の基となった、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) は、集団間の葛藤関係に関する統合理論として提唱された。この理論は、3つの前提をもつ。第1に、一般的に人は自尊

感情を維持し高めようと努力する, 第2に, 社会的アイデンティティの評価はそのもととなる社会集団ないしカテゴリーに対する評価の影響を受ける, 第3に, その集団の評価は他の集団との社会的比較を通して決定される, という3つである。そしてこれらの前提から次の3つの原理が導かれる(柿本, 2001)。1. 人は肯定的な社会的アイデンティティを達成し, 維持しようと努める, 2. 肯定的な社会的アイデンティティの大部分は, 内集団と外集団との間で行われる有利な比較に基づく, 3. 社会的アイデンティティが不満足なものである場合には, 人は現在所属する集団を去り, より肯定的な別の集団に入ろうとするか, あるいは現在属する集団をより肯定的なものに変えようと努める。

社会的アイデンティティ理論では, まず, 個人間相互作用と集団間相互作用の区別を強調している。この考えは, 上述した原理の1つ目と2つ目に関連する。以下の, 「1-1-1. 社会的アイデンティティ」では, 社会的アイデンティティとはどのようなものであるのか, 社会的アイデンティティという概念を取り入れることで, 集団間相互作用がどのように理解されるのかについて述べる。

また, 社会的アイデンティティ理論では, 社会移動に関する信念と社会変動に関する信念の区別も強調している。この強調は, 社会的アイデンティティ理論の3つ目の原理に関連する。「1-1-2. 社会的アイデンティティと社会構造」では, 社会的アイデンティティに媒介される社会と個人行動の関係について, 社会移動に関する信念と社会変動に関する信念の観点から説明する。社会的アイデンティティ理論の3つ目の原理は, 集団間関係をどのように認知するかが, 自己評価を維持高揚しようとする動機づけに影響し, その方略を決定すると述べている。この視点は, 個人の自己評価維持への動機づけという観点から自己カテゴリー化を捉え直そうとする本論文にとって有益なものである。

1-1-1. 社会的アイデンティティ

社会的アイデンティティ理論では, 対人過程や個人間相互作用と集団過程や集団間相互作用とは基本的に区別されるものであり, 集団過程は対人過程からでは説明できないとしている。そして, あらゆる社会的行動と人々の行動は, 対人過程や個人間相互作用と集団過程を両端とする連続体に沿って変化し, この行動の次元は, 個人的アイデンティティ (personal identity) から社会的アイデンティティ (social identity) への自己概念の変化によって引き起こされるという。ここで, 個人的アイデンティティとは, 個人が独特で他の全ての人間とは違っているものとしての, あるいは独自の対人関係という観点での自己

概念であり、個人間の相互作用に影響するとされている。一方、社会的アイデンティティとは、自己を他の内集団成員とステレオタイプの交換可能であるとし、外集団の成員からはステレオタイプの別であるとみなされる自己を含む社会カテゴリーの特徴としての自己概念であり、集団間の相互作用に影響するとされている。社会的アイデンティティを最も簡単に定義すれば、「個人が自分にとってある情緒的な価値や重要性をもったある集団に所属しているという個人の側の実感」ということができる（廣田, 1994）。

また、社会的アイデンティティ理論は、集団行動の心理過程を、カテゴリー化と社会的比較から説明している。この2つの過程が、集団間相互作用を、集団間関係の歴史によって程度差はあるが、競争的で差別的なものにするという。

まず、カテゴリー化は内集団・外集団についてのステレオタイプの知覚を生み、集団間の差異・集団内の類似性を強調しようとさせるという。社会的カテゴリー化とは、類似性と差異性に基づき社会環境を分割し類別し、秩序づける認知作用であって、これによって人は多様な社会的行為を実行することができるといわれる。人は、環境や他者だけでなく自分自身も分類する。自己をカテゴリー化することによって、つまりある特定の社会的アイデンティティが自己において顕著になることによって、自己知覚や行動は内集団ステレオタイプの規範的となり、外集団の成員たちに対する知覚は外集団ステレオタイプのとなる。

同時に、内集団の成員としての自分と外集団の成員としての他者との間の比較、あるいは全体としての内集団と外集団の比較は、単に集団間の差異を最大にするようにさせるだけでなく、内集団にとって評価的有利性をうるように努めさせるという。それは、肯定的な自尊心を得ようとする人間の基本的動機である自己評価動機の観点から説明される。すなわち、ある特定の社会的アイデンティティが自己の中で顕著になった結果として、それが重要な自己評価機能を持ち、自らが所属する集団とその成員に対し内集団びいきをし、自分自身を有利にする集団間比較を達成、維持するための戦略をとろうとさせるのである。

上記の心理過程に関する理論化をうながしたのは、内集団ひいきや外集団差別を引き起こすような諸要因を最大限排除して構成された最小条件集団（e.g., Tajfel, Billing, Bundy, & Flament, 1971）とよばれる実験状況である。そこでは、ささいな一時的な基準による集団分け操作のみによって、そのどちらかに自身が割り当てられると、内集団バイアス（評価・行動において内集団を外集団よりも好む傾向）が引き起こされるという知見が繰り返し得られている。このことから、最小条件集団状況、すなわち被験者達が単に2つの異なる

る集団に属しているだけの状況が、集団間差別を引き起こす必要条件であることが示唆される。最小条件集団状況で操作されているのが、カテゴリー化である。他に手がかりのない状況では実験操作上の2つのカテゴリーが状況を秩序づけ、それに従い自分が属するほうのカテゴリーで自己を捉えることによって、もう一方のカテゴリーとの集団間行動を行うと考えられる。

1-1-2. 社会的アイデンティティと社会構造

以上のようにして、社会的アイデンティティ理論の節の冒頭で述べた前提から、1つ目と2つ目の原理が説明された。3つ目の原理である、「社会的アイデンティティが不満足なものである場合には、人は現在所属する集団を去り、より肯定的な別の集団に入ろうとするか、あるいは現在属する集団をより肯定的なものに変えようと努める」の具体的説明を導くために用いられるのが、社会的アイデンティティ理論が強調しているもう一つの点、社会移動に関する信念と社会変動に関する信念の区別である。

劣位集団（カテゴリー）の成員には、「否定的な社会的アイデンティティ」が植え付けられる。それは不快な状態であり、その状態を改善しようと個人を動機づける。個人は、様々な方法で、その改善を達成しようと試みる。たとえば、肯定的な差異性を得るために集団として利用しうる戦略は、社会変動である。つまり、劣位集団の成員が、自分たちの集団を優位な立場へ移動させる、もしくは集団間比較の次元や評価の意味を入れ替えたり、上位の比較対象から手を引き水平または下方の集団間比較を選ぶようにつとめることである。しかしながら、人は必ずしも劣位集団におかれたときに、その集団の一員として社会変動に従事するわけではない。劣位集団の成員となった者が、自分たちの集団から離れ、自分にふさわしいと考える集団の成員になろうとすることもある。これを、社会移動と呼ぶ。

社会変動と社会移動のどちらを利用しうるかは、集団間の境界の透過（通過）可能性に関する信念によって規定されるという。これは、人が自分の属する社会集団の成員性に何らかの事情で満足できないときに、個人的に別の社会集団に移動することが可能な柔軟さを、社会が持つと信じるか、逆にそのような柔軟さを社会が持たないと信じるかを意味する。前者を、社会移動に関する信念と呼び、後者を社会変動に関する信念とそれぞれ呼ぶ。つまり、社会移動に関する信念と社会変動の信念は、集団間の透過可能性の知覚の程度の両極に値する。そして、社会変動の信念が強いほど、人は集団間相互作用へ従事し、またそれが社会変動の信念を強めるとしている。

人は、社会的アイデンティティが不満足なものであるときに、社会移動に関する信念を持つあるいは持つことが可能ならば、現在所属する集団を去り、より肯定的な別の集団に入ろうとするだろう。一方、そのようなとき、社会変動の信念を持つならば、肯定的な差異性を得るための戦略は、認知的代替可能性の信念を伴うかどうかによって、さらに異なってくる。

認知的代替可能性とは、現状を変革させる実行可能な選択肢があるという信念を意味する。劣位集団にいる成員が自らの内集団の地位を正当でも安定したものでもなく、実際に上位への移行が可能であると信じているという集団間関係についての信念である。社会変動の信念が認知的代替可能性を伴わない場合は、つまり、満足が得られる集団に個人として移行することができず、また、現在属する集団の地位は変動しがたいと認知する場合、劣位集団の成員は社会的創造の戦略に頼ることになる。すなわち、彼らは集団間比較の次元を変えようとし、ある次元での彼らの位置の評価的意味を入れ替えようとし、上方の集団間比較から距離をおき、水平的または下方の集団間比較を選ぶよう努める。それに対し、社会変動の信念が認知的代替可能性を伴っている場合には、劣位集団の成員は、現在属する集団の地位を向上しようと直接的な集団間競争に関わっていくというのである。

言い換えれば、低地位集団の成員は、集団間の透過可能性が低く、集団間関係が変動する可能性があることと認知される状況においては、その集団の地位向上に動機づけられ、自己概念の中で社会的アイデンティティが顕現化すると言える。また、集団間の透過可能性を高く認知した場合には、個人の自己評価を維持・高揚しようという動機づけに基づき、能動的に属する集団を移行すると言える。

以上が社会的アイデンティティ理論の概説である。この理論は、研究対象となる現象を個人内の心理過程にのみ還元して説明するのではなく、それを現実の社会全体の権力関係や構造的要因、その具体的なあり方といった、現実の文脈のなかで理解しようという研究志向をもつ。このような志向性によって、さらに認知論的色合いを強めて集団過程一般を扱うべく拡張されたのが自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) である。

1-2. 自己カテゴリー化理論

自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) は、社会的アイデンティティ理論 (Tajfel &

Turner, 1979) の概念を発展させたものであり、社会的アイデンティティ理論と比べるとその内容において強調するところが異なっている。社会的アイデンティティに関する分析は、(利害対立のない場合の) 集団間差異化の説明をねらいとしたものであった。そこでは、人は肯定的な社会的アイデンティティを確立するために、自分の所属する集団を肯定し、他の集団と区別しようとする、という動機づけに関連した心理学的仮説が中心となっている。

それに対し、自己カテゴリー化理論は、集団間差異化といった、ある種の集団行動に関する説明ではなく、いかにして個人が集団の一員として行動できるかを説明することに焦点をあわせている。そのために、集団行動の認知的基礎としてのカテゴリー化過程の作用をより深く詳細に練り上げたものであり、マクロな社会的な集団間関係だけでなく集団内過程にも焦点を当てている (Hogg, 1992: 廣田・藤沢 (監訳), 1994, p.115)。自己カテゴリー化理論は、心理学的集団の根底にある基本的な過程に関する一般的な仮説、その過程の先行条件およびその過程がもたらす結果に関する一連の精緻な仮説から成る。

自己カテゴリー化理論の主張を極端に要約して述べれば、(1) 個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは互いに相容れないものであり、(2) どちらのアイデンティティが優勢になるか (自己カテゴリー化) は、状況の要請、たとえば顕現化した文脈の手がかりや刺激の相対位置によって半ば自動的に決まる、というものである。以下では、「1-2-1. 一般的な仮説」において、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティとの関係についての考え方、また、社会的アイデンティティが自己の中で顕現化したときの、自己カテゴリー化における心理過程に関する仮説を概説する。次に、「1-2-2. 自己カテゴリー化の規定因に関する仮説」において、本論文が問題としておりその改善を図ろうとしている、自己カテゴリー化の規定因についての仮説を説明する。つまり、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティのうちどちらがどのような場合に自己の中で優勢になるのかに関する自己カテゴリー化の仮説について述べる。

1-2-1. 自己カテゴリー化理論の一般的な仮説

自己カテゴリー化理論では、以下の仮説を立てている (Turner, 1987: 蘭・磯崎・内藤・遠藤 (訳), 1995, p. 65)。

仮説 1. 個人的アイデンティティを決定する自己概念のレベルの顕現化と社会的アイデンティティを決定する自己概念のレベルの顕現化は、逆の関係にある (機能的に拮抗する)。

自己知覚は、独自の存在として自己を知覚することを一方の極とし、内集団カテゴリーの一員として自己を知覚することを他方の極とする連続体上で変化する傾向がある。¹

仮説 2. 内集団・外集団カテゴリーの顕現化を高める要因（自己カテゴリー化の規定因）は、自己と内集団成員との類似性・自己と外集団成員との差異性を高める。そして、当該の内集団成員であると定義づけられるステレオタイプに基づき、自己知覚を脱（非）個人化（depersonalization）する。

これら 2 つの仮説で明らかとなっており、自己カテゴリー化理論は個人の自己概念が、独自の自己から、他のすべての集団の成員とおなじであり、全ての外集団の成員とは別のものであるという完全に脱個人化された自己への抽象レベルまで変動すること、ならびに個人でいることと脱個人化することとの間にはダイナミックな緊張が存在すること（Brewer, 1991）を強調している。

これらの仮説の前提として、自己カテゴリー化理論では、「カテゴリー化は、刺激同士の比較に依存しており、メタ対比の原理に従う」としている。まず、カテゴリー化と比較は相互に依存しあう。これは、ある文脈において、‘あるカテゴリー（まとめ）内の類似’と‘対になるカテゴリーとの差異’が最も顕著である次元での比較を通して自己カテゴリー化は形成される。しかしながら、比較が行われるということは、あるカテゴリーとそれと対になるカテゴリーが、より高度な抽象レベルでは、同じ物としてカテゴリー化されていることが必要なのである。したがって、この理論は一つ上の抽象的レベルでは類似していることを確認するための比較が存在するという、論理的には無限の繰り返しを前提としている。そして、比較対象となった当該次元に関連する、まとめ間の差異の方がまとめ内の差異よりも小さいと認知されるとき、そのまとめが実態あるものとしてカテゴリー化される傾向があるとする。さらに、そうした自己カテゴリー化の顕現化は、まとめ内の類似性とまとめ間の差異性の知覚を強調させる（Tajfel, 1969; Tajfel & Wilkes, 1963）。それと同時に、より高次のレベルに存在するまとめ間の類似性および、低次のレベルに存在するまとめ内の差異は、知覚的に割り引かれる。このように認知的に相反

¹ 自己カテゴリー化理論では、社会的な自己概念が他者との関係でどのようにカテゴリー化されるかを次の 3 つのレベルから考えている。人間性という上位カテゴリーレベル（人間としてのアイデンティティを決定する）、内集団-外集団という中間的レベル（社会的アイデンティティを決定する）、自己を内集団の他の成員から別の独自のものと位置づける下位レベル（個人的アイデンティティを決定する）である。しかしながら、Turner (1987) 自身がそのように扱っているように、本論文においても議論を単純化するために、これらのレベルのうち人間的レベルを除いて話を進める。

するものであるがゆえ、個人的アイデンティティとある社会的アイデンティティの顕現化の間には、機能的拮抗が存在すると考えられているのである。

ここで、「自己カテゴリー化」とは、人が自分自身を何らかの社会集団ないし社会的カテゴリーの一員として範疇化する作用をさす。言い換えれば、自己カテゴリー化の作用によって個性的で独自の特徴をもった個人としての自己意識が弱まると同時に、当該のカテゴリーの一員としての意識が高まる。自己カテゴリー化によって、自己と内集団の成員との知覚された類似性を強調する。これが、脱個人化ということの意味である。なお、自己カテゴリー化理論にとって自己知覚の「脱個人化」という言葉には否定的な意味は含まれてはいない。「非人間化」または「没個性化」という意味はなく、またアイデンティティの喪失を述べたものでもない。これは、アイデンティティのレベルの文脈的な変化を単純に指したものである。自己を他の内集団成員とステレオタイプ的に交換可能なものとして自分自身を知覚するようになる、「自己ステレオタイプ化」の過程のことを脱個人化という。

以上のように自己カテゴリー化理論では、ひとたび自己カテゴリー化が引き起こされると、脱個人化によって、自己イメージや他者に対する認知・判断・行動など、さまざまな面で集団成員としての変化が生じると説明される。

1-2-2. 自己カテゴリー化の規定因に関する仮説

以上のように、自己カテゴリー化理論では、集団現象の基本的なメカニズムはカテゴリー化の認知過程であると説明している。さらにこの理論は、あるカテゴリー化の規定因についても認知過程を用いて説明している。一定の社会的カテゴリーがいかんにして認識され、またそのカテゴリーによって自己がどのように規定されることになるかを定めるものとして、「メタ対比原理」と「カテゴリーの顕現性 (salience)」の作用を想定している。この想定においては、自己カテゴリー化は、基本的には文脈依存的なものと捉えられている。ただし、以下に述べるように、自己カテゴリー化理論においても動機づけといった個人の内的な要因もカテゴリー顕現性に影響するため、カテゴリー化の規定因となりうると述べている。ここで重要となるのは、自己カテゴリー化理論が、ある文脈において、メタ対比やカテゴリー顕現性の作用によってあるカテゴリーが顕現化すれば、その文脈の内容がどのようなものであれ、必ず社会的アイデンティティが自己の中で優勢になると考えているということである。本論文は、自己の中で社会的アイデンティティと個人的アイデンティティのうちどちらがどのような場合に優勢になるのかを明らかにすることを目的とするため、

「メタ対比原理」と「カテゴリーの顕現性」が自己カテゴリー化に影響する作用に関して以下により詳細に説明する。

メタ対比の原理とは、先にも述べたが、一定の重要な比較次元上で、ある刺激のまとまり内の相互の間の差異が、そのまとまりと別のまとまりとの間の差異に比べて小さければ小さいほど、そのまとまりが実体として認識されるというものである。メタ対比原理に基づいて認識された社会的カテゴリーが、自己をその一員として範疇化するカテゴリーの候補となるわけである。

また、こうして認識された社会的カテゴリー成員としての自己意識が実際に活性化するためには、当該状況におけるそのカテゴリーが当人にとって顕著なものでなければならぬというのが顕現性の考え方である。顕現性の大きさは、当人にとって、当該のカテゴリーが他のカテゴリーと比べてどれだけ用いられやすい状態にあるか（相対的接近可能性：relative accessibility）と、そのカテゴリーが実際の心理的環境にどれだけ合致するものか（適合性：fit）の組み合わせによって決まるとされる。この「接近可能性×適合性」の公式は、Bruner (1957) の研究に基づいたものであり、知覚や認知や行動を支配する自己概念化の文脈的顕現化を明確にしている。

接近可能性は、ある特性をもった入力刺激がカテゴリーとして符号化されるあるいはそれとして認められるその準備状態と定義される (Bruner, 1957)。カテゴリーが接近可能であるほど、関連するカテゴリー化を引き起こすのに必要な入力は少なく済み、カテゴリー内容に合致すると知覚される刺激特徴の幅が広く、入力刺激に適合する他の接近可能なカテゴリーが覆い隠される傾向がある。接近可能性の2つの主要な規定因は、環境のなかの何と何とが結びつくかというこれまでの学習と、その人の現在の動機であるという。

また、適合性とは、カテゴリーを定義する基準と現実とが実際どの程度合致するかということである。つまり、特定のカテゴリーのもつ相対的接近可能性はそもそも個人的な経験や期待、目標などによって左右されるものであり、このことは個人の心理的環境についても同様なので、このような形での顕現性の概念化は社会的認知研究で一般的に用いられるものよりも主観的色合いの強いものになっている (柿本, 2001)。

以上より、自己カテゴリー化理論では、文脈的にメタ対比（集団内の類似と集団間の差異）が際だっていること、集団内-外に対して持つプロトタイプとその文脈で起こることが一致していること、その集団への接近可能性が高いこと、がカテゴリー化の規定因となりうるとしている。それらの条件が存在すれば、人はその集団に基づく社会的アイデンティ

ティで自らを捉えやすく、そのカテゴリーと対になるカテゴリーとの集団間相互作用に従事しやすくなると主張している。

1-3. 自己カテゴリー化理論の問題点

自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) によると、集団内の対人関係が欲求の相互満足をもたらすから集団を形成するのではなく、集団形成によって相互依存が生じてくるのであるという。Hogg (1992: 廣田・藤沢 (監訳), 1994, p.115) によれば、“この理論は、集団行動の認知的基礎としてのカテゴリー化過程の作用をより深く詳細に練り上げたものであり、マクロな社会的な集団間関係よりも集団内過程にいつそう焦点を当てたものである。そのため、この理論は、動機的な概念としての自尊心や社会変動のためのマクロ社会的戦略にはあまり言及していない”という。しかしながら、その点について批判し、再構築を図ろうとする研究は少なくない。

たとえば、遠藤 (1999) は、自己カテゴリー化理論が認知の重要性のみを強調しており、動機づけには付随的な位置しか与えていないものである点で不充分であると指摘している。以下に彼女の指摘の一部を引用する。

“自己カテゴリー化理論は、知覚・認知を極めて重要視しており、情動・動機づけには付随的な位置しか与えていないが、自尊感情が自己と他者とのよい関係維持に根ざすものならば、どのような他者となら自分は関係を保ちたいと思うかという、他者選好についての動機的側面を解明することが新たな課題となろう。それは、人がなぜある種の社会的アイデンティティを選好しある集団に留まろうとするのか、あるカテゴリー化を好むのか、そしてそれがどのような意味を人にもたらすのかなど、個人と社会の関係についての自尊感情研究の側からアプローチする道を開くに違いない。”

また、自己カテゴリー化の再理論化が進む欧米では近年、個人が社会的アイデンティティと個人的アイデンティティを共に維持・高揚することを目指し、自己と環境に対して能動的に働きかけている可能性が示されつつある。

Spears (2001) は、近年示された結果をレビューし以下のように指摘している。自己カテゴリー化理論は、社会的アイデンティティ理論を基に、状況が与える心理的影響を明白にしたのだけれども、それを引き出しうる動機づけや、それが与える戦略的機会の観点における文脈の役割は扱われていないという。そして、彼は個人的アイデンティティと社会

的アイデンティティは独立していることを認めた上で、それらが文脈依存的に拮抗するだけでなく、相互作用する可能性を主張している。また、競合する自己の各レベルのうち一つを意識的に戦略的に選択する過程、もしくは、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティがお互いを補足しあい規定し合う過程がありうることを主張し、また、そのような過程を導く状況要因の特定を試みている。

つまり、自己カテゴリー化理論では、自己の顕現化の過程は比較的自動的であり、意識もしくは動機の介入はほとんどないだろうと仮定されているが、人は、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティを調和しようと努めること、それができないときには、戦略的な自己管理によって、どちらかのアイデンティティを自ら選択するというのである。

戦略的動機が引き起こされる状況として、Spears (2001) は、どちらかのアイデンティティが脅威づけられているときや、自己の行為の観客を考慮する（自己呈示）ときなどをあげている。他方、両自己がお互いを補足しあい規定しあえる状況としては、それぞれの自己の属性が一致しており両立可能な場合（たとえば、個人的な特性が集団の特性・規範と一致している場合）、もしくは、共通の利益が存在する場合（たとえば、集団から個人として必要とされている場合）であるとしている。

自己カテゴリー化理論へのこれら2つの批判は、自己カテゴリー化理論が文脈の認知的な影響のみを重要視しており、集団文脈が個人にどのような意味をもたらすのか、また、個人的アイデンティティがどのような状態にあるのかといった個人内過程を軽視しているとするものである。そして、自己カテゴリー化の決定において、個人が社会的アイデンティティと個人的アイデンティティを共に考慮し、自己評価全体を維持・高揚しようとする動機づけが重要な役割を果たしているはずだと主張しているのである。

上記の指摘を考慮し、本論文では下記の2点を検討することを通じて、自己カテゴリー化理論の改善を試みる。(1) 自己評価に関する動機づけが自己カテゴリー化に影響を及ぼす過程が存在する。(2) 個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは共存する。したがって、両アイデンティティを考慮し、自己評価全体を高めようという動機づけが自己カテゴリー化に影響を及ぼす過程が存在する。

2. 本論文の目的と基本仮説

2-1. 自己カテゴリー化理論の再検討に関する目的と立場

以上で述べてきたとおり、本論文では、自己カテゴリー化の規定因について個人の自己評価への動機づけの観点から見直し、自己カテゴリー化理論を拡張することを目的とする。本論文は、自己カテゴリー理論が述べている、状況の要請が自己カテゴリー化を即決する過程を否定しようとするものではない。自己カテゴリー化が状況のみによって決定されない場合がありうること、それはどういったものであるのかを明確に示すことを目指す。

ここで重要となるのが、個人のどのような動機づけが自己カテゴリー化の規定因としてどの時点で機能するのかである。

本論文では、個人の自己評価への動機づけの影響過程について以下の2点からアプローチする (Figure 1-1 参照)。

アプローチ1 ; 一つは、集団間文脈の内容とそれを捉える個人の内的要因が個人の自己評価への動機づけに影響を及ぼし、それが自己カテゴリー化レベルを決定するという過程の検討である。集団間文脈の内容とそれを捉える個人の内的要因が、個人が個人的もしくは社会的のどちらのアイデンティティで自己評価を維持・高揚させようと動機づけられるのかを決定すると考える。自己カテゴリー化理論が述べているように、集団間文脈の顕現化が、必ずしも社会的アイデンティティを自己の中で優位にさせるわけではないだろう。その集団間文脈の顕現化と自己カテゴリー化の関連を調整するものとして自己評価への動機づけを捉えるという視点からのアプローチである。

アプローチ2 ; もう一つは、集団間文脈に由来するものではなく、より個人的なアイデンティティへの自己評価の維持・高揚の動機づけが、能動的な自己カテゴリー化をもたらす過程の検討である。つまり、何らかの個人的アイデンティティへの脅威を回避もしくは回復させる戦略として、個人は自らをカテゴリー化することがあるだろう。自己カテゴリー化理論では、自己カテゴリー化の過程において状況の要請を重要視している。しかしながら、そのような要請がない場合においても、自らをあるカテゴリーの一員と捉え、それによって、自身の自己評価の維持・高揚を図る場合もあるだろう。個人的アイデンティティに由来する自己評価への動機づけという観点からのアプローチである。

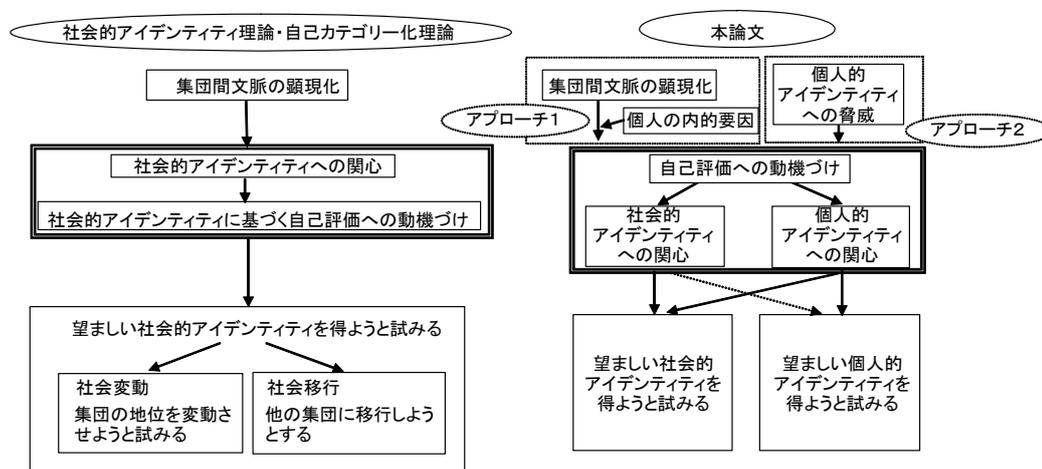


Figure 1-1. 社会的アイデンティティ理論と自己カテゴリー化理論の仮説と本論文の主張の相違点の図式

note. 本論文の主張における点線の矢印は想定しているが検討を行っていない

本論文は、上記2つのアプローチから、自己カテゴリー化の規定因を見直し整理することを目的とする。つまり、どのような場合に個人がどちらのアイデンティティへの関心を高めやすいのかといった、自己カテゴリー化理論の精緻化を目指す。改善点の1点目にあげた、自己評価への動機づけがアイデンティティを決定するという過程の存在を示すことを目的とする。Figure 1-1において2重線で囲まれたところが、社会的アイデンティティ理論と自己カテゴリー化理論の2つの理論と本論文の主張が異なる点である。したがって、本論文では、文脈に応じて、個人が自己評価への動機づけを基に、自己をどのように捉えるかを定める過程を実証する。

また、自己カテゴリー化理論の改善点の2点目にあげた、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティが併存する可能性に関しては、主に2つ目のアプローチにおいて検討する。個人が自己評価への動機づけをもとに、文脈に応じた自己の捉え方を選択することができるのであれば、個人の自己評価を全体的に維持・高揚することを目指し、両アイデンティティを同時に考慮した脅威回避戦略に取り組む可能性があると考えられる。社会

的アイデンティティと個人的アイデンティティを複合的・相補的に用い、自己評価全体を高めていこうとする過程を示すことが目的である。

たとえば、文脈が集団間関係を顕現化させ、社会的アイデンティティを自己の中で優勢にさせるものであったとしても、人がその集団間関係から自己を評価するよう動機づけられない場合、他の集団の一員として社会的アイデンティティの維持高揚を図るだけでなく、個人的アイデンティティで自らを捉えることもあるだろう。また、逆に、文脈において、集団間関係が顕現化されていなくても、ある集団の一員として自らを捉えることが自己評価において必要だと思える場合は、その動機に基づき、ある集団に自己をカテゴリー化することもあるだろう。さらには、複数のカテゴリーを用いて自らを捉えることによって、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティを共に維持・高揚しようと試みることもあるだろう。

本論文では、これらの可能性を例証することを目的としている。上記2つのアプローチによって、社会的アイデンティティが顕現化しやすいのはどのような場合であるのか、一方、個人的アイデンティティが顕現化しやすいのはどのような場合であるのか、さらには、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティを同時に考慮し自己評価維持高揚に取り組むのはどのような場合であるのかを、整理する。そして、集団文脈や個人内要因によって引き起こされる自己評価への動機づけが、これらの過程に影響を及ぼしていることを示す。

2-1-1. 社会的アイデンティティ理論の主張との相違

自己カテゴリー化の規定因としての動機的要因に関わる知見として、社会的アイデンティティ理論の3つ目の原理がある。そこでは、劣位集団に焦点をあて、社会的アイデンティティの脅威の回避動機が、社会移動、つまり、属する集団・カテゴリーを移行させる場合があると述べている。このように社会的アイデンティティ理論においては、動機的な側面の存在を明らかにし、その過程を整理している。その際、集団間文脈とそれを個人がどのように捉えているかが重要になると述べている。にもかかわらず、社会的アイデンティティ理論におけるこのような視点は、自己カテゴリー化理論では重視されていない。そのことが自己カテゴリー化理論に対する近年の見直しにつながっていると考えることもできる。

本論文は、社会的アイデンティティ理論の3つ目の原理と同じような視点を持つ。しか

しながら、以下の点を考慮しているという点でそれらの研究とは異なる側面を持つ。社会的アイデンティティ理論で述べられている現象は、その理論が集団行動の解明をめざすという目的のため当然であるが、社会的アイデンティティに基づいた一連の行動に関するものである。そこでは、社会的アイデンティティが自己の中心であるとき、集団間比較によって社会的アイデンティティ維持・高揚への欲求が満たされない場合、人は、他の集団に移行する、もしくは、より劣位な集団を用いてそれを満たそうとすると述べている。

しかし、本論文は、社会的アイデンティティ理論の知見に以下の2つの視点を新たに取
り入れている。

1つ目に、アプローチ1において、社会的アイデンティティ理論からは社会的アイデンティティへの関心が高められると予想されるような文脈において、社会的アイデンティティではなく個人的アイデンティティへの関心が高まる可能性がある。社会的アイデンティティが脅威づけられているように思われる状況におかれても、集団間文脈がいかなるものなのか、また個人がどのように集団間関係を捉えているのかによっては、社会的アイデンティティを維持高揚するための何らかの対処を行わない場合がありうると考えているのである。つまり、属する集団が劣位集団であることを顕現化されたとしても、認知的代替可能性（現状を変革させる実行可能な選択肢があるという信念）を伴わない場合、集団内における個人としての評価により関心が高まるだろうと考えている。社会的アイデンティティの原理では、そのような場合、劣位集団の成員は、集団間比較の次元を変えたり、水平的または下方の集団間比較を選ぶというように、社会的アイデンティティを何らかの形で回復するよう努めるという。しかしながら、そのような動機づけが高まらない場合がある。すなわち、社会的アイデンティティにとらわれそれを回復するように動機づけられるのではなく、個人的なアイデンティティへ関心移行することがありうる（Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002）。

また、社会的アイデンティティがすでに高い水準で保証されているような状況において、人はさらに個人的アイデンティティの高揚をも目指そうとする場合がありうるだろう。社会的アイデンティティ理論では、人は自らの社会的アイデンティティを高い水準で維持しようとし、集団間・集団内の種々の行動に従事すると考えている。この考えだけにに基づけば、高地位集団の成員は、すでに社会的アイデンティティの高揚の動機づけは満たされているため集団間行動を行わないという仮説がたてられるに留まっている。集団間行動に従事しないとして、では、次にどうするのかについては明確に予想されていないのである。

ここに、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの選択は文脈依存的にのみ行われるわけでないという視点を取り入れることでさらなる仮説が成り立つ。個人が、自己評価全体を維持・高揚しようという動機づけに基づいて自己の捉え方を能動的に選択できるのであれば、高地位集団の成員は、集団間文脈におかれても、個人的アイデンティティへの関心を高め、それを維持高揚するような個人間関係に取り組む可能性が考えられる。

2つ目に、アプローチ2より、個人間関係からもたらされた個人的なアイデンティティへの脅威が、集団行動に影響するという視点をもつ。社会的アイデンティティ維持高揚への動機づけが社会移行のようなカテゴリーの選択を迫るだけでなく、個人的なアイデンティティ維持高揚への動機づけも自己カテゴリー化に影響をもたらすということである。たとえば、Gaertner, Sedikides, and Graetz (1999) は、個人的アイデンティティが脅威づけられている人は、集団との同一視を高めたり類似性を強調したりすることを示している。また、Mussweiler, Gabriel, and Bodenhausen (2000) は、優れた内集団成員によって個人的アイデンティティが脅威づけられている高自尊心者は、その成員と共有しないカテゴリーへの同一視を高める傾向のあることを示している。これらは、個人的アイデンティティを維持・高揚しようとする動機づけが自己カテゴリー化に影響することを示すものである。つまり、自己カテゴリー化や集団行動の生起において、社会的アイデンティティ維持・高揚動機だけがその誘因になるとは限らないと考える。

したがって、本論文は、自己評価の維持・高揚への動機づけが根源であるという主張に基づき、社会的アイデンティティだけに注目し議論が展開されてきた社会的アイデンティティ理論に、個人的なアイデンティティを含めてそれらの相互影響を考え直すことにより、先の社会的アイデンティティ理論の主張を補強するものであるといえよう。

2-1-2. 自己カテゴリー化理論の主張との相違

ここで、自己カテゴリー化の規定因として個人の内的要因に関わる動機づけがどの時点で作用するのかが重要な問題となる。アプローチ1においてあげた、個人の内的要因が自己カテゴリー化に及ぼす調整効果について、自己カテゴリー化理論はそれに類似した影響について述べている。それは、カテゴリー顕現性を規定する接近可能性と適合性に関わるものである。あるカテゴリーが個人にとって顕現化する際に、個人の内的要因が影響するという。つまり、動機づけが集団間のメタ対比の顕現化の際に自己カテゴリー化に影響する過程がありうるとしている。それに対し、本論文では、集団間文脈の顕現化が同程度で

あったとしても、顕現化した文脈の内容によって、さらには、個人がそれをどのように捉えるかによって、自己評価への動機づけの方向が異なると考える (Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002)。これは、メタ対比の顕現化を介した動機づけの影響とは異なるものである。

また、アプローチ2について考える際、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの共存の可能性について考慮することが重要な示唆を与えるだろう。先述したように、近年、個人が社会的アイデンティティと個人的アイデンティティを共に維持・高揚することを目指し、自己と環境に対して能動的に働きかけている可能性が示されつつある (Spears, 2001)。社会的アイデンティティの好ましさを維持・高揚するとともに、個人的アイデンティティの好ましさも維持・高揚していくことができれば、それは個人の自己評価の全体を高く維持でき、最も高い適応をもたらすはずである。そのような自己の状態を得たいという動機づけによって、人が能動的に自己の捉え方を変化させたり、望ましいカテゴリーへ自らのアイデンティティをシフトさせていく過程は十分に考えられる。したがって、本論文では、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティを共に維持・高揚できるよう、自己をカテゴリー化しようとする可能性についても探索的に検討する。

本論文では、以上の目的や前提を基に自己カテゴリー化における自己評価への動機づけの影響を検討する。

2-2. 集団内の個人間関係の理解に関する目的

加えて、本論文は冒頭で述べたように、優れた内集団成員に関わる集団内の現象の解明も目的としている。本論文は、自己カテゴリー化理論の見直しをその第一の目的においている。しかし、自己カテゴリー化理論に、個人的・個人関係的な視点を考慮するという本論文は、逆を言えば、個人間関係の理解に自己カテゴリー化理論の視点を取り入れるということになる。すなわち、集団間文脈と個人間文脈のインターフェイスの理解という意味でも貢献しうるものであると考える。自己カテゴリー化理論が示した、自己カテゴリー化における心理過程は、個人間関係の理解において非常に有益なものとなりうる。冒頭で述べたような、優れた内集団成員に関する、一見矛盾するかのような現象を統合的に説明することを可能とする。したがって、本論文は、個人間文脈にのみ焦点を当てた社会的比較研究では十分に説明できなかつた集団内における個人間関係について、集団間文脈を取り

入れることでさらなる理解を促すことも目的とする。

これらの視点からの検討は、集団内での個人間関係や集団全体の評価の向上という意味で実践的な貢献の可能性を有するだろう。現実の社会で見られるように、優れた内集団成員を排斥してしまうことは、その集団全体にとっても、個々の集団成員にとっても、大きなデメリットを持つ。たとえば、優れた人を排斥した後の集団では集団成果があがらず、集団全体に対する評価を高揚することが困難になる。また、属する集団の評価が高まらない結果、その集団成員であるという側面での自己評価も高めることができないだろう。さらに、せっかく優れた成果を得たにもかかわらず、他者にそのことを知られる場合には、優れた成果を得た本人の快感情が低くなることも知られている (Brickman & Bulman, 1977)。自分が優れた比較対象になることによって、他者からネガティブな反応を示されることが予測されるためである。さらには、わざと優れた成果をあげないようにしたり (Pappo, 1983)、能力を他の成員に伝えないようにしたりする場合もある (Arroyo & Zigler, 1995)。他者より優れた成果を得ることは、個人的な満足を得ることができる反面、その人が属する集団の対人関係において問題を生じさせる可能性があるからである。そして、人は、自分が優れた比較対象 (他者からの個人間上方比較の対象) になると、他者にネガティブな影響を与えてしまうという信念を持つという。このような信念は、優れた成果を得た人を目の当たりにしたときの自分自身のネガティブな感情や、優れた内集団成員に対する他者のネガティブな反応を学習した結果であると考えられる (Juola-Exline & Lobel, 1999)。

ここで述べている知見は、いずれも、優れた内集団成員を排斥することが、個人的な自尊心の脅威から逃れるというポジティブな効果を持つ一方で、集合的・社会的には、種々のネガティブな影響も有することを示している。優れた内集団成員を排斥することで脅威を低減するのではなく、自己を脅威にさらさず、また、集団の評価を高めることのできる条件を整備する必要がある。本論文は、このような問題に対して重要な示唆を与える可能性を持つと考える。どのような場合に、個人が自らの能力を活かしながら、集団・組織に適應することができるのだろうか。また、集団・組織は、個人にとってどのような働きかけをすれば個人の能力を活かし、集団・組織全体の成果を高めることができるのだろうか。本論文はこのような答えを提案するという実践的な貢献も目指す。

以上の目的のため本論文では、自己カテゴリー化過程の再検討に取り組む。その際、自己関連性が高い課題において優れた内集団成員の存在が、他の内集団成員の認知・感情状

態・その成員への態度に及ぼす影響を検討する。それは、その影響過程がどちらの自己が顕現化しているのかを反映していると考えられる。以下に、その根拠について説明する。

2-2-1. 社会的比較

本論文の実証的な検討において重要な枠組みとなるのが社会的比較に関する枠組みである。社会的比較とは、個人の態度、信念、行動と、他者のそれらとの間の比較を意味している。Festinger (1954) が最初に明らかにしたのは、われわれが自分たちの所信の正確さを確認するために直接現実を参照することができないときにのみ、社会的比較に頼るというものであった。この Festinger (1954) の考えに基づき、個人間の関係から自己を捉える社会的比較の過程、すなわち個人間比較の過程をより詳細に説明しようとしたのが、Tesser (1988) の自己評価維持モデルである。

このモデルによると、人は他者と自己を比較する際に課題の重要性・遂行レベル・他者との親密性を調整することにより、自己評価を維持・高揚させるという。比較対象である他者との心的近さは、2つの異なる評価過程をもたらす。比較過程 (comparison process) と反映過程 (reflection process) である。比較過程においては、親密な他者が自己評価にとっての基準として用いられる。このため、比較過程が生起すると、人は自分よりも劣った他者との比較である下方比較によって肯定的な感情を感じ、状態自尊心が高まりやすく、逆に、自分よりも優れた他者との比較である上方比較によって、否定的な感情や状態自尊心の低下を経験しやすいという。このため、人は近しい他者と自己との比較過程が生起した際には、下方比較が可能な他者との意味のある関係を求めることで、比較による脅威を低減しようという戦略をとる。

一方、反映過程では親密な他者は自己評価の基準としては見なされず、彼ら／彼女らの行為を通して、彼ら／彼女らが示す特質が自己を表象するものとして置き換えられる。そのため、反映過程が活性化されたときには、上方比較は自己評価に脅威を与えるものではなく、状態自尊心を高揚させるものとなり、逆に、下方比較は状態自尊心を低下させるものとなる。そのため、反映過程が活性化されたときには、個人は上方比較が可能な他者を求める。

ここで、社会的比較が比較過程・反映過程のどちらを導くかは、比較される能力の自己関連性 (self-relevance) によって異なるとされている。自己関連性の高い能力において他者との比較が行われるときには比較過程が活性化され、逆に、自己関連性が低い能力に関

して自己を評価するときは、反映過程が活性化されると考えられている。

以上のような自己評価過程を集団文脈の中で捉えた場合、自分にとって重要な課題における優秀な内集団成員の存在は、個人の自己評価に大きな脅威をもたらす可能性が指摘できる。なぜならば、内集団成員は外集団成員よりも類似した者としてみなされ、より有益な比較の基準になりやすいため、内集団は自己評価にとっての準拠枠になりやすいからである。事実、人は、内集団の人々との関係の中で自己の望ましさを維持・高揚することへの関心を高くもつ傾向がある (Brewer & Weber, 1994; Goethals & Darley, 1987)。したがって、集団内の個人間上方比較状況におかれたとき、人は大きな脅威から自己を守ろうとし、脅威をもたらす優れた内集団成員を拒否するという過程が考えられる。優れた内集団成員への拒否的態度の表明は、個人にとっての脅威回避戦略になるのである。

2-2-2. 集団内での個人間比較と自己カテゴリー化との関連

以上のように、社会的比較を個人間関係からのみ捉えるならば、自己関連性の高い課題における優れた内集団成員の存在は自己にとって脅威の源泉となりうることになる。

しかしながら、ここに集団間文脈まで視野にいれ、集団内の個人間関係、社会的比較過程を考えるならば、また異なった予測が導かれる。一例として、内集団が他の集団とその重要課題において競い合っている場合を考えてみよう。このような場合、優れた内集団成員の存在は、内集団全体を高揚させる源泉になりうる。つまり、ある内集団成員の得た優れた成果によって、人は外集団に対する内集団の優位性ないしは優位になりうる可能性を確認することができるのである。そのため、優れた内集団成員は排斥の対象ではなく、より積極的に受容しようとする対象になると予測される。

先にも述べたように、自己評価の基として、個人的なアイデンティティと社会的なアイデンティティとの間の差に対応するのは、個人間と集団間の社会的比較である。個人的なアイデンティティが顕現化しているときは、個人は自分自身の能力を、その個人に似た他者のパフォーマンスとの比較を通して評価する (Festinger, 1954)。一方で、社会的アイデンティティに従事しているとき、人は、より集合的な結果に注意を払い、個人間よりも集団間へその関心を移行させる (Brewer & Weber, 1994)。この場合、自己評価は、外集団との比較における内集団の相対的な立場に由来するはずである。

社会的アイデンティティ理論や自己カテゴリー化理論によれば、人はあるカテゴリー化された集団へのアイデンティティを肯定的なものとするため集団間の社会的比較に従事す

ると述べている。そして、社会的・集団アイデンティティ²が自己概念の中心であるとき、集団アイデンティティを維持・高揚することへの関心が高まり、同時に、自己と内集団成員とを交換可能なものとして捉えるようになるという。このような状態にある成員にとって、他の内集団成員は自らの集団の評価を左右するものになりうる。

このとき、他の内集団成員は、自己評価維持モデル (Tesser, 1988) でいう反映過程をもたらすものになる。人は、集団アイデンティティが優勢になることによって、他の内集団成員の成果との区別が不明確になり、内集団成員が得た自分より優れた成果をまるで自分が得たかのように捉えるようになるのである。言い換えれば、優れた内集団成員は状態自尊心を高揚させるものとなり、逆に、劣った内集団成員は状態自尊心を低下させると考えられる。

これまで述べてきたことを要約すると次のようになる (Table 1-1 参照)。個人的アイデンティティと社会的なアイデンティティのうちどちらが顕現化しているかによって、近い他者の個人に対する影響のあり方が異なる。つまり、自己の中で個人的アイデンティティが顕現化しているときに、自己関連性が高い課題における集団内での個人間比較が行われると、比較過程が生起する。その結果、劣った内集団成員との比較よりも優れた内集団成員との比較によって、内集団の他の成員は、自尊の低下やネガティブな気分を報告し、その優れた内集団成員に対して拒否的な態度をとるだろう。このような効果がみられることを比較効果と呼ぶ。一方、社会的アイデンティティが顕現化しているときに、それが行われると、反映過程が生起する。その結果、劣った内集団成員との比較よりも優れた内集団成員との比較によって、内集団の他の成員は、自尊心の高揚やポジティブな気分を報告し、その優れた内集団成員に対して受容的な態度をとるだろう。このような影響が見られることを反映効果と呼ぶ。

社会的比較における上記の予測を逆から捉えれば、集団内での個人間比較によってどちらの効果が示されるかを知ることによって、そのとき、どちらのアイデンティティが自己の中で顕現化していたかがわかる。そこで、本論文では、自己関連性が高い課題における集団内での個人間比較が及ぼすそれらの影響を用い、自己カテゴリー化レベルの指標とする。

² 社会的アイデンティティの呼称は研究者によって様々であり、集合的アイデンティティ・集団アイデンティティなどとも呼ばれる。本論文においてはその違いを特に重視していない。本論文のなかでは、社会的アイデンティティのうち、ある特定の集団にもとづいたアイデンティティを集団アイデンティティと呼ぶ。

Table 1-1. 集団内での個人間比較と自己の捉え方との関連

	自己の捉え方	
	社会的アイデンティティへの関心の高まり	個人的アイデンティティへの関心の高まり
内集団の成員との個人間比較における反応	反映過程	比較過程
優れた人との比較における反応 (個人間上方比較)	状態自尊心の高揚 ポジティブ感情の生起 受け入れ傾向の高揚	状態自尊心の低下 ネガティブ感情の生起 受け入れ傾向の低下
劣った人との比較における反応 (個人間下方比較)	状態自尊心の低下 ネガティブ感情の生起 受け入れ傾向の低下	状態自尊心の高揚 ポジティブ感情の生起 受け入れ傾向の高揚

ここで、内集団とは自分の所属する集団である。人は、日本、県、性別、学校、学校のクラス、クラブ、友達、など様々な複数の内集団をもつ。これらのうちどの内集団の一員として自己を捉えるか、どの集団を自分にとっての内集団であると認知するかは、場合によって異なりやすい。自己カテゴリー化理論が述べているように、その文脈によって顕著である集団を人は内集団と認識する傾向がある。たとえば、クラス対抗のリレー大会に参加しているときには、自分のクラスが内集団として認識されやすい。また、学校に通っているときに、他の学校の制服を着た生徒達とすれ違ふと、自分が通う学校を内集団として認識しやすいし、テレビで他の国の情報が放映されているときには日本という国を内集団として認識しやすい。このように、個人にとって、内集団は複数存在し、場合によって異なるものである。そこで、本論文では、調査、実験において、文脈的に顕現化するよう操作した集団を内集団と呼び、その集団の他の成員を内集団成員と呼ぶことにする。

2-3. 本論文における基本仮説

自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) によれば、内集団・外集団の強力なメタ対比を生じさせる集団間相互の葛藤や競争が、社会的アイデンティティを顕在化させると考えられる。逆に、外集団との比較が目立たない場合には、個人的アイデンティティが顕現化すると考えられる。したがって、平時には個人的アイデンティティが優位となるために、内

集団が準拠枠として機能し、他の内集団成員は自己評価の基準となり比較過程が生じやすくなる。これに対して、外集団との比較が顕現化している状況では、集団アイデンティティが優位となるため、他の内集団成員は自己にとっての反映的存在となると考えられる。集団間比較状況におかれると、各内集団成員は強く内集団へ自己を同一化させ、外集団に比べ内集団を維持・高揚することへの関心が高まる。このとき、他の内集団成員を交換可能な存在として捉えるという反映過程が導かれるため、人は集団アイデンティティの脅威を低減する存在である優れた内集団成員を積極的に受容しようとするようになると言える。つまり、反映効果が示されるだろう (e.g., Blanton et al., 2000)。

このような仮説に対し、本論文では、以下の基本仮説を検討する (p. 15, Figure 1-1 参照)。

自己カテゴリー化過程の見直しへのアプローチ 1 より、

1. 顕現化されている集団間文脈の内容によって、集団内の個人間比較が及ぼす影響は異なるだろう。

内集団の劣位が顕現化されている文脈においては反映過程が生じ、内集団の優位が顕現化されている文脈においては比較過程が生じやすいだろう。前者では、内集団の評価を高めるよう動機づけられるのに対し、後者では、そのような動機づけをもたらさないため、集団内での個人間比較に従事すると考えられる。たとえば、クラス対抗リレーで自分が属するクラスの負けが予想される状況では、クラスに勝利を導きたいという意識が高まりやすいと考えられる。したがってこのとき、優れた内集団成員の存在、つまり足の速いクラスメートは、他のクラスメートの自信の源となりやすい。それに対して、クラス対抗リレーで自分が属するクラスの勝ちが予想される状況では、他のクラスに勝とうという動機づけは高まりにくく、クラスの中で自分自身が早く走れるのかといったことに関心が高まりやすいと考えられる。つまり、同じように集団間比較状況におかれても、内集団が劣位であるという文脈では、社会的アイデンティティが顕現化しやすく集団内の個人間関係において反映過程が生起するだろう、一方、内集団が優位であるという文脈では、個人的アイデンティティが顕現化しやすく集団内での個人間関係において比較過程が生じやすいだろう。

さらに、

2. 個人の内的要因 (事前にもつ集団間関係への態度) が、1 の過程を調整するだろう。つまり、顕現化された集団間文脈が個人の社会的アイデンティティ維持高揚への動機づ

けをもたらす場合においてのみ、それは、集団内での個人間比較において反映過程を生じさせるだろう。そしてその動機づけの生起には、顕現化された集団間文脈の内容だけでなくそれを認知する個人の内的要因が影響するだろう。個人にとって集団間文脈が集団間比較への関心を伴わないものであるとき、集団間文脈の顕現化は、個人間比較の準拠枠としての内集団の機能をもたらすため、集団内での個人間比較においては、比較過程が生起しやすいだろう。

本論文の冒頭でも述べたように、クラス対抗の場においても、自分のクラスが楽々と勝利すると確信し悠然と構えている場合、つまり慢心を覚えているとき、またがんばってもどうせ負ける、つまり、集団間の劣位を覆すことができないとあきらめている場合、クラスの一員として自分を捉えるというよりも、クラスにおいて自分自身がどのような評価を得るのかに関心が向きやすいだろう。これらの場合において、集団間関係が顕現化されている状況でさえも、集団内の個人間関係において比較過程が生起しやすいだろう。そしてクラスが楽々と勝利するもしくはどうせ負けるという考えには、集団間関係に対する社会的な情報と、その情報を受ける個人の内的要因が影響すると考えている。たとえば、クラス対抗戦で自分の属するクラスが負ける可能性が高いという状況において、自分のクラスの劣位を最初から認めてしまっている人は、クラスの関係を変えることをあきらめてしまうだろう。この仮説は、低地位集団の成員は、集団間関係の変動可能性が低いと判断した場合、その集団にアイデンティティを持ちにくいという知見 (Ellemers, Wilke, & Van Knippenberg, 1993; Ellemers, Van Knippenberg, & Wilke, 1988) と一致する。さらに本論文では、このような場合、人は個人的アイデンティティの維持・高揚に向けての動機づけを高めるだろうと予測する。したがって、このとき人は、集団内での個人間関係に従事しやすく、集団内での個人間比較において比較過程が生起しやすいだろう。

また、クラス対抗戦で自分の属するクラスが勝つ可能性が高いという状況におかれた場合、自らのクラスの優位を最初から確信していた人は、集団間関係は変わらないと慢心し、その結果、個人間関係への関心が高まりやすいだろうと予測する。人が、貪欲に自己評価の維持・高揚を求めており、それに基づいて自己の捉え方を決定し、集団内・集団間行動に取り組むと考えるならば、社会的アイデンティティの高揚感だけでは満足せず、個人的アイデンティティをも維持・高揚できるよう動機づけられるだろう。したがって、社会的アイデンティティが高い水準で維持されそれが揺らぎないものであると確信できる状況におかれると、人は自らの関心を個人的アイデンティティへの維持・高揚へと移行させると予

想される。そのため、このとき、集団内での個人間比較において比較過程が生起しやすいだろう。一方、クラス対抗戦で自分の属するクラスが勝つ可能性が高いという状況におかれているにもかかわらず、自らのクラスの実力に疑いを持っている人は、うかうかしていたら地位の優位性が保てないと思えるだろう。この場合、社会的アイデンティティが優勢となり、内集団成員との個人間比較において反映過程が生起しやすいだろう。

このように、文脈によって顕現化している集団間関係の内容を個人がどう捉えるのかによって自己評価への動機づけが異なり、したがって、どちらのアイデンティティへの関心が高まるかも異なることが予想される。社会的アイデンティティ理論や自己カテゴリー化理論の枠組みでは、社会的アイデンティティにだけ注目しているため、このような仮説が導かれない。社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの双方を同時に考慮してこそ、本論文の仮説が成り立つ。なお本論文では、集団内の個人間関係に着目したため、集団間透過可能性が低い場合のみを取り上げている。そのため、社会的アイデンティティに基づく自己評価維持高揚の方法として社会移行は重要なものであるが、その可能性は検討していない。

この1つ目の仮説については、「第2章. 集団間文脈が、自己カテゴリー化過程に及ぼす影響」、2つ目の仮説については「第3章. 集団間文脈と個人の内的要因が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響」においてそれぞれ検討する。

また、自己カテゴリー化過程の見直しへのアプローチ2より、

3. 人は集団内の個人間比較によって生じる脅威を回避できるカテゴリーで自己をカテゴリー化しようとするだろう。そのため、それを可能にするカテゴリーが存在するかどうかによって、集団内の個人間比較の影響が異なるだろう。

集団内での個人間上方比較においてもたらされる脅威を回避するために、人は別のカテゴリー、個人間比較の対象と共有しないカテゴリーを用いて自己を捉えるという能動的自己カテゴリー化が存在する (Mussweiler et al., 2000)。したがって、もし、そのような能動的自己カテゴリー化を可能にする状況が存在すれば、内集団における個人間比較による脅威は低減できるだろう。

たとえば、クラス対抗リレーで自分もクラスの代表選手として選ばれているとき、最も足の速いクラスの代表が脚光をあびている状況で、人はクラスの一員としての誇りを感じるだけだろうか。同時に自信が低下したりねたみの感情が起こったりと複雑な心境になるときがある。社会的アイデンティティにとっては自己評価の高揚をもたらす状況であり、

個人的アイデンティティにとっては自己評価の低減をもたらす状況であるからである。このような場合に、仮に、その選手と性別が違えば、人は、クラスの一員として自己を捉えるというよりも、男性であるもしくは女性であるといった性別カテゴリーで自己を捉えることがあるかもしれない。つまり、個人的なアイデンティティに及ぼされる脅威を低減するために性別カテゴリーで自己を捉えようとするのが予想される。さらには、あるクラスの一員であり女性もしくは男性であるという2つのカテゴリーを用いて自らを捉えるならば、個人的アイデンティティの低下と社会的アイデンティティの高揚との関係に折り合いをつけることが可能だろう。本論文では、この過程を例証することによって、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティが状況によっては自己の中で共存することがありうることを示す。

この3つ目の仮説については、「第4章. 個人的アイデンティティを維持高揚しようとする動機づけが自己カテゴリー化に及ぼす影響」において検討する。

3. 第1章の要約

本章では、自己カテゴリー化過程に関わる諸理論・研究をレビューすることによって、自己カテゴリー化理論で説明された自己カテゴリー化の規定因を個人の自己評価への動機づけという側面から精緻化する必要性を示した。自己カテゴリー化過程を規定するものとして、‘集団文脈’とそれを個人がどのように捉えるのか・個人的アイデンティティがどのような状態にあるのかといった‘個人内要因’に着目することが重要であると考えた。また、カテゴリー化過程の検討において、集団内での個人間比較で示される効果を自己カテゴリー化の指標とする意義について述べた。最後に、本研究の基本仮説を述べた。

第2章. 集団間文脈が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

1. 問題

本章では、人が個人的な自己評価と社会的な自己評価のどちらを維持しようとするかに集団間文脈が及ぼす影響を検討する。第1章で述べたように、自己カテゴリー化理論を基に仮説を立てるのであれば、集団間文脈が顕現化すると社会的アイデンティティが優勢となり、集団内での個人間比較において反映過程が生起しやすいと言える。しかしながら近年、集団間比較によって内集団が顕現化することが必ずしも内集団メンバーを集団間比較に従事させ、集団アイデンティティへの関心を高めさせるわけではないことが示されてきている。個人の動機づけを考慮すれば、どのような集団間文脈かによって、自己カテゴリー化のレベルが異なることが予想される。いいかえれば、どのような集団間比較が行われるのかによって、人がどのように自己カテゴリー化するのかが異なると考えることができる。

たとえば Brewer and Weber (1994) は、Brewer (1991) の最適差異化理論 (optimal distinctiveness theory) の観点から、以下のような仮説をたてた。多数派集団の成員性は、集団の他のメンバーからの差異化への必要性を個人に活性化させるため、個人間比較過程がより顕現化するだろう。しかし、少数派集団の成員性は集団間比較を通して個人の差異への必要性を満足させるため、集団内での同化と集団間での対比をより促進させるだろうという仮説である。実験の結果は、仮説を支持するものであった。少数派集団においては、内集団の成員に対して反映効果 (同化効果; assimilation effects) が認められ、外集団の成員に対して比較効果 (対比効果; contrast effects) が認められた。より具体的には、自己関連性が高い課題において、内集団成員との上方比較にさらされたとき、事前に少数派集団に属すると伝えられた参加者は、多数派集団に属すると伝えられた参加者に比べ、自己評価が高まることを示した。

Brewer and Weber (1994) によれば、この研究は、カテゴリー化過程を考慮に入れた社会的比較研究であるという。また、彼女らは、この研究で同じ集団間状況であっても、多数派集団に属するのか少数派集団に属するのかによって、集団内過程に及ぼす影響が異なることが示されたことを受けて、最適差異化理論の観点からの考察を行っているものの、自己カテゴリー化理論との関連については直接述べていない。しかしながら、この研究結

果は、集団間状況の顕現化が必ずしも自己カテゴリー化に結びつかないことを示すものである。したがって、この研究は個人の動機づけが集団形成に影響することを述べた最適差異化理論を拡張し、集団間文脈が個人の動機づけを仲介して自己カテゴリー化に影響を及ぼす一連の過程を示したものであると言えるだろう。

本章では、この Brewer and Weber (1994) と同様に、集団間文脈の顕現化が個人の動機づけの方向を決定し、その結果自己カテゴリー化のレベルが変わるという仮説を検証する。ただし、集団間文脈として、多数派-少数派関係ではなく、集団間比較の方向性を扱い、それが内集団成員との個人間比較に及ぼす影響について検討する。

ここで、集団間比較の方向性とは、内集団が外集団よりも劣っているのか（集団間上方比較）、優れているのか（集団間下方比較）である。これら2つの状況のうち前者は集団アイデンティティ脅威状況、後者は集団アイデンティティ高揚状況と言い換えることができる。同じように集団間比較の状況が顕現化しても、集団間上方比較状況と集団間下方比較状況とでは、その顕現化による効果は異なることが予想される（e.g., Brewer & Weber, 1994; Goethals & Darley, 1997）。人は集団アイデンティティが脅威にさらされた場合、内集団評価を維持高揚させることへと強く動機づけられるのに対して、集団アイデンティティがすでに高揚している状況ではそのような動機づけは強まらなると考えられるからである。

集団間上方比較状況に関しては、Blanton et al. (2000) がその状況を扱っている。彼らは、内集団が外集団よりも劣っているというネガティブな集団間状況に置かれたとき、自分より優れた内集団成員との比較により個人の状態自尊心が高まることを示した。彼らの研究では、実験室実験により、アフリカ系アメリカ人大学生である参加者をネガティブな民族ステレオタイプにさらし、参加者にとって関与度が高い課題において、参加者の所属する集団（アフリカ系アメリカ人集団）が、外集団（白人集団）よりも劣っているという状況（集団間上方比較状況）を設定した。このような状況において、参加者に課題を行わせ、その課題成績が内集団のある成員の成績より劣っているというフィードバックの操作を行った。自己評価維持モデル（Tesser, 1988）に基づく、自己関連性の高い課題において内集団成員が自分より優れた成績をとることは、自己評価にとって大きな脅威となるはずである。しかし実験の結果は、自分より劣った内集団成員との比較よりも、優れた内集団成員との比較によって状態自尊心が高揚することを示していた。つまり集団間上方比較状況に置かれた場合、内集団成員との比較により反映過程が活性化されていたのである。

この Blanton et al. (2000) の結果より、自分がネガティブな集団に所属しているといった形で集団アイデンティティが高まった場合、内集団同質性の知覚が高まり (Lee & Ottati, 1995)、その結果として、内集団にとっての脅威を回避しようという動機づけが高まると予測される。内集団成員にとってネガティブな内集団の情報は、集団アイデンティティに大きな脅威を与え、結果として内集団成員のその脅威からの回避動機、あるいは集団アイデンティティ維持・高揚への関心を高めると考えられる。これは自己カテゴリー化理論を支持するものである。自分にとって不利な形で集団間文脈が顕現化した場合であっても、内集団への自己カテゴリー化が生じ、結果として社会的アイデンティティに基づいた反応が生じるようになるのである。

一方、集団間下方比較状況では、集団間上方比較状況とは異なり、内集団が外集団よりも優れているという情報自体が内集団の評価を高揚させる。このような状況では、集団アイデンティティはすでに高く維持されているため、個人は集団間文脈に関心を向けにくいだろう。そのため、個人的アイデンティティに基づいた集団内の個人間関係に従事しやすいだろう (e.g., Brewer & Weber, 1994)。つまり、集団アイデンティティ維持・高揚への動機づけが満たされている場合、内集団の成員との関係の中で自己の望ましさを維持・高揚することへの関心、言い換えれば個人的アイデンティティ維持・高揚への関心がより高まることが予想される。社会的比較の観点から考えると、文脈によって顕現化した内集団は準拠枠として機能しうるため、集団間文脈の顕現化がかえって内集団成員との比較過程を生起させやすくすると言える (e.g., Major, Sciacchitano, & Crocker, 1993)。

以上より、集団間上方比較状況では内集団での反映過程が生起し、集団間下方比較状況では内集団での比較過程が生起しやすいというという仮説が立てられる。

これらの仮説を検討するため、まず、研究1では、社会人を対象に、会社を内集団とした想定法による調査を行った。次に、研究2で、女子大学生を対象に学科を内集団とした準実験を行った。研究2においては、集団間上方比較状況が、集団内の個人間比較に及ぼす効果性に注目し、特性自尊心をさらなる要因として加えて検討を行った。以上の検討を通し、本章では、自己カテゴリー化が促進されるかどうかは、単に集団間文脈の顕現化の有無によって決まるのではなく、その質的な側面もまた重要であることを明らかにする。それらの詳細については、以下に述べる。

2. 研究1 集団間比較が集団内の個人間比較に及ぼす影響

前述した通り、集団間下方比較条件では、内集団が準拠枠となるため、自己関連性の高い課題における優れた内集団成員との比較によって、比較過程が生起すると予想される。一方で、集団間上方比較においては、自己の中で社会的アイデンティティが顕現化するため、反映過程が生起するだろう。いいかえれば、集団間上方比較では、内集団への同一視が高まり、他の内集団成員と自らを類似したものと捉えやすくなると考えられる。

そうであるならば、集団間上方比較では、集団内での個人間比較が個人的アイデンティティに及ぼす影響は、社会的アイデンティティを仲介したものであるかもしれない。そこで研究1では、個人的な状態自尊心と集団的な状態自尊心を共に測定し、集団間比較・個人間比較が自尊心に及ぼす影響を検討する。

集合的自尊心(collective self-esteem)を測定する尺度として、Luhtanen and Crocker (1992) は、集団自尊心尺度を開発した¹。Luhtanen and Crocker (1992) は、集合的自尊心の下位次元として、同一視・自己評価・他者評価・成員性の4側面を見いだした。同一視とは、所属集団との一体感(自己アイデンティティにおける所属集団の重要性)である。自己評価とは、所属集団を自己がどのように評価しているのかであり、他者評価とは、所属集団を他者がどのように評価していると思うかについての認知である。また成員性とは、所属集団の成員としての自己の役割遂行に対する自己評価である。これに対し、渡辺(1994)は、集合的自尊心は、社会的アイデンティティの望ましさに基礎をおく自尊心(自己・他者評価と同一視)と、内集団成員性の評価に基づいた自己に対する評価(成員性)の2つのタイプに分けることができると指摘している。さらに、成員性は、個人的自尊心に基づいた自尊心との区別が困難であることを指摘している。このことより、本研究では、前者に属する下位次元を総称して内集団評価と呼び、成員性との2次元で集合的自尊心を捉えることにする。

この2次元で集合的自尊心を捉えると、それぞれの次元で集団間比較・個人間比較が与

¹ 集合的アイデンティティ(collective identity)とは、社会的アイデンティティと同じく、集団への所属に基づく自尊心である。アメリカの研究者の間では、「集合的アイデンティティ」と呼ばれるのが主流であり、Luhtanen and Crocker (1992)においてもそのように呼ばれている。そこで本研究においても、この尺度に関する説明では、集合的と記載する(渡辺, 1994 参照)。ただし、渡辺(1994)では、集合的自尊心ではなく集団自尊心と訳しているため、尺度名は渡辺(1994)に基づき、集団自尊心尺度となっている。

える影響が異なることが予測される。成員性の次元においては、個人的自尊心と類似した反応を示すだろう。先にも述べたように、成員性とは、自己評価の一側面であるためである。集団の一員として、自分がどれだけ価値があるかという認知は、集団内の個人間比較に基づいて決まると考えられるため、集団間比較の方向と個人間比較との交互作用の影響を受けやすいだろう。それに対し、内集団評価は、集団間上方比較の影響を強く受けるだろう。具体的には、集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件において、社会的アイデンティティがより顕現化しやすいため、内集団に同一視、奉仕的な評価を与えることが予想される。

ここで、集団自尊心尺度は、個人が属する個々の集団に関係した自尊心を測るものではなく、個人が属する全ての集団を通してみられる、個人の全般的傾性としての自尊心を測ることを目的としたものであるという点に留意しなければならない。Luhtanen and Crocker (1992) は、個人的アイデンティティに関する自尊心に、特定の領域における個別の自尊心だけではなく個人の一般的な傾性としての自尊心があるのと同様、集合的自尊心にも個人が持つ一般的な傾性があると考えられることができるとし、そこには比較的安定した個人差が存在すると考えた。そして、達成集団ではなく、属性集団への所属によって獲得される社会的アイデンティティとそれに対する評価を問題にしている。しかしながら、本研究は、特定の集団における社会的アイデンティティがどのようなときに活性化し、高まったり低まったりするのかを検討しようとするものである。そのため、本研究では、渡辺 (1994) が翻訳した集団自尊心尺度の教示文と項目内容を一部変更し、ある集団に対する状態的な自尊心の測定を試みる。

仮説

1. 状態的な個人的自尊心と状態的な集団自尊心の成員性の次元において、集団間下方比較条件では比較効果が認められ、一方、集団間上方比較条件では、反映効果が認められるだろう。
2. 状態的な集団自尊心の内集団評価の次元において、集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件のほうがその得点が高いだろう。

2-1. 方法

2-1-1. 分析対象者

会社員 67 名。平均年齢 33.93 歳 (30 歳から 39 歳まで)。男性 64 名, 女性 3 名。

ある会社が主催した講習会の参加者に対し, 調査への協力を求めた。調査の回答において矛盾がある者, また重要な変数において欠損がある者を対象から除いた。また, 度数分布の上位 5%に含まれる 40 歳以上の者, 下位 5%に含まれる勤務年数が 3 年より少ない者も分析対象から除いた。

2-1-2. 分析デザイン

独立変数 集団間比較 (上方比較-下方比較) × 個人間比較 (上方比較-下方比較)。全て被験者間変数とした。

2-1-3. 質問紙構成²

1. **集団間比較の操作** まず, 参加者の同業種の会社で, 業績において参加者の会社よりも優れている (集団間上方比較; もしくは, 劣っている: 集団間下方比較) とされる他の会社 (X 社) を, 具体的にひとつ思い浮かべるよう求めた。このとき, 指定された集団間比較条件に相当する会社が思い浮かばない場合には, その逆の条件に当てはまる会社を想定するよう求めた。つまり, 優れた会社を思い浮かべることができない場合には, 劣った会社を思い浮かべるよう, 逆に, 劣った会社を思い浮かべることができない場合には, 優れた会社を思い浮かべるよう, それぞれ求めた。次に, 想定した集団のイニシャルと最終的にどちらの条件にあった会社を想定したのかについて, 回答を求めた。

さらに, 集団間状況の顕現化を高めるために, また, 想定した集団についての操作チェックのために, 集団間関係に関する質問に答えるよう求めた。この質問は, 想定した集団間の競争の知覚された程度についての項目 (4 項目) と集団間の業績の優劣についての項目 (2 項目) からなるものである。

2. **個人間比較の操作** 参加者と同じ会社に勤めている人で, 以下の 5 つ条件にあてはま

² 本研究には, 問題で述べてきた一連の過程に介在する帰属メカニズムを検討するためのいくつかの尺度も含まれていたが, ここではそれらについては記載しない。なお, それらの尺度は本研究で扱った尺度の後に続くものであり, 本研究の結果には影響がない。

のような人物を一人思い浮かべるよう求めた。5つの条件のうち4つ目と5つ目に示した条件によって個人間比較の操作を行った。

- ・あなた（参加者）と同じ会社に勤めている
- ・あなた（参加者）と同じ地位についている同僚である
- ・あなた（参加者）と同じ仕事内容の人である
- ・だいたいにおいて、あなた（参加者）より優れた業績（個人間上方比較：もしくは、劣った業績；個人間下方比較）をあげている
- ・あなた（参加者）よりも会社から評価が高い（個人間上方比較：もしくは、あなたのほうが会社からの評価が高い；個人間下方比較）

次に、集団間比較の操作時と同様に、そのような人物を思い浮かべることができない場合は、もう一方の条件にあてはまる人物を思い浮かべるように求めた。次に、思い浮かべた人物を、この質問紙上ではAさんと呼ぶとし、その人物のイニシャルを記入させた。

最終的にどちらの条件に当てはまる人物を思い浮かべたかに回答を求めた後、想定した人物であるAさんがどの程度の能力があるのかについて回答するよう求めた（7項目）。これは、想定した人物の操作チェックとより具体的にその人物を思い浮かべさせることを目的とするものである。

3. 状態自尊心 日本版状態セルフ・エスティーム尺度（舘・宇野, 2000）の計20項目から、Heatherton and Polivy (1991) の「外見因子」とされる6項目を除いた計14項目について、「そう思わない」(1)～「そう思う」(5)の5件法で回答を求めた。

4. 状態集団自尊心 集団自尊心尺度（Luhtanen & Crocker (1992) の翻訳版；渡辺, 1994）を用い、参加者の勤務する会社に対し、状态的に集団自尊心をどの程度持っているかを測定した（16項目・5件法；全くそうでない(1)～全くそのとおりだ(5)）。これは、Luhtanen and Crocker (1992) が、集団的アイデンティティに対する個人の一般的な特性的な傾性を測定するものとして開発したものである。しかし、本研究ではその趣旨に沿うよう以下の2点において内容の一部を修正し用いた。まず、具体的な集団である会社に対する評価を測定できるよう修正した。また、質問紙へ回答しているそのときの状态的な自尊感情を測定できるよう教示文と項目の内容を修正した。

状態自尊心尺度、状態集団自尊心尺度の呈示順序については、カウンターバランスをとった。

5. その他 課題の重要度を測定するため、参加者にとって、参加者自身が業績をあげる

ことをどのくらい重要だと思っているのか、また、参加者の会社の業績をあげることをどのくらい重要だと思っているのか、について5件法（非常に重要（1）～全く重要でない（5））で回答を求めた。最後に、会社での地位と職種などのフェースシートに回答を求めた。

2-2. 結果

2-2-1. 予備的分析

日本版状態セルフ・エスティーム尺度 Heatherton and Polivy (1991) の尺度構成に従って2因子にわけ、各因子に含まれる項目の平均得点を算出した。それぞれ、社会性に関する状態自尊心得点（7項目、 $\alpha = .80$ ；「他人が、どのように私のことを思っているのか心配である」他）、パフォーマンスに関する状態自尊心得点（7項目、 $\alpha = .73$ ；「私は自分の能力に自身がある」他）であった。

状態集団自尊心 先に述べた内集団評価、集団成員性のそれぞれについて、各因子に含まれる項目の平均得点を算出した。尺度の信頼性は、内集団評価が $\alpha = .76$ （12項目）、集団成員性に関してはその値を下げる1項目を排除した結果、 $\alpha = .73$ （3項目）であった。

2-2-2. 操作チェック

集団間比較 集団間関係に関する質問のうち、集団間の優劣をたずねた2項目の平均得点を算出した。集団間優劣の平均得点を従属変数とし、個人間比較×集団間比較の分散分析を行った結果、集団間比較の主効果が認められた（ $F(1,66) = 137.56, p < .001$ ）³。一方、集団間競争の知覚についての項目の平均得点を従属変数とし、同様の分散分析を行った結果、集団間比較の主効果は認められなかった。

個人間比較 Aさんに対する能力評価に関する質問の平均得点を算出し、その得点を従属変数とする、個人間比較×集団間比較の分散分析を行った。その結果、個人間比較の主効果においてのみ有意な差が認められた（ $F(1,66) = 41.16, p < .001$ ）。

以上より、集団間比較と個人間比較の操作はそれぞれ妥当であることが確認された。

課題の重要度 参加者個人にとっての業績の重要度と会社にとっての業績の重要度の知覚

³ 交互作用傾向（ $F(1,66) = 3.04, p < .10$ ）も認められたが、何がこれらの結果をもたらしたのかについてはさだかではないが、この変数は、個人間比較の操作前に回答を求めたため、個人間比較の操作が影響を及ぼしたのではないと考えられる。

をそれぞれ従属変数とする，個人間比較×集団間比較の分散分析を行った。その結果，各条件に有意な差は認められなかった。よって，以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

2-2-3. 仮説の検証

状態自尊心（社会性に関する状態自尊心得点，パフォーマンスに関する状態自尊心得点）と状態集団自尊心（集団評価得点，集団成員性得点）をそれぞれ従属変数とする，集団間比較×個人間比較の共分散分析（共変量 = 役職）を行った。

その結果，集団間比較の主効果が有意である傾向が，集団評価得点において認められた ($F(1,66) = 2.86, p < .10$)。集団間上方比較条件 ($M = 3.42, SE = .088$) の方が集団間下方比較条件 ($M = 3.26, SE = .087$) よりも集団評価得点が高かった。これは，傾向ではあるが，仮説2を支持する結果である。

集団間比較×個人間比較の交互作用は，パフォーマンスに関する状態自尊心において優位な傾向 ($F(1,66) = 2.97, p < .10$; Figure 2-1) が認められ，また，内集団成員性において有意性 ($F(1,66) = 4.08, p < .05$; Figure 2-2) が認められた。

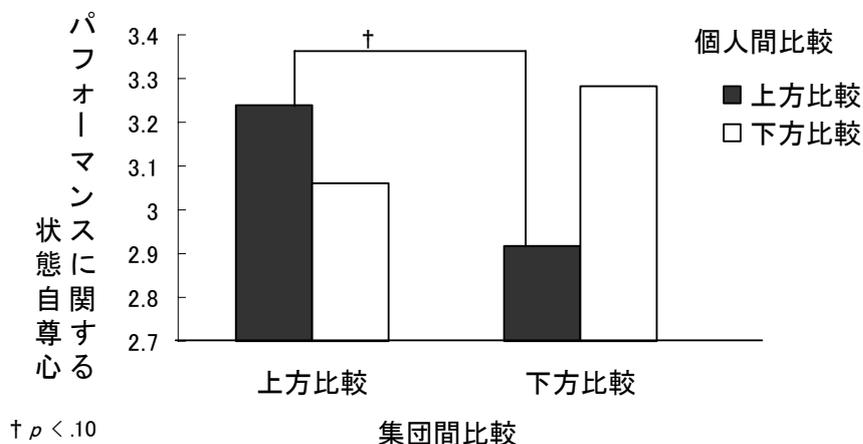


Figure 2-1. 集団間比較と個人間比較がパフォーマンスに関する状態自尊心に及ぼす影響

パフォーマンスに関する状態自尊心について下位検定を行った結果，集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件において，個人間上方比較後のパフォーマンスに関する状態自尊心が高いことが示された。集団成員性について下位検定をおこなった結果，集団間下方比較条件において，個人間上方比較後よりも個人間下方比較後に集団成員性得点が高か

った。一方、集団間上方比較条件においては、そのような差が認められなかった。

これらは、仮説1を支持する方向の結果である。

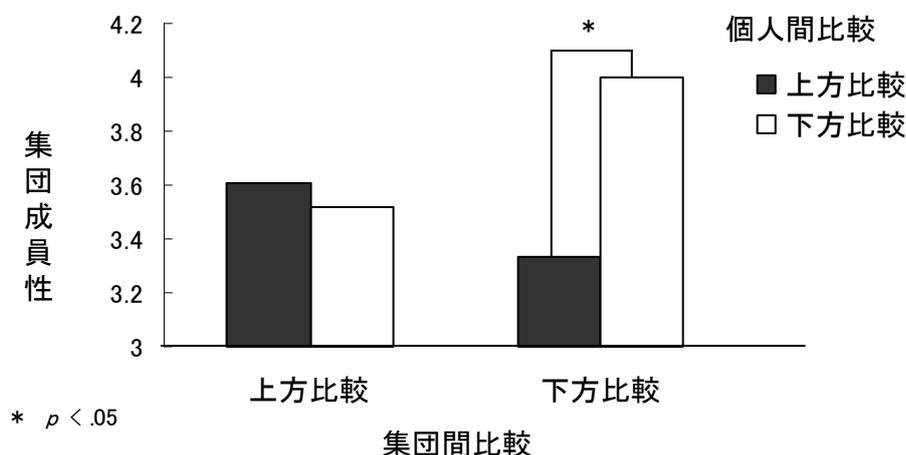


Figure 2-2. 集団間比較と個人間比較が内集団評価に及ぼす影響

2-3. 考察

まず、内集団評価の結果より、集団間比較の方向によって自己カテゴリー化のレベルが異なる傾向が示された。集団間下方比較よりも、集団間上方比較において集団への同一視が高まりやすいことを示すものである。

また、集団成員性の結果より、集団間下方比較の顕現化に伴って、内集団が比較の準拠枠としての機能を増し、比較過程が生起しやすくなることが示された。集団間上方比較が顕現化してもそのような効果は認められなかった。また、パフォーマンスに関する状態自尊心の結果より、傾向ではあるが、集団間上方比較条件においてよりも集団間下方比較条件においての方が、優れた内集団成員が他の内集団成員の自尊心に強い脅威を与えることが示された。

これらの結果より、集団間比較の方向が、人が個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらにより強く関心を向けるかを決定し、集団内の個人間比較に異なる影響を及ぼすことが示された。特に、操作チェックにおいて、集団間競争の知覚では、集団間上方比較条件と集団間下方比較条件との間に有意な差は認められていない点は重要である。このことは、集団間上方比較と集団間下方比較がどちらも同程度顕現化していたとし

でも、それが個人に生じさせる動機づけのあり方が異なるため、自己カテゴリーのレベルに違いがもたらされることを示すものである。

以上より、自己カテゴリー化理論が述べているように、人は集団間比較の顕現化によって受動的に自己をその集団にカテゴリー化しそれに基づく行動を行うだけではないことが示された。集団間文脈がどのようなものであるかによっては、集団間比較の顕現化が社会的アイデンティティではなく、個人的アイデンティティを顕現化させ、それに基づく行動を促進させる場合があることが例証された。

さらに、従属変数によって認められた効果が異なるという結果は、非常に興味深く、理解可能なものである。まず、状態集団自尊心尺度の下位次元、集団評価得点と集団成員性得点において、異なる結果が示された。これは渡辺 (1994) が述べているように、集団自尊心尺度の構成要素は、2 タイプに分かれることを支持する結果である。集団成員性において、2 要因の交互作用に有意な効果が認められたことより、集団成員性は、内集団成員性の評価に基づいた自己に対する評価であり、個人的アイデンティティにより関連していると言える。また、状態自尊心尺度の下位因子において、社会性に関する状態自尊心ではなく、パフォーマンスに関する状態自尊心で結果が示された理由として、本研究で扱った社会的比較の課題の内容があげられる。会社における業績は、対人的なものを反映するよりも個人のパフォーマンス能力を反映するものであるためだと考えられる。

集団成員性に関する結果では、集団間下方比較条件で、集団内の個人間比較において比較効果が認められたが、集団間上方比較条件で反映効果は認められなかった。その理由として、集団間文脈の内容が集団内での個人間比較に及ぼす影響を考える際に、その個人のもつ特性が何らかの影響を与えていることが考えられる。たとえば、集団内での個人間比較の影響は、特性自尊心の高さによって異なることが報告されている (Taylor, Wayment, & Carrillo, 1996)。また、顕現化された集団間文脈をどのように捉えるかによって、そこで行われる集団内の個人間比較のあり方が異なることも示されている (Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002)。そのことによって、個人間比較が行われる際の、動機づけのあり方が異なってくるからだと考えられる。このような集団間比較の影響を調整する様々な変数の影響を考慮することによって、より詳細に自己カテゴリー化のメカニズム、もしくは集団内での個人間比較の過程が明確になるだろう。そこで、研究2では、特性自尊心の影響について検討する。また、次章においては、集団間文脈をどのように捉えるかに影響する個人の内的要因について検討を行う。

さらに、集団間上方比較において、集団アイデンティティという側面で自己評価を維持高揚できたとしても、優れた内集団成員がもたらす個人的アイデンティティへの脅威が少なからず残っていた可能性も考えられる。本研究では、想定法を用いたため、参加者各自が思い浮かべた対象は様々である。参加者によっては、内集団でのみ自己をカテゴリー化するのではなく、他の、比較対象とは共有しないカテゴリーを用いて自己を捉え直した可能性が考えられる (Mussweiler et al., 2000)。このような可能性が、自己カテゴリー化もしくは集団内での個人間比較に及ぼす影響について、より実験的に統制された手続きを用い検討する必要があるだろう。この点については、第4章において検討する。

3. 研究2 内集団成員との個人間比較に特性自尊心が及ぼす影響

社会的比較に関する研究において、社会的比較による脅威からの回避戦略がどのようなもので、また、どの程度用いられるかに関連する要因の一つに、その個人のもつ特性自尊心があることが知られている。高自尊心者は低自尊心者に比べ、セルフサービングバイアス (self-serving bias) をより示す (e.g., Schlenker, Weigold, & Hallam, 1990) ことや、下方比較に従事する (Wheeler & Miyake, 1992) ことなどが示されている。また Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, and Dakof (1990) は、下方比較にさらされたとき、高自尊心者は肯定的な感情を生起するのに対し、低自尊心者は比較対象の悪い点に注目してしまい、否定的な感情を示すことを明らかにした。さらには、上方比較にさらされたときにおいても、低自尊心者は否定的な感情を示し、高自尊心者は肯定的な感情を生起させている。これらの結果から、低自尊心者は高自尊心者より、社会的比較の情報を好ましい意味へと再構築するスキルが劣っている可能性が指摘されている (Taylor et al., 1996)。その一方で、低自尊心者でも、自己評価に脅威を感じている、もしくは否定的な気分有的时候に、受動的に下方比較が与えられことにより、気分が回復することを示す研究もある (Gibbons & Boney-McCoy 1991; Aspinwall & Taylor, 1993)。

このように、優れた内集団成員との比較において大きく状態自尊心を低下させる低自尊心者であっても、自己カテゴリー化理論が述べているような心理過程が存在するのであれば、自己カテゴリー化によってそのようなネガティブな影響を低減されることが考えられる。したがって、研究2では、集団間上方比較と集団内の個人間比較との関係に及ぼす、特性自尊心の効果について検討する。

これまで述べてきたように、集団間上方比較状況は、内集団にとっての脅威を避けようとする動機づけを高め、結果として優れた内集団成員と自己との比較による脅威を低減させる一要因となると言える。このような集団間上方比較状況は、さらに、低自尊心者にとっても、優れた内集団成員との上方比較による脅威の回避に好都合に働く可能性が考えられる。それは集団間上方比較が、集団アイデンティティの高揚動機を高めると同時に、優れた他者との心理的距離を縮め、反映過程を用いやすくするからである。

低自尊心者は一般に高自尊心者よりも自己高揚への欲求が強いにも関わらず、そのためのスキルが欠けているという (Taylor et al., 1996)。このことについて、たとえば、Baumgardner, Kaufman, and Levy (1989) は、高自尊心者は、認知的感情的な方略をとることができるため、私的に肯定的な自己評価を維持・高揚することができ、一方、低自尊心者は、対人的な感情統制方略をとるため、公的な自己呈示、対人的な行動に従事することによって一時的に自尊心を統制すると述べている。低自尊心者は肯定的なフィードバックを望んでいるのだけれども、ネガティブな自己観をもっているため、自身の能力を確信する「他者」の存在が必要であるためだという。また、Brown, Collins, and Schmidt (1988) は、高自尊心者は直接的な自己高揚、低自尊心者は間接的な自己高揚に従事しやすいことを示した。低自尊心者も高自尊心者と同様にポジティブなイメージを持ちたいと動機づけられているのだけれども、自己の能力を疑っているため直接的に自己価値を高めることができない。彼らによれば、そのため低自尊心者は反映過程のように他者を用いた自己高揚を行うという。

これらの研究から、所属する内集団が他の集団よりも劣っているという状況に置かれたとき、まず集団成員は、集団間比較から生じる脅威から逃れようとする動機づけが高まると予想できる。自己カテゴリー化理論によると、集団間文脈の顕現化が個人を半ば強制的に、社会的アイデンティティへと従事させると考えられるからである。そのため、内集団の他の成員を代替可能な対象として捉え、優れた内集団成員との反映過程が用いられやすくなると考えることができる。つまり、集団間上方比較状況は、優れた内集団成員との比較の際に反映過程へと導くことが可能になると考えることができる。低自尊心者でさえ、集団間上方比較の顕現化によって半ば自動的に集団間関係への従事させられるため、反映過程を用いた自己評価維持・高揚が可能になると考えることができる。

先に示した、Blanton et al. (2000) の研究では、参加者の特性自尊心の効果は検討されていない。本研究では、優れた内集団成員との比較の際に集団間上方比較状況に注目させ

ることが、低自尊心者にとっても、状態自尊心の低下を防ぐ状況要因になるかどうかを検討する。特性自尊心が高い人は、集団間上方比較状況の有無にさほど関係なく、これまで示されてきたような認知的方略や、もしくは集団間上方比較状況が無いときでさえ反映効果を用い、状態自尊心の低下を回避することが可能であるだろう。一方、特性自尊心が低い人においては、集団間上方比較状況におかれた場合のみ、優れた内集団成員との比較の際に、反映過程を利用することができるため、状態自尊心の低下が低減されるだろう。

このような検討によって、自己カテゴリー化における心理過程を確認することができる。なぜなら、低自尊心者におけるそのような結果は、集団間上方比較の顕現化が、半ば自動的な自己カテゴリー化を導くことを示すからである。

以上より、本研究ではまず、優れた内集団成員との比較（個人間上方比較）、集団間上方比較、特性自尊心が状態自尊心にもたらす影響について検討する。本研究では、社会的比較後の自尊心の変動を測定することが目的であるため、状態自尊心の測定が最も適切だと考える（Heatherton & Polivy, 1991）。しかしながら、本研究と類似のテーマを扱った多くの研究で感情測度が用いられていること（e.g., Aspinwall & Taylor, 1993; Buunk et al., 1990; Gibbons & Boney-McCoy, 1991）、また、社会的比較後の状態自尊心と感情には相関が認められていること（Heatherton & Polivy, 1991）などから、本研究では、状態自尊心の変化に加え感情の変化にも注目し、集団間比較と個人間比較が個人に及ぼす影響を多面的に捉えることにしたい。状態自尊心と感情状態とは同様の変化を示すものと予想される。そして、このような効果をみるため、最も脅威を感じないであろう内集団成員との同等比較（個人間同等比較）の条件を基準として用い、準実験的な手法によって以下の仮説を検討する。

仮説

1. 内集団成員との同等比較条件より上方比較条件において、状態自尊心が低下するだろう。
2. 内集団が外集団より劣っている集団間上方比較状況では、仮説1の効果が低減されるだろう。
3. 特性自尊心が高い人より、低い人のほうが、仮説1の効果が顕著だろう。
4. 特性自尊心が低い人は、集団間上方比較が無いときに比べ、集団間上方比較が有るとき、個人間上方比較による状態自尊心の低下が低減されるだろう。一方、特性

自尊心が高い人にはこのような差があまりみられないだろう。

3-1. 方法

3-1-1. 参加者

X大学の看護学科に通う女子大学生95名(平均年齢19.5歳, $SD = 1.87$, 18-31歳)と男子大学生7名(23.6歳, $SD = 10.16$, 18-46歳)。男子大学生の存在は、別のカテゴリ-共有度の操作(性別カテゴリ-による操作)のために必要であったが、分析に際しては、人数が少なすぎるため、その対象とはしない。

3-1-2. 独立変数

個人間比較(上方比較-同等比較)、集団間上方比較状況(有-無)、特性自尊心(高-低)、別のカテゴリ-の共有度(共有-非共有)⁴。これらは、すべて被験者間変数とした。

3-1-3. 手続き⁵ (Figure 2-3 参照)

『空間知覚の能力と対人関係についての調査』であるとし、一斉調査を行った。まず、

1. **自尊感情尺度** (Self-Esteem Scale; Rosenberg, 1965) の日本語版(山本・松井・山成, 1982) の10項目に5件法(あてはまらない(1) ~ あてはまる(5))で回答を求めた。
2. **課題の実施** 集団間上方比較・個人間比較の操作のために次のような課題を実施した。それは、京大式NX知能検査15歳以上用(苧坂・梅本, 1973)から抜粋したもので、紙を折り畳み、パンチで穴をあけた後、見開いたらどのような形を示すかに答えるものである。課題の説明後、一斉に一分間課題を行った。さらに、正解を読み上げ、参加者に自身の採点を行わせ、得点を記入させた。
3. **集団間上方状況の有無の操作** 続いて、テストの説明として以下の文章を呈示した。まず、課題への自我関与度を高めるため、「課題は「図形テスト」であり、知能テストの中

⁴ 別のカテゴリ-の共有度の操作は、本研究とは異なる目的のため操作された。その詳細については、研究5で述べる。しかしながら、ここにおいても手続きの過程を正確に報告するため、この操作を記述する。

⁵ 本研究には、問題で述べてきた一連の過程に介在する帰属メカニズムを検討するためのいくつかの尺度も含まれていたが、ここではそれらについては記載しない。なお、それらの尺度は本研究で扱った尺度の後に続くものであり、本研究の結果には影響がない。

のひとつで、「空間知覚の能力」を測定するものだ。この能力が高い人は「情報に対する直感的な能力」が高いといわれる」と伝えた。看護師を目指す学生にとってこの能力は重要であると考えられる。さらに、集団間上方比較状況の有無の操作として、集団間上方比較条件有り条件の参加者には、「参加者の通うX大学の看護学科と、Y大学の看護学科においてこれまで同じ課題を実施してきた。昨年のテスト実施の結果、Y大学の看護学科の学生の方が、X大学の看護学科の学生よりも平均得点がかかなり高かった」と付け加えた。一方、集団間上方比較状況が無い条件の参加者には、「X大学において、昨年・一昨年テストを実施してきたところ、X大学の看護学科の学生の平均得点は一昨年も昨年もあまり変わらない」と付け加えた。Y大学には、一般的にX大学より優れた大学として知られている、近辺の大学を用いた。

4. 個人間比較・別のカテゴリー共有度の操作 次に、個人間比較と別のカテゴリー共有度の操作のため、我々のテストに関するさらなる検討のために必要であるからという理由で、以下の質問に答えるように求めた。まず、以下に書かれた文章の内容を想像するよう求めた。そこには、「X大学の看護学科であり、同じ授業を受けている、女子大学生（男子大学生）のAさんは、あなたと同様に図形テストをおこないました。Aさんの得点は9点であり、空間知覚能力が高いと言える得点でした（Aさんとあなたの得点は同じ点でした）」と記載されていた。これにより、個人間比較の方向と別のカテゴリー共有度の操作を行った（別カテゴリーには性別カテゴリーを用いた）。同じテストについての予備的な検討の結果、9点の成績を上げる者はほとんどいなかったため、9点を個人間上方比較条件のための操作として用いた。「同じ得点」は個人間同等比較条件のための操作である。また、参加者は全て女子大生であるため、Aさんが女子大学生であるとした条件が別のカテゴリー共有条件、Aさんが男子大学生であるとした条件が、別のカテゴリー非共有条件である。

続いて、従属変数である以下の尺度への回答を求めた。

一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木, 2000）：肯定的感情、否定的感情、安静的感情（計24項目）に対し、「まったく感じていない」（1）～「非常に感じている」（4）の4件法で回答させ、全体的な感情状態の変化を測定した。

日本版状態セルフ・エスティーム尺度（舘・宇野, 2000）：状態自尊心を測定する計20項目から、「外見因子」とされる3項目を除いた計17項目に、「そう思わない」（1）～「そう思う」（5）の5件法で回答させた。

研究2の実験手続き

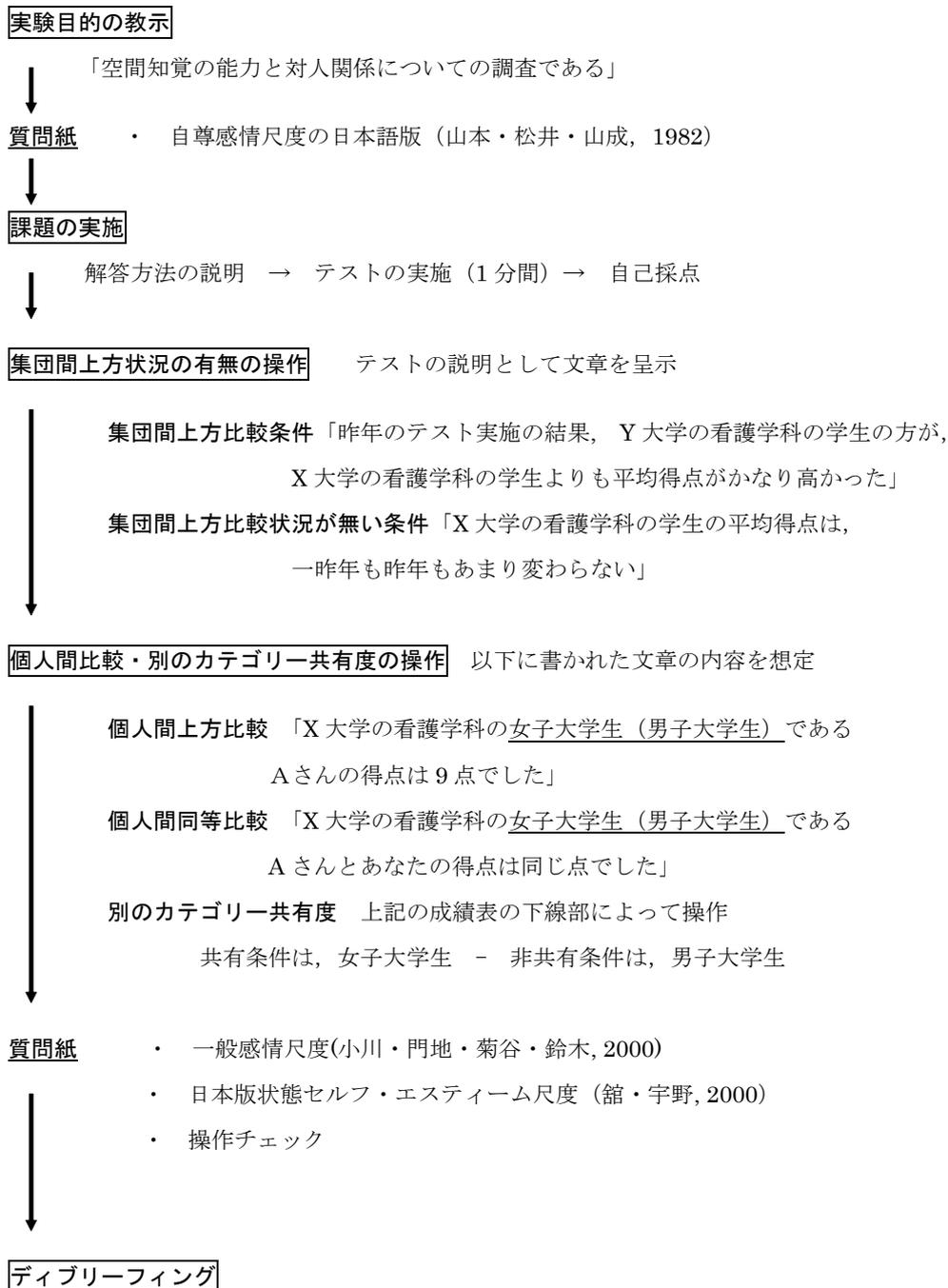


Figure 2-3. 研究2の実験手続きのフローチャート

最後に、操作チェックのために、以下の質問を付け加えた。自身と対象人物の空間知覚能力がそれぞれ、どれほど優れていたか（全く優れていない（1）～非常に優れている（5））。あなたの学科とY大学の学科の学生（集団間上方比較無し状況では、昨年・一昨年のX大学の学生）がそれぞれどれほど優れているか（全く優れていない（1）～非常に優れている（5））。参加者にとっての課題の重要度（非常に重要（1）～全く重要でない（5））、課題と別のカテゴリー（性別カテゴリー）との関連性（非常に関係がある（1）～関係がない（4））、対象人物に実際の人をイメージしたかどうか（はい・いいえ）に回答を求めた。

一連の尺度に回答させた後、ディブリーフィングを行った。

3-2. 結果

3-2-1. 予備的分析

尺度の信頼性

特性自尊心 特性自尊心尺度の信頼性は十分に高かった ($\alpha = .85$)。平均値 3.17 ($SD = .71$) に基づき、参加者を高自尊心者群 ($N = 45, M = 3.77, SD = .39$) と低自尊心者群 ($N = 50, M = 2.62, SD = .43$) に分割した ($t(93) = 13.64, p < .001$)。

分析対象者の課題の成績 分析対象者が実際にとった課題の平均得点は 5.01 点 (2 ~ 9 点; 9 点をとった 2 名はいずれも個人間同等比較条件であったため分析の対象とした) であった。

一般感情尺度 一般感情尺度は、既存の尺度構成に従って 3 因子にわけ、各因子に含まれる項目の平均得点を算出した。それぞれ、肯定的感情得点 (8 項目, $\alpha = .86$)、否定的感情得点 (8 項目, $\alpha = .83$)、安静的感情得点 (8 項目, $\alpha = .88$) であった。

日本版状態セルフ・エスティーム尺度 因子分析 (主因子法, バリマックス回転) の結果, Heatherton and Polivy (1991) とほぼ同様の因子構造が見いだされた。因子としての意味のまとまりを考慮して、彼らの因子構造において外見因子に含まれていた 3 項目を除き、再度因子分析を行い (主因子法, バリマックス回転), 不適切な 2 項目を除いて、社会性に関する因子 (6 項目, $\alpha = .77$)、パフォーマンスに関する因子 (6 項目, $\alpha = .73$) の 2 因子を得た。

3-2-2. 操作チェック

個人間比較 個人間比較の操作を確認するため、Aさんの能力評価得点から参加者自身の能力評価得点を引いた差得点を算出し、この差得点について、個人間比較×集団間上方比較×特性自尊心×別のカテゴリー共有度の分散分析を行った。その結果、個人間比較 ($F(1,79) = 100.48, p < .001$) の主効果が認められ、個人間同等比較 ($M = .41, SD = .62$) より上方比較 ($M = 2.10, SD = .98$) において、Aさんと自分の得点差がより大きかった。

集団間上方比較 Y大学にいる学生の一般的な空間知覚能力の評価得点、あるいは昨年・一昨年にX大学にいた学生の一般的な空間知覚能力の評価得点から、今年のX大学にいる学生の一般的な空間知覚能力の評価得点の差得点を算出した。この差得点について、同様の4要因の分散分析を行った結果、集団間上方比較の主効果が認められた ($F(1,79) = 38.24, p < .001$)。集団間上方比較有り条件 ($M = .84, SD = .92$) のほうが無し条件 ($M = .00, SD = .36$) より、集団間に大きな差をつけていた⁶。

課題の重要度 平均得点は、3.17点 ($SD = 1.03$) であった。課題の重要度を共変量として、4要因の共分散分析を行った。その結果、主要な得点における共変量の説明率はいずれも有意でなかった。よって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

対象人物のイメージ 対象人物に実在の人をイメージした人は38名、しなかった人は57名であった。そこで、対象人物をイメージしたか・しなかったかを共変量として、4要因の共分散分析を行ったが、共変量の説明率はいずれの変数においても有意でなかった。よって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

⁶ 個人間比較の操作チェックにおいては、個人間比較×集団間上方比較×特性自尊心の交互作用 ($F(1,79) = 2.85, p < .01$) が、集団間上方比較の操作チェックにおいては個人間比較×特性自尊心の交互作用 ($F(1,79) = 6.30, p < .05$) がそれぞれ有意であった。何がこれらの結果をもたらしたのかについてはさだかではないが、操作チェックへの回答は、全ての要因操作と尺度への回答を終えた後に求めたものであり、それらの操作や回答の過程が何らかの影響を及ぼした可能性が考えられる。なお、個人間比較の操作チェックにおいて、個人間同等比較で、参加者とAさんの差得点が0ではなかったことに関し、特性自尊心との関連性を検討したが、差得点と特性自尊心には相関が認められなかった ($r = .17, ns$)。一方、個人間上方比較においては、差得点と特性自尊心に相関が認められ、自尊心が高い人ほど差得点を小さく見積もっていた ($r = .30, p < .05$)。

3-2-3. 仮説の検証

各得点について、個人間比較×集団間上方比較×特性自尊心×別のカテゴリー共有度の分散分析を行った⁷。

内集団成員との個人間比較

安静的感情得点において、個人間比較の主効果 ($F(1,79) = 7.85, p < .01$) が有意であった。個人間上方比較 ($M = 1.67, SD = .68$) より同等比較 ($M = 2.10, SD = .81$) において安静感情をより示した。

集団間上方比較が集団内個人間比較に及ぼす影響

集団間上方比較×個人間比較の交互作用は、いずれの従属変数においても認められなかった。

集団間上方比較と集団内の個人間比較との関係に及ぼす、特性自尊心の効果

特性自尊心の主効果は、否定的感情得点 ($F(1,79) = 8.22, p < .01$) と社会性に関する状態自尊心 ($F(1,79) = 17.70, p < .001$)、パフォーマンスに関する状態自尊心 ($F(1,79) = 17.64, p < .001$)、で認められた。特性自尊心が低い人 ($M = 1.82, SD = .67$) より高い人 ($M = 1.47, SD = .49$) のほうが否定的な感情を生起させていなかった。同様に、特性自尊心が低い人 ($M = 2.57, SD = .77$) より高い人 ($M = 3.26, SD = .94$) のほうが、社会性に関する状態自尊心が高かった。特性自尊心が高い人 ($M = 2.84, SD = .71$) のほうが低い人 ($M = 2.27, SD = .75$) よりも、パフォーマンスに関する状態自尊心が高かった。

個人間比較×特性自尊心の交互作用は、パフォーマンスに関する状態自尊心について認められた ($F(1,79) = 12.20, p < .001$; Figure 2-4)。個人間比較×特性自尊心の下位検定の結果、個人間上方比較において、特性自尊心が高い人は、低い人よりも、パフォーマンスに関する状態自尊心が高かった ($F(1,79) = 29.59, p < .001$)。高自尊心者は、個人間同等比較よりも上方比較においてパフォーマンスに関する状態自尊心を高く持ち ($F(1,79) = 5.38, p < .05$)、低自尊心者は、個人間上方比較よりも同等比較においてパフォーマンスに関する状態自尊心を高く持っていた ($F(1,79) = 6.87, p < .05$)。

⁷ 本研究では、4 要因の交互作用について何らかの仮説を持っているわけではない。

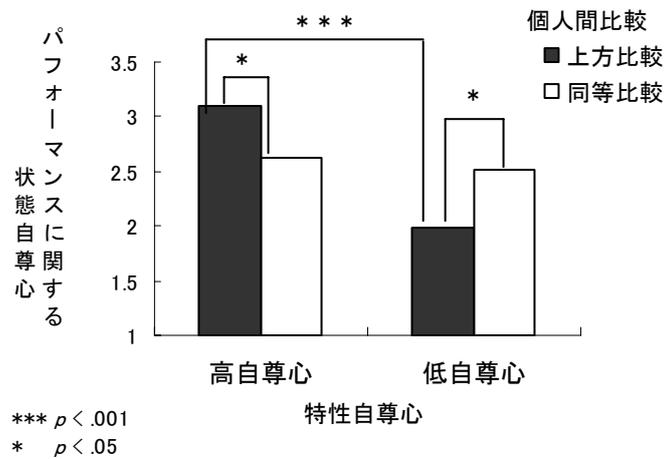


Figure 2-4. パフォーマンスに関する状態自尊心に個人間比較・特性自尊心が及ぼす影響

集団間上方比較×個人間比較×特性自尊心の交互作用は、安静的感情得点 ($F(1,79) = 5.99, p < .05$; Figure 2-5), パフォーマンスに関する状態自尊心得点 ($F(1,79) = 6.38, p < .05$; Figure 2-6) において認められた。

安静的感情得点において、低自尊心者は、集団間上方比較が無い条件では、個人間同等比較よりも上方比較にさらされたとき、安静感情が低かった ($F(1,79) = 4.03, p < .05$)。しかしながら、このような差は、集団間上方比較状況におかれたときには認められていない。また、集団間上方比較状況における個人間同等比較は高自尊心者に最も安静感情をもたらすことが分かった。

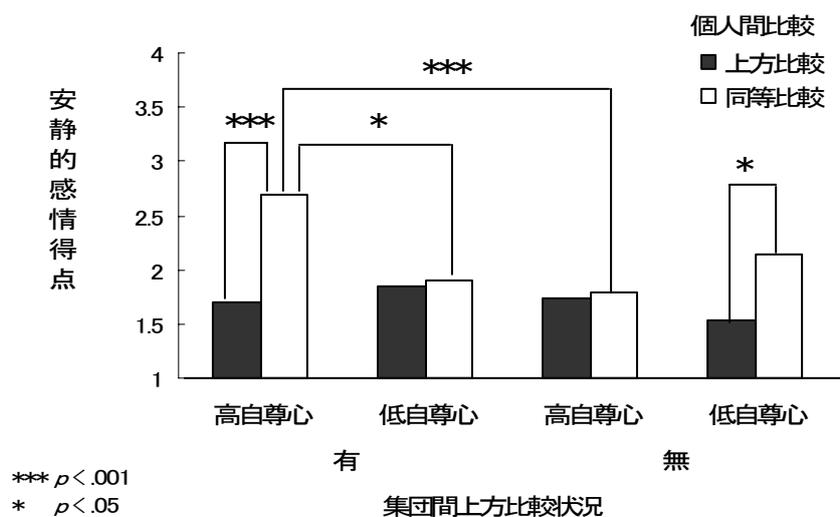


Figure 2-5. 安静的感情得点に、集団間上方比較状況、個人間比較、特性自尊心が及ぼす影響

パフォーマンスに関する状態自尊心得点についての下位検定では、集団間上方比較が無い状況において、個人間同等比較より上方比較にさらされたとき、低自尊心者は、パフォーマンスに関する状態自尊心が低かった ($F(1,79) = 9.86, p < .01$)。このような差は、集団間上方比較状況条件では、見られていない。また、低自尊心者が個人間上方比較にさらされたとき、集団間上方比較状況が無い条件よりある条件で、パフォーマンスに関する状態自尊心を維持していた ($F(1,79) = 4.02, p < .05$)。しかしながら、集団間上方比較状況有無どちらにおいても、高自尊心者より低自尊心者では、個人間上方比較状況にさらされた後のパフォーマンスに関する状態自尊心は低かった (集団間上方比較有 : $F(1,79) = 9.70, p < .01$, 集団間上方比較無 : $F(1,79) = 30.99, p < .001$)。特性自尊心が高い人は、集団間上方比較状況におかれていないとき、個人間同等比較より上方比較において、パフォーマンスに関する状態自尊心が高かった ($F(1,79) = 8.29, p < .01$)。

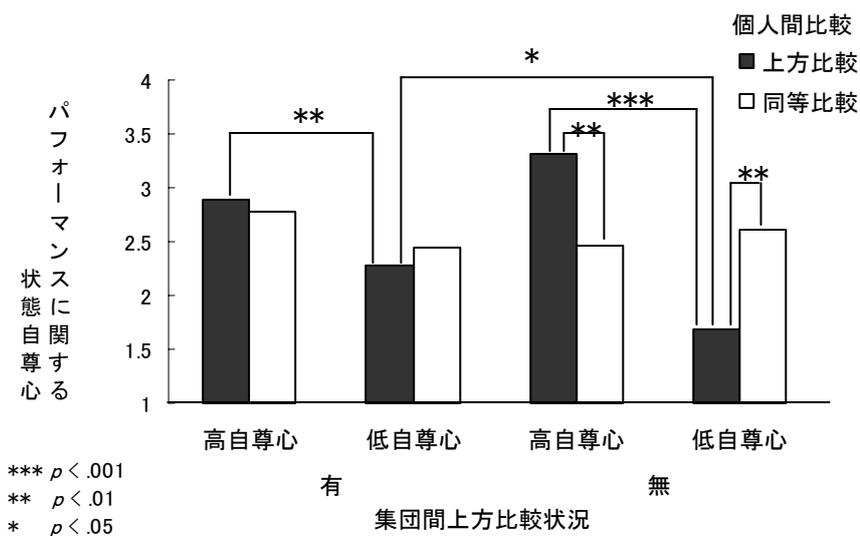


Figure 2-6. パフォーマンスに関する状態自尊心得点に、集団間上方比較状況、個人間比較、特性自尊心が及ぼす影響

4 要因の交互作用はいずれの得点においても認められなかった。

3-3. 考察

以上の結果より、個人間同等比較条件よりも個人間上方比較条件において安静感情が低く、これは仮説1を支持する結果である。また、パフォーマンスに関する状態自尊心得点で個人間比較×特性自尊心の交互作用が認められ、特性自尊心が高い人より低い人のほうが、個人間上方比較においてパフォーマンスに関する状態自尊心が低いことが示された。これらは、仮説3を支持する結果である。

個人間比較×集団間上方比較×自尊心の交互作用は、安静感情得点とパフォーマンスに関する状態自尊心得点において認められた。集団間上方比較が無い条件において、個人間同等比較より個人間上方比較にさらされたとき、低自尊心者は、安静感情を低下させていたが、集団間上方比較条件では、このような差が認められなかった。また、パフォーマンスに関する状態自尊心得点に関しても、同様の結果が示された。このことから、低自尊心者でも、内集団にネガティブな集団間上方比較状況に置かれると、内集団成員との上方比較における状態自尊心の低下を回避することができることが示された。これは、仮説4を支持する結果である。

自ら自己評価を維持することが不得手である低自尊心者 (e.g., Taylor et al., 1996) にとって、集団間上方比較状況は、半ば自動的な自己カテゴリー化によって反映過程を生起させる状況であることが示された。このことは、自己カテゴリー化理論が仮定している、自己カテゴリー化における心理過程が実在することを示すものである。

集団間上方比較状況を設定することは、低自尊心者にも情報の再構築を強く促し、内集団成員との比較に対する脅威を一時的に低減する要因となることが示されたと言える。しかしながら、集団間上方比較状況における個人間上方比較において、高自尊心者よりも低自尊心者はパフォーマンスに関する状態自尊心得点が低かった。したがって、状況要因により反映過程を用いるといった戦略が活性化されても、高自尊心者と同程度の回避ができたとは残念ながら言いえない。個人間比較×集団間上方比較の交互作用は、いずれの得点においても認められなかったため、仮説2は支持されなかった。

本研究の結果は、高自尊心者は集団間上方比較が無い状況でも、優れた内集団成員の反映過程を用いて高揚することが可能であることを示している。さらに、集団間上方比較状況に比べ、集団間上方比較状況が無いとき、個人間同等比較より個人間上方比較においてより状態自尊心が高かった。高自尊心者は社会的比較の情報を好ましい意味に再構築する

スキルに長けている (Taylor et al., 1996) ことがその理由と考えることができるだろう。集団間上方比較が無いときには、個人間同等比較より上方比較において脅威を回避する動機づけが高くなるため、高自尊心者は複数の回避戦略を積極的に用い、個人間上方比較にさらされることによる状態自尊心の低下を防ぐことが可能だったのかもしれない。しかしながら、参加者がこの戦略をどの条件でどの程度用いたのかは不明である。また、高自尊心者は、内集団の優れた成果の呈示により、自己改善の可能性を感じることで状態自尊心が高まった可能性も考えられる (Buunk et al., 1990)。これらのことを含め、内集団成員による反映効果による回避戦略を実際にどの程度用いたのか、どのような戦略をどの程度用いたかについて検討することが今後の課題である。

本研究において一斉状況で実験を行ったことによる限界も指摘する必要がある。本研究では、参加者へのフィードバックによる操作の統制が不十分であった。参加者が実際に獲得した得点は個々に異なっており、したがって、個人間上方比較条件で呈示した比較対象の得点である9点と参加者が獲得した点との得点差、ならびに、同等比較条件での同点が意味するものは、参加者によって異なる可能性が考えられる。今後、詳細な検討が必要である。

4. 第2章のまとめ

本章では、集団間比較の内容が自己カテゴリー化過程に影響することが例証された。自己カテゴリー化理論が述べているように、人は集団間文脈の顕現化によって受動的に自己をその集団にカテゴリー化しそれに基づく行動を行うだけではないことが明らかになった。

研究1・研究2において、集団間上方比較条件では、人は内集団への関心が高められやすいことがわかった。集団間上方比較にさらされると、内集団を高めたいという動機づけが強く働くためだと考えられる。したがって、集団間上方比較条件では、社会的アイデンティティが自己の中で優勢になりやすく、そのため、内集団を高く評価したり、内集団成員との比較において反映効果が認められたと考えられる。

一方、研究1において、集団間下方比較状況では、人は集団の個人間関係への関心が高められやすいことがわかった。集団アイデンティティが脅威にさらされている集団間上方比較状況とは異なり、集団間下方比較では集団アイデンティティがすでに高揚している状況である。このような場合には、内集団評価を維持・高揚させることへの動機づけは高ま

りにくいと考えられる。したがって、集団間下方比較条件では、個人的アイデンティティが自己の中で優勢になりやすく、そのため、内集団成員との比較において比較過程が生起しやすいと考えられる。この結果は、自己カテゴリー化理論の主張とは異なり、集団間文脈の顕現化が集団間相互作用ではなく、集団内・個人間相互作用を促進させる場合があることを示すものである。集団間下方比較状況は、その集団の準拠枠としての機能を顕著にさせたと言える。

以上のように、本章では、顕現化されている集団間文脈の内容によって、集団内の個人間比較が及ぼす影響が異なるだろう、という本論文の基本仮説1が支持された。次章では、さらに顕現化した集団間文脈が自己カテゴリー化に及ぼす影響を調整するものとして、個人の内的要因に着目し、自己カテゴリー化における動機づけの過程を検討する。

次に、社会的比較という観点から本章で示された結果を考察する。従来の社会的比較の研究では、自己関連性の高い課題における優れた内集団成員の存在は自己にとって脅威の源泉となりうることになる。しかしながら、研究1・2では、自己関連性の高い課題における優れた内集団成員との比較の際に、集団間上方比較といった外部状況に注目することにより、脅威を低減できることが示された。集団内での個人間比較に固執するのではなく、集団間関係に関心を向けることが、脅威回避の戦略となりうると言える。特に、研究2では、社会的比較による脅威回避が不得手であるといわれている低自尊心者でさえも、このような状況に置かれることによって、自尊心の低下を免れることが可能であることが示された。この結果は、低自尊心者の自尊心向上にとって有益なものとなるだろう。集団間上方比較を顕現化させることによって、低自尊心者を半ば強制的に反映過程に導くことで、優れた内集団成員との比較によるアイデンティティ脅威回避を可能にさせることができるかもしれない。したがって、このような場合においては、優れた内集団成員は、内集団の他の成員から排斥されにくいかもしれない。このような影響を検討するために、次章以降では、さらに従属変数を増やし、集団内における個人間比較が個人間の相互作用に及ぼす影響についても検討する。

5. 第2章の要約

本章では、集団間文脈の違いが個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらの自己評価維持への関心を高めるかを決定することを検討した。個人の自己評価への

動機づけを考慮すれば、自己カテゴリー化理論の主張とは異なり、外集団よりも劣っている「集団間上方比較状況」と内集団が外集団よりも優れている「集団間下方比較状況」とでは、その顕現化による効果は異なることが予想される (e.g., Brewer & Weber, 1994; Goethals & Darley, 1997)。

これらの仮説を検討するため、まず、研究1では、社会人を対象に、会社を内集団とした想定法による調査を行った。次に、研究2では、女子大学生を対象に学科を内集団とした準実験を行った。研究2においては、集団間上方比較状況が、集団内の個人間比較に及ぼす効果性に注目し、特性自尊心をさらなる要因として加えて検討を行った。

これらの結果をとおして、集団間文脈の顕現化は、その内容によってどちらの自己評価を維持・高揚するという動機づけへの関心を高めるかを決定し、結果として自己カテゴリー化に影響を及ぼすことが示唆された。

第3章. 集団間文脈と個人の内的要因が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

1. 問題

第2章では、顕現化する集団間文脈の内容が、個人の自己評価への動機づけに影響をもたらし、自己カテゴリー化レベルに違いが認められることが示された。本章ではさらに、自己カテゴリー化過程を規定するものとして、個人の内的要因に着目する。

集団間比較の方向という状況要因だけでなく、その状況におかれる個人の内的要因も内集団成員との個人間比較過程のあり方を規定する要因になることが示されている。たとえば、Schmitt et al. (2000) は、集団間状況の意味は成員が持つ内集団への同一視のレベルによって異なることを明らかにした。彼らは、女性を参加者とし、ジェンダー集団への同一視が特性的に低い人に比べそれが高い人は、創造性課題における集団間上方比較状況におかれたとき、優れた成果を得た内集団成員（女性）をより好ましく評価することを示した（研究1）。これに対し、集団間上方比較状況がない個人間比較状況においては、このような差が認められなかった。また、同一視が高い女性参加者は、集団間比較状況（ただし、どちらの集団が優位であるかといった集団地位関係については知らされていない）において、劣った内集団成員よりも優れた内集団成員を好ましく評価することを示している（研究2）。同一視が高い人の方が集団間比較状況におかれたとき、集団アイデンティティへの関心が高まりやすく、反映過程が生じたためである。

さらに、Blanton et al. (2002) は、内集団成員が、与えられた集団間比較の情報をどのくらい是認するのかの程度も、内集団成員との個人間比較のあり方を左右することを示している。これは、集団間比較の情報を是認しやすいかどうか、集団間の地位関係を変えようとする動機づけの強さに影響するためである。具体的には、内集団が外集団と比較して劣位にあるという状態を変えたいとする欲求を人がどの程度もっているかをとりあげ、この欲求の程度を左右する要因として、内集団に対するステレオタイプを是認する程度に着目したのである。このような視点から行われた一連の研究 (Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002) において、与えられた内集団のネガティブなステレオタイプを内集団成員がどのように捉えるかによって、内集団成員との間に比較過程が生じるか反映過程が生じるかが異なることが明らかになっている。

Blanton et al. (2000) の研究については、第2章で述べた。この研究では、内集団が外

集団に劣っている情報を与えると、内集団成員との反映過程に従事しやすくなることが示された。より具体的な過程は次のように説明される。集団間比較状況におかれると、各内集団成員は自己を内集団に強く同一化させ、その結果として内集団を維持・高揚することへの関心が高まる。このとき、他の内集団成員を交換可能な存在として捉えるという反映過程が導かれるため、人は集団アイデンティティの脅威を低減する存在である優れた内集団成員を積極的に受容しようとするようになると言える。

そして、Blanton et al. (2002) では、先の研究 (Blanton et al., 2000) は、自らの集団についてのネガティブなステレオタイプを内集団のメンバーが正しいと認めていない場合を扱ったものであるとし、それを正しいと認めている場合には、異なる影響が示されると考え検討を行った。ネガティブなステレオタイプを内集団の成員が正しいと認めている場合には、内集団が外集団よりも劣っているという情報を与えられても、人は内集団の成員との比較過程に従事しやすくなるという仮説が検証された。具体的には、「女性は男性に比べ数学的知能が劣る」というステレオタイプを顕現化させた場合、女性は、男性ではなく同性である女性との比較に従事することを示した (研究 1)。これは、女性の数学的空間的能力に関するステレオタイプの是認の高さから説明されている。女性はこのステレオタイプをある程度是認している。そのため、このステレオタイプが活性化されたとき、その領域における能力の高低の評価がもっぱら同性内での基準に基づいてなされるようになったと考えられるのである。

さらに、ステレオタイプの顕現化された状況において、そのようなステレオタイプの信念を特性的に高く持つ人はそうでない人と比べ、外集団成員より内集団成員との比較過程に従事しやすいことも示されている (研究 2)。これは、内集団が外集団よりも劣っているという信念を高く持つ場合、集団間の地位関係の変動可能性を小さく見積もりやすいため、集団間状況におかれても集団内での関係において自己評価を維持・高揚することに関心を向けやすくなるためであると考えられる。

これらの結果は、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらがより顕現化するのかは、集団間比較の状況の有無だけでは決定されない場合もありうることを示している。集団間比較状況の顕現化が個人のカテゴリー化に影響するかどうかは、その状況を判断する集団の各成員の内的要因にも依存するのである。すなわち、集団間文脈の顕現化が自己カテゴリー化に及ぼす影響を、個人がその集団に対するステレオタイプを認めているかいないかという個人の内的要因が調整することを示している。個人の内集団に対

するステレオタイプの捉え方と、集団間比較の内容が一致しているときには、個人の中で個人的アイデンティティが顕現化し、逆に、それらが一致していないときには、社会的アイデンティティが顕現化したのである。これは、その文脈における動機づけから説明できるだろう。つまり、集団間比較状況において、外集団成員が自己評価のための基準として有益である場合には、集団間関係に従事することが動機づけられるのに対して、外集団成員が有益な基準とならない場合には、そのような動機づけが生じないと考えられる。

ここで、自己カテゴリー化を規定する条件として、集団間の地位は必要不可欠な条件だろうか。重要なことは、外集団成員との比較が個人の自己評価にとって有益なものになるか否かであるならば、内集団での比較過程への従事の積極性を既定する条件として重要なものは、「集団間の地位関係の変動可能性」というよりむしろ、「集団間関係の変動可能性」の知覚として捉えることがより適切であると理解されるだろう。個人は自己評価にとって有益な対象との比較に従事しようとするのであり、その有益性を高めるためには必ずしも集団間の地位を必要とはしない。言い換えれば、外集団成員が自己評価のための基準としてどの程度有益かどうか重要であると言える。

しかしこの説明には、代替説明が考えられる。本論文では、集団間関係の知覚が、どちらのアイデンティティでの自己評価維持高揚に従事するのかを動機づける結果、自己カテゴリー化に影響すると仮定している。しかしながら、個人の内的要因が、そのような動機づけを介して自己カテゴリー化に影響するのではなく、それがカテゴリーの顕現性に影響した結果、自己カテゴリー化に影響を及ぼすという代替説明も可能となる。自己カテゴリー化理論におけるカテゴリー顕現性の考え方に基づくならば、本論文の仮説とは異なった仮説が導かれる。自己カテゴリー化理論では、カテゴリー顕現性を自己カテゴリー化の一つの規定因としてあげている。そして、カテゴリー顕現性を決めるのは、接近可能性と適合性の交互作用であるとしている。まず、あるカテゴリーに対するステレオタイプを是認しているということは、そのカテゴリーに対する接近可能性が比較的高いと捉えることができる。また、集団間文脈とそのステレオタイプが一致しているということは、適合性が高いということになる。そうであるならば、集団間上方比較状況は、ステレオタイプを高く有する者にとってはカテゴリー顕現性が高い状況であり、それを低く有する者にとってはカテゴリー顕現性が低い状況であることを意味する。従って、前者では後者に比べ、自己カテゴリー化がより強く促進されるはずである。女性は男性に劣るという信念を持つ者が集団間上方比較状況におかれると、そのような信念を持たない者よりも、社会

的アイデンティティが高まるという仮説がたつのである。しかしながら、Blanton et al. (2000) と Blanton et al. (2002) では、その逆の結果が認められた。ステレオタイプを高く持つ者において、カテゴリー化が促進されなかったのである。逆に、この条件では、集団内が準拠枠として機能し、個人的アイデンティティへの関心が高まっていた。これは、集団間関係への知覚が、カテゴリー顕現性に影響するというよりも、その文脈における自己評価の動機づけに影響した結果であると結論づけられるものである。

本章の主張は、第1章で述べたように、自己カテゴリー化理論というよりもむしろ社会的アイデンティティ理論の主張に一致するところがある。それは、自己高揚動機が社会変動や社会移動をもたらすとしている点である。肯定的な差異性を得るために、集団が利用しうる戦略は、集団間関係の知覚によって規定されるという。そして、社会的アイデンティティ理論からは、以下の予測がたてられる。社会的アイデンティティが脅かされたとき、人は、たとえば社会移動が可能だと判断される場合においては、前の集団から離脱し、別のより上位の集団に入るよう試みると予想される。これに対して社会移動が不可能と判断される場合には、社会変動に取り組むという。内集団の劣位が不当であると判断され、しかもその地位差が不安定であると意識される場合には、優位集団に対して「社会的競争」が生じると予測される。しかしそうでない場合には、比較の対象を内集団より劣位な集団に変える、内集団が有利になるような比較次元を強調する、比較次元の重要性自体を主観的に変えてしまうという戦略を用いるという。一方、優位集団の場合、地位差が不当であり、不安定であると知覚されると、より差別的になることが予想される。

このように社会移動もしくは社会変動という観点から、本研究の仮説を説明するならば、以下ようになる。本章では集団間の透過可能性が低い、つまり社会移動がしがたいと思われる、性別カテゴリーを内・外集団として扱う。そのため、顕現化した集団間関係が不当であり、不安定であると認知される場合、社会的アイデンティティが顕現化しそれに基づいた認知・行動を行うため、集団内での個人間比較において反映過程が生じやすいだろう。この予測は、社会的アイデンティティ理論と同じである。一方、顕現化した集団間関係が不当であるとは捉えられず、安定したものであると認知される場合、社会的アイデンティティ維持・高揚のために何らかの社会変動の反応を示さないと考えられる。本研究では、このような場合、社会的アイデンティティが高まらないため、集団内における個人間関係への関心が高められるだろうと予測する。このとき、個人的アイデンティティが顕現化しそれに基づいた認知・行動を行うため、集団内での個人間比較において比較過程が生

起しやすいだろう。

これらの仮説は、偏見問題をテーマにした、低地位集団の成員は集団間関係の変動可能性が低いと判断した場合、その集団にアイデンティティを持ちにくいという知見(Ellemers et al., 1993; Ellemers et al., 1988)からも十分に予想される。本論文では、低地位集団に関するこれらの知見を確認することに加えて、高地位集団、つまり集団間下方比較におかれた場合においても、集団間関係の変動可能性の知覚が内集団成員との個人間比較過程を調整しうることを明らかにしようとするものである。

第1章でも述べたように、この高地位集団における個人間比較過程の様相については、社会的アイデンティティ理論からは十分に予測できない。社会的アイデンティティ理論や自己カテゴリー化理論では、人は自らの社会的アイデンティティを高い水準で維持しようとして、集団内-集団間の種々の行動に従事すると考えている。このような考えによれば、高地位集団の成員にとっては、その成員性ゆえに既に社会的アイデンティティ高揚の動機づけは満たされている。そのため、高地位集団の成員が集団内の個人間関係を自らのアイデンティティ高揚のために、戦略的に展開することはないと予想できる。しかしながら、自己評価への動機づけに依存し、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの選択を能動的に行う可能性を想定するならば、社会的アイデンティティが既に満たされている高地位集団の成員であっても個人的アイデンティティの高揚のために集団内個人間関係に積極的に従事することもありうると予測できる。

以上より、本章では、個人の内的要因に着目し、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらがどのような場合に顕現化するのか、そしてその顕現化が集団内での個人間比較の過程にどのように影響するのかをより詳細に検討する。

まず、研究3において、これまで示してきた先行研究と同様に状況要因として集団間比較の方向性をとりあげる。また、個人の内的要因としては、日頃、内集団を高く評価しているか、低く評価しているかという内集団評価をとりあげる。それらの交互作用によって、集団間関係変動可能性の認知が決まると考えるためである。つまり、研究3では、その交互作用が内集団成員との比較において比較過程か反映過程のどちらがより顕現化するのかを実験的に検討する。Blanton et al. (2002) と Blanton et al. (2000) の研究では、集団間上方比較状況のみが扱われていた。これに対して研究3では、集団間上方比較状況と集団間下方比較状況の双方を検討対象とする。言い換えれば、自らの内集団が劣位にある状況と優位にある状況のそれぞれにおいて、日頃の内集団評価の高低が集団内の個人間比較の

過程に及ぼす影響を検討する。

次に、研究4では、個人の内的要因として、集団間で役割が区別されており、社会的にその関係性が変化しないという認知を個人がどれくらい持っているかに着目する。そして、それが自らをその枠組みの内部で自己を評価しようとする傾向を高めると考える。本研究では、Blanton et al. (2002) と同じく性別カテゴリーを用いこの過程を検討する。具体的には、男性と女性が社会的に別の役割を果たすものでありその関係性は変わらぬものであるという考えを強く有するほど、性別を超えて競うことに意味がないと考えるようになり、結果として、性別カテゴリーを準拠枠として用いようとする傾向が高まるだろうとの予測を検証する。

2. 研究3 集団間比較の方向と内集団評価が集団内での個人間比較に及ぼす影響

本研究では、これまで示してきた先行研究と同様に状況要因として集団間比較の方向性を取りあげる。また、個人の内的要因としては、日頃、内集団を高く評価しているか、低く評価しているかという内集団評価をあげる。そしてそれらの交互作用によって、内集団成員との比較において比較過程か反映過程のどちらがより顕現化するのを実験的に検討する。Blanton et al. (2002) と Blanton et al. (2000) の研究では、集団間上方比較状況のみが扱われていた。これに対して本研究では、集団間上方比較状況と集団間下方比較状況の双方を検討対象とする。言い換えれば、自らの内集団が劣位にある状況と優位にある状況のそれぞれにおいて、日頃の内集団評価の高低が集団内の個人間比較の過程に及ぼす影響を検討する。

自分たちの集団が外集団よりも劣っているという集団間上方比較の情報を、日頃内集団評価の高い人に与えると、彼らは、その状況を覆し、内集団を外集団よりも高めようと動機づけられるだろう。一方、同様の情報を日頃内集団評価の低い人に与えると、彼らは、その情報を是認してしまうだろう。この過程は、Blanton et al. (2002) の知見と一致するものである。

さらに本研究では、このような内集団評価の調整効果が集団間下方比較状況においても認められると予想する。自分たちの内集団が外集団よりも優れているという集団間下方比較の情報が、日頃内集団への評価が高い人に与えられると、彼らはその情報を是認し、外集団によって内集団が脅威づけられる可能性を低く見積もるだろう。それに対し、日頃内

集団を低く評価している人にとっては、集団間下方比較情報を与えられても、その情報から内集団の優位性を確証することは困難であるため、外集団によって内集団が脅威づけられる可能性を低く見積もることはないだろう。

したがって、集団間上方比較の情報が内集団評価の高い人に与えられると内集団成員との比較において反映過程が生起しやすく、内集団評価の低い人に与えられると比較過程が生起しやすいただろう。一方、集団間下方比較の情報が、内集団評価の高い人に与えられると内集団成員との比較において比較過程が生起しやすく、内集団評価の低い人に与えられると、反映過程が生起しやすいただろう。先にも述べたが、Blanton et al. (2002) の研究が明らかにしたことは、劣位集団の成員が内集団の地位に「あきらめ」を感じるかどうか、内集団成員のとの個人間比較過程を調整することであった。これに対して、本研究では、彼らの知見を確認するとともに、優位集団の成員の内集団地位に対する「慢心」を感じるかどうかまた内集団成員との個人間比較過程を調整しうることを明らかにしようとするものであると言える。

なお、本研究は、Blanton et al. (2000) や Blanton et al. (2002) が扱っているようなステレオタイプに問題の焦点をあてたものではない。集団間文脈が、人が個人的あるいは社会的アイデンティティのどちらに基づいて行動するかに影響し、その結果、集団内の個人間関係にどのような影響が及ぶのかに関心をおいている。具体的には、本研究では内集団に性別カテゴリーを用い、比較に用いる課題として「社会的知能」を用いた。それは、社会的知能と性別との関係についての捉え方が日本においてあまり固定化されたものではないと考えたためである。この題材を用いることで、Blanton et al. (2002) が用いているような、女性は言語的能力に優れ、男性は数理的能力に優れているといったようなステレオタイプ化された態度とは異なり、男性が優れているとする情報でも、女性が優れているとする情報でも操作可能となる。このような操作を行うことで、「性別やステレオタイプの内容の影響過程」ではなく、「集団間比較状況の内容の承認による影響過程」をより厳密に見ることが可能になると考えたのである。

次に、Blanton et al. (2002) は、個人間比較について、内集団成員との比較と外集団成員との比較を同時に行う手続きであったが、本研究ではこれらの条件を独立に操作する。彼らの実験では、女性の比較対象より参加者の能力が低く、男性の比較対象より参加者の能力が高いという女性上位条件と、男性の比較対象より参加者の能力が低く、女性の比較対象よりも参加者の能力が高いという女性劣位条件の2条件のみがもうけられている。そ

して、女性上位条件において、下方比較の効果が認められると男性の比較対象の成果を参照した、上方比較の効果が認められると女性の比較対象の成果を参照したと解釈している。同様に、女性劣位条件においては、上方比較の効果が認められると男性の比較対象の成績を参照した、下方比較の効果が認められると女性の比較対象の成果を参照したと解釈している。そして彼らはこのような手続きはジレンマ状況を作り出すという意味で有意義であると述べている。つまり、他の女性と比較して自分が劣っている状況であり個人的アイデンティティへの従事を促しそうな状況においてさえも、女性の地位改良に従事するといった効果が顕著になると述べている。しかしながら、この操作では、どちらの比較対象を参照した結果そのような効果が認められたかは明確にはならない。したがって、本研究では、研究1・2と同様、優れた内集団成員との比較であるのか、劣った内集団成員との比較であるのかを独立変数の一つとする。そうすることで、社会的比較の効果の過程を明確にすることができると考えている。

また、このような集団間関係に関する情報を承認するか否かに関わる個人の内的要因として、本研究では集団自尊心を構成する要素の一つでもある、内集団に対する評価の高さに注目した。同じく、集団自尊心の構成要素である同一視を個人の内的要因として扱うならば、予測は異なる。特性的にその集団に対する同一化の程度の高い、すなわち常にその集団の一員であることが自らのアイデンティティにとって重要である人の場合、状況に関わらず集団優位性を示すことへの関心が高く、集団間差異化に従事することが予想される。事実、Schmitt et al. (2000) はそのことを確認している。この過程は自己カテゴリー化理論の延長上にある。しかしながら、問題で述べたとおり、本研究で扱う自己カテゴリー化に及ぼす動機づけの影響はそれとは異なる。内集団評価とは、内集団が優れているかどうかという認知である。内集団評価が高くても、状況によってはその集団でのアイデンティティにこだわるのではなく、個人的アイデンティティで自己を捉えるといったアイデンティティ選択を自ら行うことが可能になると考えているのである。

以上より、本研究では、内集団を日頃どのように評価しているかという個人の内的要因を用い、その評価と与えられた集団間比較の情報が一致するかどうかによって、情報を是認する程度が異なるだろうと予測した。そして、これらの要因が、集団内の個人間比較が個人に及ぼす影響について認知・感情・態度の各側面から測定する。具体的には、個人間比較後の「状態自尊心」、「気分状態」、さらに内集団成員に対する「拒否-受容的態度」の測定である。

したがって、本研究では以下の仮説を検討する。

仮説

- 1-a. 集団間上方比較条件におかれたとき、内集団評価が高い群において反映効果が認められるだろう。
- 1-b. 集団間上方比較条件におかれたとき、内集団評価が低い群において比較効果が認められるだろう。
- 2-a. 集団間下方比較条件におかれたとき、内集団評価が高い群において比較効果が認められるだろう。
- 2-b. 集団間下方比較条件におかれたとき、内集団評価が低い群において反映効果が認められるだろう。

2-1. 方法

2-1-1. 参加者

大学生 100 名 (男性 41 名, 女性 59 名, 平均年齢 18.99 歳 ($SD = 0.85$, 18-23 歳, 1 名不明)。

2-1-2. 独立変数

集団間比較 (上方比較-下方比較), 個人間比較 (上方比較-下方比較), 内集団評価 (高-低)。すべて被験者間変数とした。

2-1-3. 手続き¹ (Figure 3-1. 参照)

リクルーティング手続き 『社会的知能テストの検討を目的とする実験である』とし、心理学に関連する授業の受講生に対し実験参加を求めた (成績評価におけるボーナスポイントと引き替え)。なお、参加者は事前に以下の内容の質問紙に回答していた。(i) 日本語版自尊心尺度 (Rosenberg (1965) の翻訳版; 山本他 (1982); 10 項目・5 件法; あてはまらない (1) ~ あてはまる (5))。(ii) 認知的構造化欲求尺度 (Bar-tal (1994) の翻訳版;

¹ 本研究には、問題で述べてきた一連の過程に介在するメカニズムを検討するためのいくつかの尺度も含まれていたが、ここではそれらについては記載しない。なお、それらの尺度は本研究の結果には影響がないと考えている。

浦 (1999) ; 20 項目・6 件法; 全く当てはまらない (1) ~ 非常に当てはまる (6))。 (iii) 集団自尊心尺度 (Luhtanen & Crocker (1992) の翻訳版; 渡辺 (1994)) を用い, 自らの性別カテゴリーに対する集団自尊心をどの程度持っているかを測定した。これは, Luhtanen and Crocker (1992) が, 集団アイデンティティに対する個人の一般的な傾性を測定するものとして開発したものである。しかし, 本研究では項目の一部を改訂し, 具体的な集団である性別カテゴリー (男性もしくは女性) に対するアイデンティティの高さを測定するものとした (16 項目・5 件法; 全くそうでない (1) ~ 全くそのとおりだ (5))。これは, 内集団評価の高さの指標となる変数である。

実験手続き 性別カテゴリーを内集団として用いるため, 性別カテゴリーが顕現化するように参加者が男女同人数となるように 14 ~ 16 名ずつ実験室に呼び, 教室の半分のスペースに男性を, 残り半分のスペースに女性を座らせた。実験室の各座席には, ディスプレイとテンキーが設置してあり, 実験者が操作するパーソナルコンピュータ (ホストコンピュータ) から, 各参加者のディスプレイに刺激を送ることができる。また, テンキーでの入力ホストコンピュータに記録されるようになっていた。実験の教示は, 実験者の男女各 1 名による口頭での教示に加え, 教示内容を簡略化した文章をディスプレイにも呈示して行った。また, 女性 1 名がホストコンピュータの操作を行った。

1. 実験目的の教示 まず, 社会的知能の違いがもたらす様々な影響について詳しく知ることが実験の目的であるというカバーストーリーを教示した。続けて, 社会的知能とは人々に関する正確な解釈を生み出す能力であり, その能力を測定する社会的能力テストの得点が高ければ高いほど将来自分への満足度が高いということが示されていると教示した。この教示は社会的知能に対する参加者の重要性を高めるために行った。参加者に質問が無いことを確認した後, 社会的知能テストで良い得点をえることが参加者にとってどの程度重要であるかに関する質問 4 項目 (事前の課題の重要度) に回答を求めた。それらの項目は, 社会的知能と社会生活での成功, 直感的な処理能力がどれぐらい関連しているか, またそれらの能力が高いことが参加者にとってどのくらい重要であるかを測定するものであり, 5 件法 (全くそう思わない (1) ~ かなりそう思う (5)) で回答を求めた。

2. 社会的知能テストの実施 社会的知能テストは, Archer (1980; 工藤・市村 (訳), 1988) より 10 問抜粋し作成したものをを用いた。写真に写った複数の人物の間の関係性を推測させるというテストである。本研究では, テストの設問は, 参加者のディスプレイ上に, 一枚の写真と答えの選択肢を同時に呈示することにより行った。ホストコンピュータによ

て、設問が 10 秒ごとに自動的に変わるように設定してあった。そして、参加者は、選択肢から正しいと思う番号を選び、その番号をテンキーで押すことが求められた。また、得点は正答率と解答の速さから計算されることを伝えた。解答方法を十分に説明した後、例題を用いテンキーを押す練習を行い、テストを実施した。

3. 集団間比較の操作 ホストコンピュータが得点を処理する時間を用いて社会的知能のさらなる解説を行うとして、以下の 2 種類のうちどちらか一方の教示を行った。どちらが教示されるかはセッションごとにランダムに決められた。教示 X は、女性より男性が優れているという内容であり、この情報は男性参加者にとっては集団間下方比較情報、女性参加者にとっては集団間上方比較情報であることを意味する。一方、教示 Y は男性より女性が優れているという内容であり、この情報は男性参加者にとっては集団間上方比較情報、女性参加者にとっては集団間下方比較情報であることを意味する。このような操作をすることによって、男女差を統制した上で集団間比較の影響を検討できる。教示内容の概要を以下に示す。教示 X「社会的知能の高い人の方が人間関係上の交渉が巧みであり、職場などにおいて高い業績をあげる。男性に比べ女性は社会的知能が劣っている。そのため、対人交渉が求められる仕事において、女性より男性の方が就職しやすいといった問題を生じさせているのかもしれない」、教示 Y「社会的知能の高い人の方が簡単に良好な人間関係を作り上げることができ、だんだんと多くの人から信頼を受けるようになる。女性に比べ男性は社会的知能が劣っている。そのため、接客や対人的な仕事において、男性より女性の方が活躍しやすいといった問題を生じさせているのかもしれない」。

4. 個人間比較の操作² まず、参加者本人の自身の得点をディスプレイ上に呈示することを告げた。参加者の実際の成果にかかわらず、参加者すべてのディスプレイ上に、「50 点満点中 30 点」という得点が 2 秒間呈示された。続けて、参加者に、本実験では参加者本人の特性と社会的知能の関連性だけでなく、社会的知能テストである得点を得た人が、他者からどのように評価されやすいのかについて検討することも目的であると告げた。また、

² 参加者自身の社会的知能テストの得点の高さそのものに対するイメージが自己評価になんらかの影響を与える可能性もある。本研究では、そのような影響をできるだけ除き、参加者に A さんの得点に関心を持たせる必要があった。また、A さんの方が能力が高いもしくは低いことを、後の A さんの得点を呈示することで明確にする必要があった。そこで、点数を聞いただけでは自己の能力が判断しづらく、A さんの得点操作を不自然ではなく行うことを可能にする得点として 50 点満中 30 点という得点を用いた。実験終了後の自由記述等で、自分自身が得た得点のフィードバック直後に感じたことに関しての記述に自分自身の得点に対する快・不快を報告したものはほとんどいかなかった。したがって、操作は妥当であったと言える。

ホストコンピュータが参加者一人一人に別々の人を、今テストを行った人からランダムに選び、その人 (A さん) についての情報を呈示すると告げた。しかし実際には、個人間比較の操作のため、以下の2つのどちらかの情報が呈示された。個人間上方比較条件においては、「Aさんは、同大学同学部の男性 (これは参加者が男性の場合である。参加者が女性であれば「同大学同学部の女性」とした。集団内 (=同性) での個人間比較とするためである)、テストの特点是 42点」とディスプレイ上に呈示した。個人間下方比較条件では、テストの得点を 18点とした。

最後に質問紙を配布し、以下の尺度への回答を求めた。

質問紙 (i) 事後の課題の重要度 事前の課題の重要度と同様の尺度で質問した。(ii) 日本版状態セルフ・エスティーム尺度 (舘・宇野, 2000) 状態自尊心を測定する計20項目から、Heatherton and Polivy (1991) の「外見因子」とされる6項目を除いた計14項目について、「そう思わない」(1) ~ 「そう思う」(5) の5件法で回答させた (iii) 一般感情尺度 (小川他, 2000) 肯定的感情, 否定的感情, 安静的感情の下位尺度を持つ24項目について、4件法 (まったく感じていない (1) ~ 非常に感じている (4)) で回答させた。(iv) 拒否-受容尺度 (前田, 1998) 対象人物 (Aさん) に対して項目内容をどの程度とるかについて回答を求めた (14項目・7件法; 絶対とる (1) ~ 絶対にとらない (7))。(v) 操作チェック 最後に、操作チェックのために、以下の質問を付け加えた。自身と対象人物 (Aさん) の社会的知能がそれぞれどれほど優れているかという能力評価、また、男性の一般的な社会的知能・女性の一般的な社会的知能がどれほど優れているかという能力評価をさせた (全く優れていない (1) ~ 非常に優れている (5))。対象人物に実際の人をイメージしたかどうか (はい・いいえ) に回答を求めた。なお、これらの変数うち、(ii)(iii)(iv) が従属変数である。

参加者全員が質問紙に回答した後、ディブリーフィングを行った。

研究3の手続き

リクルーティング

- (i) 日本語版自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982)
 - (ii) 認知的構造化欲求尺度 (浦, 1999)
 - (iii) 集団自尊心尺度 (渡辺, 1994)
- : 参加者の属する性カテゴリー (男性・女性) に対する評価 = 内集団評価の得点

実験手続き

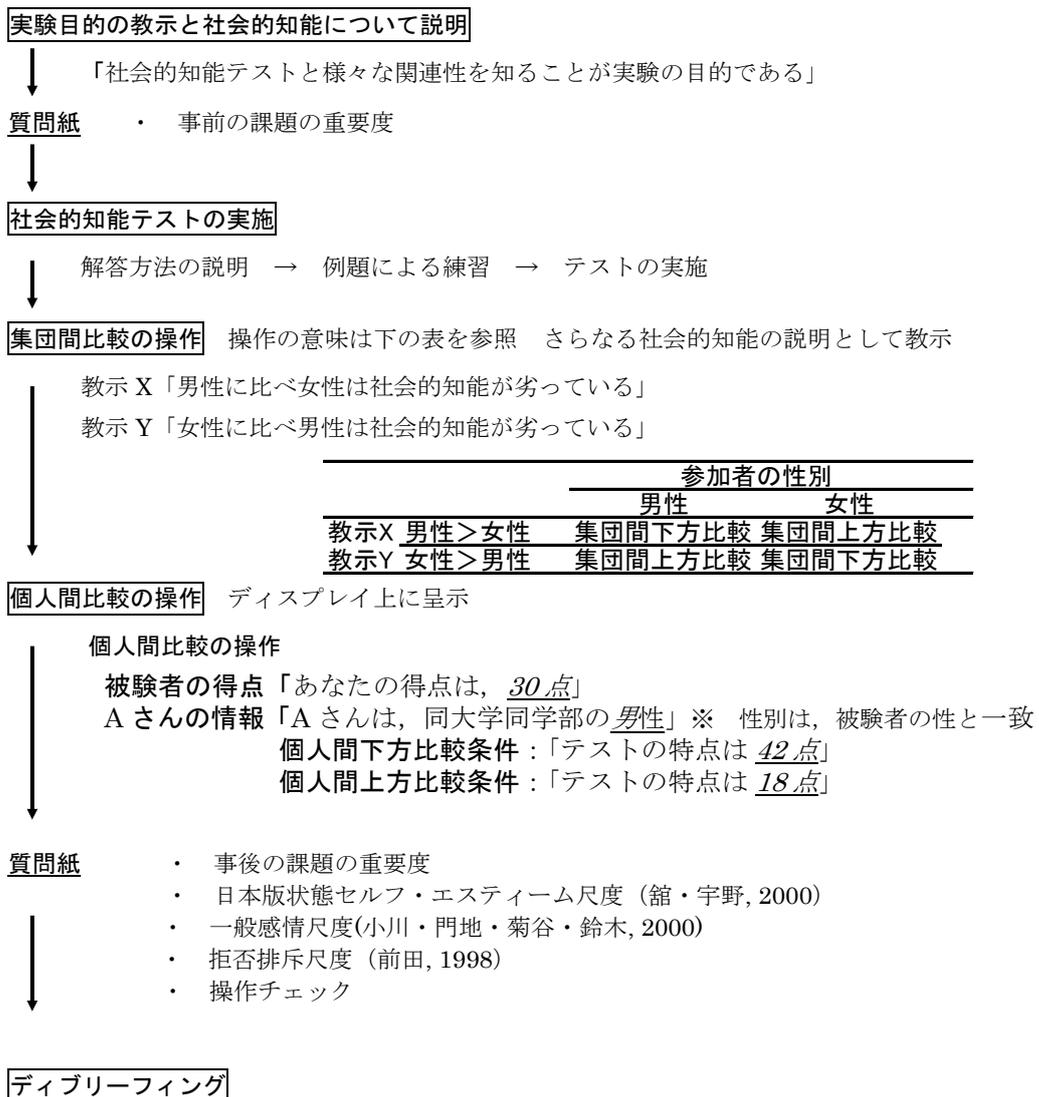


Figure 3-1. 研究3の手続きのフローチャート

2-2. 結果

2-2-1. 予備的分析

特性自尊心³ 特性自尊心尺度の信頼性は十分に高かった ($\alpha = .86, M = 2.81, SD = 0.82$)。社会的比較による影響は、特性自尊心の高さによって異なることが知られている (e.g., Taylor et al., 1996)。したがって、本研究では、特性自尊心得点を共変量として扱うことにする。

認知的構造化欲求尺度⁴ 全項目の得点の平均値を算出し、認知的構造化欲求得点とした ($\alpha = .80, M = 3.41, SD = .57$; 「何が起こるかわからない状況におかれると不愉快になる」「どんな問題にも明確な答えというものがあると思う」他)。認知的構造化欲求の高さが自己評価や他者の受容に影響することが示されている (浦, 1999)。よって、本研究では、この得点を共変量として扱うことにする。

集団自尊心尺度 渡辺 (1994) の尺度構成のうち、集団評価を測定する肯定的評価と否定的評価 (集団に対する自己評価・他者評価; Luhtanen and Crocker (1992) における、「所属集団に対する自己の評価」と「所属集団に対する他者評価の認知」にあたる) の因子に含まれる 8 項目 (全体 $\alpha = .73, M = 3.45, SD = .59$; 男性 $\alpha = .77, M = 3.52, SD = .60$, 女性 $\alpha = .75, M = 3.40, SD = .59$; 男女差 $t(98) = 1.01, ns$) を内集団への肯定的評価となるように、平均得点を算出し、内集団評価得点とした (「男性 (もしくは女性; 参加者の性別による) は、全体的に見れば好ましい集団だと思う」「一般的に言えば、他の人びとは、男性 (もしくは女性) を価値のない集団だと考えている (逆転項目)」他)。

内集団評価得点の全体平均値を基に、参加者を内集団評価高群 ($M = 3.87, SD = .30$) と低群 ($M = 2.94, SD = .43$) に分割した ($t(98) = 12.59, p < .001$)。

³ 特性自尊心が社会的比較に及ぼす影響については、第2章の研究1ですでに述べた。特性自尊心による影響を取り除くため、共変量とする。

⁴ Neuberg & Newson (1993) によれば、認知的構造化とは「抽象的な心的表象 (先行経験の単純化された一般化, たとえば, スキーマ的プロトタイプ, スクリプト, 態度, ステレオタイプ) の生成と利用と定義されている。そして、人がどの程度認知的な構造化を求めているかを表す概念が、認知的構造化欲求である。この認知的構造化欲求の高い個人は、抽象的な心的表象を用いて自己と環境を認識しようとする傾向が高い。いいかえれば、構造化欲求の高い人は低予測可能性事態への耐性が低い (Webster & Kruglanski, 1994)。そして、浦 (1999) は、このような情報処理への欲求の違いが、自己もしくは知り合っていない他者を評価する際に影響を及ぼすことを示している。特に本実験は、自己と他者評価に関する情報の曖昧さが高い状況であるため、認知的構造化欲求の影響を取り除く必要があると考えられる。

日本版状態セルフ・エスティーム尺度 Heatherton and Polivy (1991) の尺度構成にしたがって2因子にわけ、各因子に含まれる項目の平均得点を算出した。それぞれ、社会性に関する状態自尊心得点 (7項目, $\alpha = .77$; 「他人が、どのように私のことを思っているのか心配である」他)、パフォーマンスに関する状態自尊心得点 (7項目, $\alpha = .83$; 「私は自分の能力に自身がある」他) であった。

一般感情尺度 既存の尺度構成にしたがって3因子にわけ、各因子に含まれる項目の平均得点を算出した。それぞれ、肯定的感情得点 (8項目, $\alpha = .92$; 「活気のある」「楽しい」他)、否定的感情得点 (8項目, $\alpha = .92$; 「動揺した」「びくびくした」他)、安静的感情得点 (8項目, $\alpha = .89$; 「ゆっくりした」「平穏な」他) であった。

拒否-受容尺度 既存の尺度構成にしたがって2因子にわけ、各因子に含まれる項目の平均得点を算出した。それぞれ、拒否的態度得点 (8項目, $\alpha = .87$; 「Aさんに冷たい態度をとる」「Aさんと一緒に課題をしないですむよう立ち回る」他)、受容的態度得点 (6項目, $\alpha = .84$; 「Aさんに積極的に話しかける」「Aさんが失敗したら励ます」他) であった。

2-2-2. 操作チェック

個人間比較 Aさんに対する能力評価の得点から参加者自身の能力評価の得点を引き、個人間能力差得点を算出した。個人間能力差得点を従属変数とし、個人間比較×集団間比較×内集団評価の分散分析を行ったところ、個人間比較の主効果が認められた ($F(1,92) = 128.19, p < .001$)。個人間上方比較 ($M = 1.68, SD = .14$) の方が個人間下方比較 ($M = -.54, SD = .14$) よりも個人間能力差得点は高かった。

集団間比較 男性に対する能力評価・女性に対する能力評価得点を用いて、外集団に対する評価得点と内集団に対する評価得点を算出し、その差得点を集団間能力差得点とした。たとえば、参加者が男性であれば、女性に対する評価得点から男性に対する評価得点を引いた得点が集団間能力差得点となる。この得点を従属変数とし、個人間比較×集団間比較×内集団評価の分散分析を行ったところ、集団間比較の主効果が認められた ($F(1,92) = 34.63, p < .001$)。集団間上方比較 ($M = .67, SD = .15$) の方が集団間下方比較 ($M = -.55, SD = .14$) よりも集団間能力差得点は高かった。

課題の重要度 課題実施前に評定された課題の重要度 ($\alpha = .55$) と課題実施後に評定された課題の重要度 ($\alpha = .65$) の平均得点は、それぞれ 3.60 ($SD = .59$) と 3.59 ($SD = .64$) であった。重要度の評定時期 (課題実施前-後; 被験者内) × 集団間比較 × 個人間比較 × 内集

団評価の分散分析を行った結果、重要度の評定期×個人間比較の2要因の交互作用 ($F(1,90) = 3.18, p < .10$) が有意である傾向にあった。課題の重要度の高さの違い、また、事前事後の変化は、社会的比較にとって重要な要因である。したがって、事前の課題の重要度を共変量として、以下の仮説の検証を行ったが、いずれの分析においても、共変量の説明率は有意でなかった。よって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

対象人物のイメージ 対象人物として知り合いの人をイメージした人は19名、しなかった人は81名であった。そこで、知り合いをイメージしたか・しなかったかを共変量として、以下の仮説の検証を行ったが、共変量の説明率はいずれの変数においても有意でなかった。よって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

2-2-3. 仮説の検証

まず、性差の要因を除き集団間比較の要因を検討することが妥当かどうかを検討するため、状態自尊心（社会性に関する状態自尊心得点・パフォーマンスに関する状態自尊心得点）・一般感情（肯定的感情得点・否定的感情得点・安静的感情得点）・受容拒否尺度（受容的態度得点・拒否的態度得点）を従属変数とし、集団間比較（集団間上方比較・集団間下方比較）×個人間比較（個人間上方比較・個人間下方比較）×内集団評価（高・低）×参加者の性別（男性・女性）の4要因の多変量共分散分析（共変量 = 特性自尊心得点・認知的構造化欲求得点）を行った。その結果、参加者の性別の主効果は認められた ($F(7,76) = 2.97, p < .01$) が、性別と他の独立変数との交互作用はいずれも認められなかった。さらに、上記の分析で独立変数であった参加者の性別を共変量に入れ替え、集団間比較×個人間比較×内集団評価の3要因の多変量共分散分析を行ったが、参加者の性別の説明率は有意ではなかった。このことは、集団間比較の操作に性差が影響しないことを示している。

したがって、集団間比較・個人間比較・内集団評価の3要因を独立変数とし、特性自尊心得点と認知的構造化欲求得点を共変量とし、多変量共分散分析を行った。その結果、3要因の交互作用が有意だった ($F(7,84) = 2.56, p < .05$)。そのため、各変数を従属変数とする、一変量の共分散分析を行った。

ここではまず、一変量の共分散分析の結果のうち、仮説で述べた3要因の交互作用の結果のみを示す。集団間比較×個人間比較×内集団評価の3要因の交互作用は、社会性に関

する状態自尊心得点 ($F(1,90) = 7.08, p < .01$; Figure 3-2), 肯定的気分得点⁵ ($F(1,90) = 3.60, p < .07$; Figure 3-3), 受容的態度得点 ($F(1,90) = 4.26, p < .05$; Figure 3-4) において認められた。

そこで、まず社会性に関する状態自尊心得点について下位検定を行ったところ、集団間下方比較・集団間上方比較条件共に、内集団評価×個人間比較の単純交互作用が有意だった (集団間下方比較: $F(1,92) = 4.27, p < .05$, 集団間上方比較: $F(1,92) = 3.15, p < .08$)。さらなる下位検定 (Bonferroni 法による) によって、以下の有意な差が認められた。Figure 3-2 に示されたとおり、集団間上方比較条件において、内集団評価高群は、個人間下方比較条件 ($M = 2.40, SE = .17$) よりも個人間上方比較条件 ($M = 3.24, SE = .20$) の社会性に関する状態自尊心得点が高かった ($F(1,90) = 10.45, p < .01$)。これは仮説 1-a を支持する結果である。一方、集団間下方比較条件において、内集団評価高群は、個人間上方比較条件 ($M = 2.57, SE = .15$) よりも個人間下方比較条件 ($M = 2.97, SE = .17$) の社会性に関する状態自尊心得点が高い傾向にあった ($F(1,90) = 3.14, p < .10$)。これは仮説 2-a を支持する結果である。

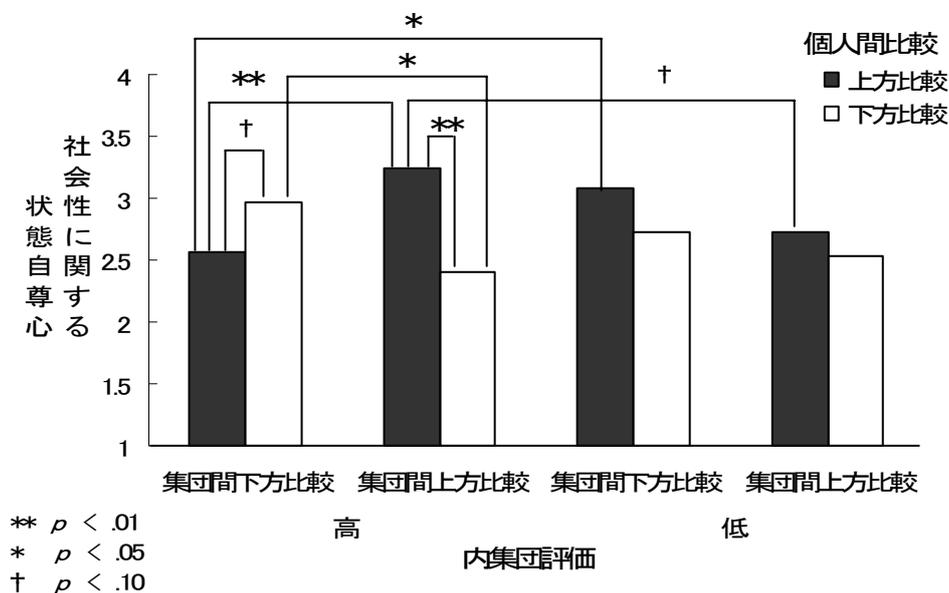


Figure 3-2. 社会性に関する状態自尊心に、集団間比較、個人間比較、内集団評価が及ぼす影響

⁵ 肯定的気分得点についての分析では、構造化欲求得点の共変量の説明率は有意ではなかった。しかしながら、他の分析との一貫性を重視し、ここでは、この得点も共変量とした結果を記載している。なお、この得点を共変量から除いても、結果の有意性は変化しなかった。

また、集団間上方比較条件では、内集団評価低群 ($M=2.73, SE=.20$) よりも高群の方が、個人間上方比較条件における社会性に関する状態自尊心が高かった ($F(1,90) = 4.45, p < .05$)。これは、仮説 1-a・1-b を間接的に支持する結果である。一方、集団間下方比較条件では、内集団評価高群よりも低群 ($M=3.08, SE=.19$) の方が個人間上方比較条件における社会性に関する状態自尊心が高かった ($F(1,90) = 4.45, p < .05$)。これは、間接的に、仮説 2-a・2-b を支持する結果である。

次いで、肯定的気分得点において下位検定を行ったところ、集団間上方比較、集団間下方比較ともに、内集団評価×個人間比較の単純交互作用は認められなかった。しかしながら、社会性に関する状態自尊心で認められた結果と比較検討するため、それぞれの比較条件ごとにさらなる検討 (Bonferroni 法による) を試みたところ、以下の有意な差が認められた。Figure 3-2 に示されたとおり、集団間上方比較条件では、肯定的気分得点は内集団評価低群において、個人間上方比較 ($M = 2.21, SE = .22$) よりも個人間下方比較 ($M = 2.77, SE = .20$) の方が高い傾向にあった ($F(1,90) = 3.51, p < .10$)。これは、仮説 1-b を支持する結果である。

また、集団間下方比較条件では、内集団評価低群よりも高群 ($M = 2.62, SE = .19$) の方が個人間下方比較条件における肯定的気分得点が高い傾向にあった ($F(1,90) = 2.91, p < .10$)。これは仮説 2-a・2-b を間接的に支持する結果である。

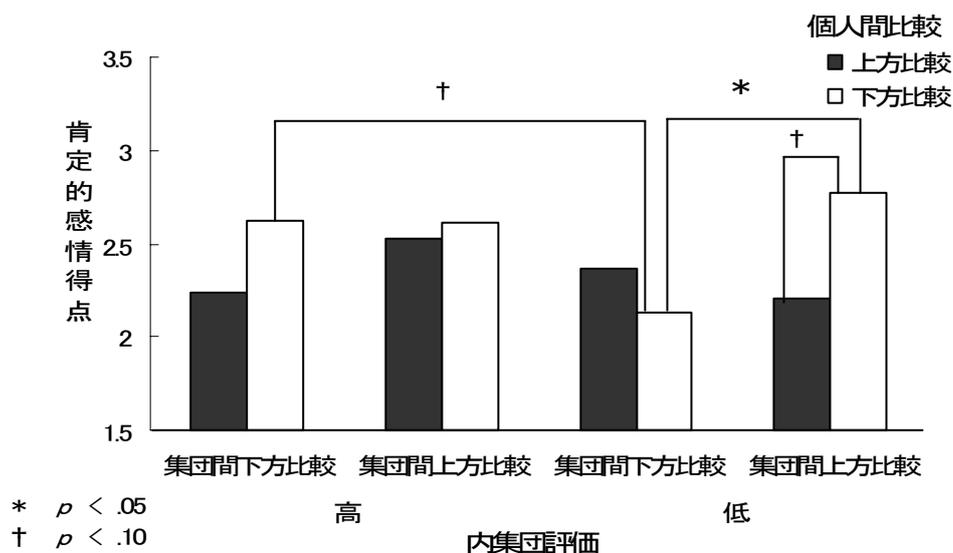


Figure 3-3. 肯定的気分得点に、集団間比較、個人間比較、内集団評価が及ぼす影響

受容的態度得点についての下位検定の結果、集団間上方比較、集団間下方比較ともに、内集団評価×個人間比較の単純交互作用は認められなかった。しかしながら、社会性に関する状態自尊心で認められた結果と比較検討するため、それぞれの比較条件ごとにさらなる検討 (Bonferroni 法による) を試みたところ、以下の有意な差が認められた。集団間上方比較条件では、内集団評価低群において、個人間上方比較条件 ($M = 4.32, SE = .22$) よりも個人間下方比較条件 ($M = 4.90, SE = .19$) の方が受容的態度得点が高かった ($F(1,90) = 5.63, p < .05$)。これは仮説 1-b を支持する結果である。一方、集団間下方比較条件では内集団評価低群において、個人間下方比較条件 ($M = 4.33, SE = .22$) よりも個人間上方比較条件 ($M = 4.91, SE = .20$) の方が受容的態度得点が高い傾向にあった ($F(1,90) = 3.65, p < .10$)。これは、仮説 2-b を支持する結果である。

また、集団間下方比較・個人間下方比較条件において、内集団評価低群よりも高群 ($M = 4.89, SE = .18$) で受容的態度得点は高い傾向にあった ($F(1,90) = 3.88, p < .10$)。これは、仮説 2-a・2-b を間接的に支持する結果である。

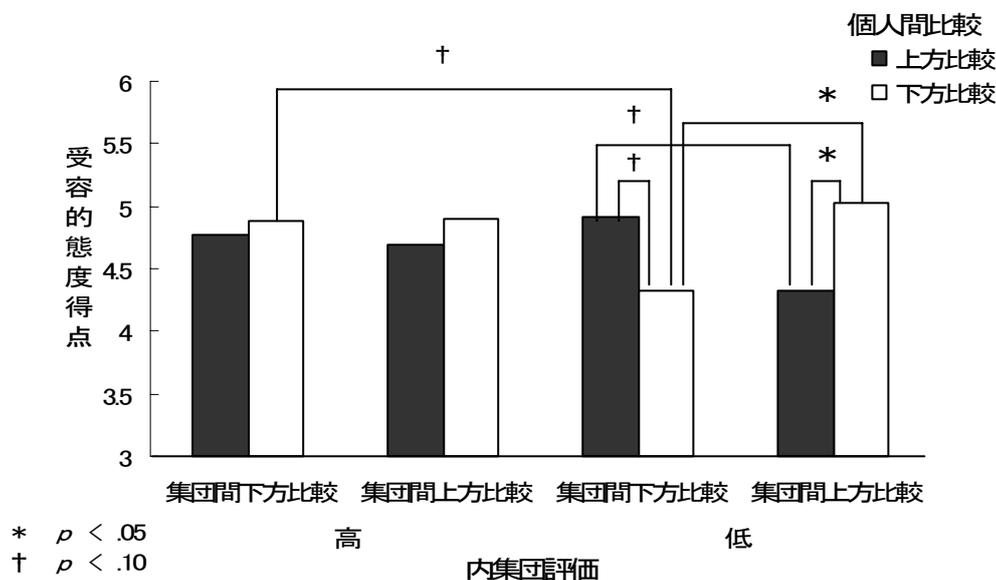


Figure 3-4. 受容的態度得点に、集団間比較、個人間比較、内集団評価が及ぼす影響

その他の変数、つまり、パフォーマンスに関する状態自尊心得点 ($F(1,90) = .53, ns$) ・否定的感情得点 ($F(1,90) = 1.27, ns$) ・安静的感情得点 ($F(1,90) = .26, ns$) ・拒否的態度得点 ($F(1,90) = .68, ns$) では、有意な傾向が認められなかった。

2-2-4. 付加的な結果

仮説として明示していないが、主効果・2 要因の交互作用についても有意性が認められたため、報告する。ここでは、有意な差が認められた結果、またその傾向が示された結果のみを記載する。

個人間比較の主効果がある傾向が、社会性に関する状態自尊心においてのみ認められた ($F(1,90) = 3.68, p < .10$)。個人間下方比較条件 ($M = 2.66, SE = .09$) より個人間上方比較条件 ($M = 2.904, SE = .09$) において社会性に関する状態自尊心が高かった。また、内集団評価の主効果は、拒否的態度得点において認められた ($F(1,90) = 6.83, p < .05$)。内集団評価が高い人 ($M = 1.63, SE = .21$) より低い人 ($M = 2.08, SE = .12$) の方が内集団成員を拒否的な態度をもつ傾向が高かった。

集団間比較×個人間比較の交互作用が、社会性に関する状態自尊心得点 ($F(1,90) = 4.24, p < .05$) と受容的態度得点 ($F(1,90) = 5.65, p < .05$) において認められた。社会性に関する状態自尊心得点について下位検定の結果、集団間上方比較条件において、個人間下方比較条件 ($M = 2.47, SE = .13$) より個人間上方比較条件 ($M = 2.99, SE = .14$) の方が、社会性に関する状態自尊心が高かった ($F(1,90) = 7.60, p < .01$)。また、個人間下方比較条件において、集団間上方比較条件 ($M = 2.47, SE = .13$) よりも集団間下方比較条件 ($M = 2.85, SE = .133$) において、社会性に関する状態自尊心が高かった ($F(1,90) = 4.33, p < .05$)。一方、受容的態度得点についての下位検定の結果、集団間上方比較条件においては、個人間上方比較条件 ($M = 4.50, SE = .15$) より個人間下方比較条件 ($M = 4.96, SE = .14$) の方が、受容的態度得点が高かった ($F(1,90) = 4.90, p < .05$)。

2-3. 考察

以上より、集団間上方比較条件におかれたとき、内集団評価が高い群において反映効果が認められるだろうという仮説 1-a は、社会性に関する状態自尊心において支持された。集団間上方比較条件において、内集団評価が高い人は集団アイデンティティへの関心が高まった結果だと考えられる。また、集団間上方比較条件におかれたとき、内集団評価が低い群において比較効果が認められるだろうという仮説 1-b は、肯定的気分・受容的態度得点において支持された。集団間上方比較条件では、内集団評価の低い人は集団間比較への関心は失せ、集団内での個人間関係への関心が高まった結果だと考えられる。これらの結

果は、集団間上方比較条件において、内集団評価が調整効果をもたらすことを示すものである。Blanton et al. (2002) や Blanton et al. (2000) による個別の検討による示唆が、本研究によって統合的に示された。

また、集団間下方比較における結果においても、仮説が支持された。集団間下方比較条件におかれたとき、内集団評価が高い群において比較効果が認められるだろうという仮説 2-a は、社会性に関する状態自尊心において支持された。集団間下方比較条件では、内集団評価が高い人は内集団への脅威の見積もりを低め、個人的アイデンティティへの関心が高まった結果と言えるだろう。また、集団間下方比較条件におかれたとき、内集団評価が低い群において反映効果が認められるだろうという仮説 2-b は受容的態度得点において支持された。集団間下方比較条件では、内集団評価が低い人は内集団の地位の高揚の可能性を高く見積もり、集団アイデンティティへの関心が高まった結果だと言える。これらの結果の有意性は傾向であるが、下位検定の周辺的な結果からも、仮説 2-a・2-b は支持されたと言えるであろう。本研究の結果より、集団間上方比較条件だけでなく、集団間下方比較条件においても、内集団評価といった個人の内的要因が、集団内の個人間比較に影響を及ぼすことが示された。

本論文の知見は、社会的アイデンティティが脅威づけられているように思われる状況において、集団間関係が変動しないという認知が、個人の関心を個人的なアイデンティティに基づくものへと移行させるというものであり (Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002)、これは、社会的アイデンティティ理論の枠組みでは予測しきれていない。さらに、社会的アイデンティティ高揚への欲求が十分に満たされると考えられる文脈においても、それが必ずしも社会的アイデンティティに基づく認知や行動をもたらさないことが示された。これらの結果は、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらで自己を捉えるかは、文脈に依存するだけでなく、自己評価への動機づけを反映していることを示しているだろう。したがって、集団間関係の変動可能性に基づき、統合的な自己評価の維持・高揚を求めるがゆえ、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティを共に考慮した上で、自己の捉え方を変化させると言える。

以上の結果より、本研究では、Blanton et al. (2002) と同様、参加者の内的要因や集団間文脈の内容が、個人か集団かどちらのアイデンティティに自己の関心をあてるかに影響するため、内集団における社会的比較にとって重要な要因であることが示唆された。

Blanton et al. (2002) が集団間上方比較状況を題材として用い、ネガティブステレオタ

イプのみを扱っていたのに対して、本研究では集団間下方比較状況も題材として用い、自己の持つ全体的な内集団に対する評価が、ポジティブなものであってもネガティブなものであっても、その時の集団間文脈の捉え方に影響を与え、集団内での関係に違いをもたらすことを示した。したがって、本研究の結果は、ネガティブステレオタイプの対象となりやすいカテゴリーのみで認められるというよりも、どのような集団においても認められる現象であることを示唆するものであると言える。

さらに、本研究では、集団間文脈と個人の内的要因との交互作用が集団内における個人間比較に及ぼす過程を詳細に検討するため、複数の従属変数を測定していた。各従属変数における結果の型の違いを詳細に見比べていくと、さらに興味深い可能性が示されている。社会性に関する状態自尊心では、集団間上方比較・集団間下方比較ともに、内集団評価が高い群で個人間比較の条件間に差が認められた。それに対し、集団間上方比較・集団間下方比較ともに、受容的態度では内集団評価が低い群で個人間比較の条件間に差が認められた。この結果は、比較による影響への反応が、内集団評価の高い人と低い人の間で異なっていたということを意味する。この違いは、個人間比較によって得られた結果の原因をどこに帰属しやすいのかといった点を考慮することで理解可能かもしれない。中村・浦 (1999, 2000) は、一体感の高さ (Aron, Aron, & Smollan, 1992) によって、言い換えれば、自分と他者とが代替可能な状態であるかどうかによって、相手から与えられた自分にとって都合の悪い結果 (相手が自分の期待したサポートを与えてくれない) に対する対処が異なることを示している。一体感が高い関係においてこのようなネガティブ事象が生じた場合、その相手との関係性を変化させることなく自己評価を低下させるといった内的な要因で対処する傾向が認められた (中村・浦, 1999)。逆に、一体感が低い関係の場合は、その結果として敵意を抱き相手への信頼を低めるといった、関係性を低めるような外的な要因で対処する傾向が示されている (中村・浦, 2000)。近年、このような他者を自己に包括するという一体感の概念は、社会的アイデンティティにも拡大しうるともいわれている (Brewer & Gardner, 1996)。したがって、中村・浦 (1999, 2000) の研究を考慮すると、内集団への評価が高い人は、集団内の個人間比較によって自分が脅威づけられた場合、その原因を自分の能力欠如といった内的要因で処理しやすく、そのために状態自尊心の変動が顕著に認められた可能性がある。一方、集団への評価が低い人は、自分が脅威づけられた原因を相手に帰属し、自分を脅威づけた優れた内集団成員への敵意を抱き、彼ら/彼女らを受け入れないことで個人的アイデンティティを維持するといった方略をとったものと考えるこ

とができる。

また、状態自尊心において社会性に関するもののみで有意な効果が認められた理由は、本実験の個人間・集団間比較の課題である「社会的知能テスト」との関連が大きいことによると考えられる。社会的な能力の低さを知らされることによって社会性に関する状態自尊心が脅かされることは十分にありうることである。逆に、さほど対人的なものではない能力を測定する課題における比較では、パフォーマンスに関する状態自尊心が変動しやすいことが予想される。事実、研究1・2ではそのことを示唆する結果を示している。

一般的感情尺度では肯定的気分のみ、拒否・受容尺度では受容的態度のみで仮説を支持する有意な結果が認められた。この2つの得点に共通する特徴はどちらも肯定的な側面を測定しているという点である。この点についての十分な考察は現時点では困難だが、評価懸念が影響し、否定的な側面では明確な反応が得られなかったのかもしれない。このような解釈の妥当性については、今後慎重な検討が必要である。

ところで、優れた内集団成員が他の集団成員から拒否される過程について、これまで述べてきたような自尊心維持のメカニズムによる説明の代替説明が存在する。それは、他の集団成員より優れた成果を得ることが、その集団にとっての一種の逸脱行動とみなされるかもしれないということである。本研究の課題で優れた成果を得るということは、社会一般にはすばらしいと評価される行為である。しかしながら、集団によっては、優れた成果を得ることが、集団が独自に持つ規範に反していることがある。このとき、優れた成果を得ることは逸脱行為として他成員からみなされるだろう。自己カテゴリー化理論では、逸脱行為はその集団のアイデンティティを揺るがすものであり、その行為者は、他成員からの排斥の対象となりうるとしている。逸脱の方向が対立する外集団の規範に近い場合、集団間差異化の欲求を満たそうとし、その人の評価が低くなることも知られている (Pickett & Brewer, 2001)。この知見を考慮すれば、集団が規範（一定水準の成果を維持すること）の遵守を強く望む場合には、その集団が集団間上方比較にさらされたとしても、なおも優れた内集団成員を拒否する可能性が生じる。その成員の優れた成果は、外集団の規範に近いものであるため、内集団の規範を揺るがす可能性を持つからである。

しかしながら、上記のような代替説明では本研究の結果を説明することができないと言える。その理由は以下のとおりである。本研究において、内集団評価の高い成員が持つ内集団規範は成員たちが優れていることであり、内集団評価の低い成員が持つ内集団規範は、内集団成員はこの課題において劣っているべきだということであると置き換えることが可

能であれば、以下のような仮説をたてることができる。内集団評価が高い人は、優れた内集団成員を受け入れ、劣った内集団成員を拒否する。さらにこの効果は、集団が脅威にさらされている集団間上方比較において認められやすいと考えられる。一方、内集団評価が低い成員は優れた内集団成員を拒否し、劣った内集団成員を受け入れるという仮説が成り立つ。またこの効果は、自分たちの規範を揺るがす集団間下方比較において認められやすいと考えられる。しかしながら、内集団評価高群においては、有意な差が認められていないが、内集団評価低群では、集団間下方比較において、劣った人より優れた人を受け入れるという結果が認められていた。よって、規範の維持ではなく社会的自尊心・個人的自尊心の維持動機が内集団成員の受け入れに大きな影響を及ぼしたと言えるだろう。

4. 研究4. 個人の内的要因が、内集団成員・外集団成員との 個人間上方比較に及ぼす影響

研究4では、個人の内的要因として、集団間関係の変動性の認知が集団内での個人間関係に及ぼす影響について検討する。

たとえば、職場において、同じ業務に従事していたとしても男性は男性同士、女性は女性同士で仲間へのネガティブな反応が起こりやすい。これは、女性であれば、自らが女性であることへの意識が高まっていること、男性であれば、自らが男性であることへの意識が高まっていることによると考えられる。では、どうして同じ職場の仲間であるにもかかわらず、人は、性別というカテゴリーを参照し、そこへの意識を高める傾向が高いのだろうか。その過程には、性別による自他への反応傾向の差が顕著であるという社会的な背景が関係していると考えられる。つまり、職場において女性と男性を区別して物事を判断・評価するという傾向が個人に内在化することによって、同性同士の関係に焦点が向きやすくなる可能性がある。

このように研究4では、個人間比較の際に個人が自己をどのように捉えるのかに影響する要因として、個人が、特定の集団間の差異をどれくらい変化しにくいと考えているかの程度を取り上げ、優れた内集団成員の存在がその成員への態度に及ぼす影響を検討する。そして、そのような認知過程が、集団内-外の個人間関係にどのような影響を及ぼすかを考察する。つまり、研究4では、個人の内的要因が自己カテゴリー化（あるカテゴリーで自己を捉える過程）ではなく、個人的自己カテゴリー化（自己を内集団の他の成員とは異なる

る独自の自己として捉える過程) を顕著にする場合とは、どのような場合なのかを検討することになる。個人が自己を捉える枠組みとして、あるカテゴリーをどれくらい積極的に用いようとするかを定める要因について検討することを目的とする。このような検討は、本章の問題で述べたように、認知された集団間関係が自己評価の動機づけに影響するというアプローチから、自己カテゴリー化理論から導かれる仮説とは異なる現象を示すという意味で価値があると考えられる。

本研究では、認知された集団間変動性の高さが、個人が自らの属する内集団をどれくらい自己評価のための準拠枠として用いようとするかの程度を規定すると考える (Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002; 研究 3)。Blanton et al. (2000) や Blanton et al. (2002) より、個人が内集団に対するステレオタイプをどのように捉えているかが、集団内での個人間関係に従事する傾向、言い換えればどれくらい内集団を準拠枠と捉えるかの程度を左右すると言える。つまり、内集団に対するネガティブなステレオタイプへの是認の程度が高い人ほど、集団アイデンティティへの関心も高く、その結果として、内集団を自己評価にとっての準拠枠としやすくなるために、集団内の個人間関係に従事しようとする傾向を強く持つことが示されている。要するに、集団間の地位の変動可能性を低く見積もるほど、内集団を準拠枠として捉えようとする傾向が高くなるのである。研究 3 においてもこれを支持する結果が示された。

先の例で説明するならば、常に自らが男性であることを意識し、その枠組みで自分自身を捉える傾向が高い人は、男性との比較こそが意味をもたらすものであると考え、女性との比較には価値をおきにくいだろう。そのため、自分よりも優れた男性との比較は、自分よりも優れた女性との比較以上に個人に大きな脅威を与えるものとなるだろう。逆にいえば、そのような男性にとって、女性は比較の参照として機能しなくなるため、自分よりも優れた女性との比較は脅威となりにくいと考えられる。

以上のように、本研究では、集団間で役割が区別されており、社会的にその関係性が変化しないという認知を個人がどれくらい持っているに着目する。そして、それが自らをその枠組みの内部で評価しようとする傾向を高めると考える。本研究では、Blanton et al. (2002) と同じく性別カテゴリーを用いこの過程を検討する。具体的には、男性と女性が社会的に別の役割を果たすものでありその関係性は変わらぬものであるという考えを強く有するほど、性別を超えて競うことに意味がないと考えるようになり、結果として、性別カテゴリーを準拠枠として用いようとする傾向が高まるだろうとの予測を検証する。

本研究ではこの予測の検討のために、個人が集団間の関係性の変動可能性をどの程度とみなしているかを「平等主義的性役割態度」得点の高低によって捉えることとする。本研究では、Blanton et al. (2002) の研究をうけ、集団間関係の変動性をどの程度に見積もるかが、「性別カテゴリーを自己評価の枠組みとして用いようとする程度」を左右すると考えている。そこで、この程度の操作的な定義として平等主義性役割態度（鈴木, 1994）を用いることとした。これは、男女の性役割態度における平等志向性、あるいは伝統的志向性のレベルを測定するものである。

以上より、本研究では、同性もしくは異性の仲間との社会的比較が個人の感情や態度に及ぼす影響における、性役割態度の調整効果について想定法を用い検討する。男性・女性は社会的に異なる役割を持つと考える傾向を高く持つ者ほど、自己を男性もしくは女性として捉える傾向が高く、また、その枠組みは変化しないと捉える傾向が高いと考えられる。そのような人は、他の人よりも、社会的比較において自らの性別カテゴリーを比較の準拠枠として用いやすいだろう。

なお、Blanton et al. (2002) との詳細な相違点・改善点は以下のとおりである。第一に、上述の Blanton et al. (2002) の研究では、女性を対象とし、ネガティブステレオタイプの是認の程度に限定した検討がなされていた。これに対して本研究では、男性も対象とする。それは、自らの内集団が劣位にある、優位にあるといった地位関係の是認の程度だけでなく、集団間関係の変動性の知覚に着目しているからである。男性であれ女性であれ、男女が区別されその関係性の変動しないと認識することが、社会的比較に影響を及ぼすことを検討することが目的である。また、Blanton et al. (2002) の研究では、集団間地位関係を顕現化させる操作を行っている。しかし、本研究では、状況による集団間関係の顕現化は特に行わない。日常的に行われる比較に、つまり顕現化の操作を行わない場合に、個人が持つ集団間関係の変動性を見積もりが集団内の個人間関係に及ぼす影響を検討することが本研究の目的であるためである。

次に、個人間比較についても研究3で述べた理由から、Blanton et al. (2002) の操作とは異なる。本研究では、優れた内集団成員（同性）との比較であるのか、優れた外集団成員（異性）との比較であるのかを独立変数の一つとする。

さらに、本研究では、先に述べた通り伝統的な性役割態度をどれくらい強く有しているかの程度を測定する。そして、数学的な能力といった特異な領域に限定せず、調査対象者にとって重要な領域を自由に想起させ、伝統的な性役割態度をどれくらい強く有している

かの程度が、その領域での比較に影響しうるかどうかを検討する。ある領域に特化して、個人の持つ集団間関係性の認知が影響を及ぼすとは限らないことを示すことが目的である。このようにして得られた結果は、性役割態度はどのような領域においても、その内在化が強い個人にとってはそれが準拠枠として機能することを示すものとなるだろう。

以上を要約すると次のようになる。まず、先述したように、内集団成員（同性）は外集団成員（異性）と比べ比較基準となりやすく、そのため優れた内集団成員は他の内集団成員に脅威を与えやすい (e.g., Brewer & Weber, 1994)。よって、比較過程が生起する結果、人は優れた外集団成員（異性）よりも優れた内集団成員（同性）に対し、劣等感を感じやすく、誇りや励みを感じにくく、さらには比較の対象に拒否的な態度を持つといったネガティブな反応が導かれるだろう。また、このような効果を個人が持つ性役割態度の程度が調整するだろう。つまり、伝統的な性役割態度を内在化している高い男性は、女性がどうであるのかに関心が向きにくく、優れた女性よりも優れた男性に対しネガティブな態度をとりやすいだろう。また、性役割態度を高く有する女性も、男性との比較に価値を置かず、女性という枠で自らを捉え、優れた男性よりも優れた女性に対してネガティブな反応を示すだろう。このような効果は、平等主義的性役割態度を有する人においては認められにくいだろう。

したがって、本研究の仮説は以下のとおりである。

仮説

1. 優れた外集団成員（異性）よりも、内集団成員（同性）との比較において、比較効果（劣等感情・拒否的態度の高さ、誇り・励み感情の低さ）が認められやすいだろう。
2. 仮説1の効果は、伝統的な性役割態度を有している人において顕著であろう。

3-1. 方法

3-1-1. 分析対象者

大学生 183 名（男性 74 名、女性 109 名；平均年齢 19.20 歳 ($SD = 1.86$)）。

3-1-2. 独立変数

被調査者の性別（男性・女性）、比較対象の性別（男性・女性）、性役割態度（伝統的・平等的）。

すべて被験者間変数とした。

3-1-3. 質問紙構成⁶

優れた比較対象の性別の操作：参加者の周囲にいる同世代の仲間の中で、参加者にとって重要な領域において、参加者よりもたいてい優秀な成績を収める男性（もしくは女性；これらの条件のうちどちらかが記載された質問紙がランダムに配布された）を一人思い浮かべるように求めた。その際、そのような人が具体的に思い浮かばないときには、そのような人がいると仮定するように求めた。続いて、想定した対象に対する態度尺度への回答を求めた。この尺度は、今回の検討のために新たに構成した14項目からなる尺度であり、5件法（あてはまらない（1）～あてはまる（5））で回答を求めた。また、想定した人とどれくらい親しい関係にあるかを5件法（とても親しい（1）～全然親しくない（5））でたずねた。ここで、具体的な人物を思い浮かべることができなかつた場合には、選択肢「6. 思い浮かべることができなかつた」に回答させた。

続いて、以下の2つの尺度への回答を求めた。認知的構造化欲求尺度（Bar-tal (1994) の翻訳版；浦, 1999；20項目・6件法；全く当てはまらない（1）～非常に当てはまる（6））。平等主義的性役割態度スケール（鈴木, 1994；15項目・5件法；ぜんぜんそう思わない（1）～まったくそのとおりだと思う（5））。

最後に、確認のため先に想定した対象が男性であったか、女性であったかに回答を求めた。

3-2. 結果

3-2-1. 予備的分析

分析対象者の選定：具体的な対象を思い浮かべることができなかつた人、また、想定した対象の性別が適切ではなかつた人を分析から除外した。

平等主義的性役割態度：項目の合計点を算出し（ $\alpha = .83$ ）、男女ごとの平均点をもとに参加者を「伝統的性役割態度」を持つ者と「平等的性役割態度」を持つ者に群分けした。男性の平均点は、40.79（ $SD = 7.38$ ）、女性の平均点は、46.20（ $SD = 6.25$ ）であった。

⁶ 質問紙には、これらの質問の以降に他の尺度も含まれていたが、それらはこれらの質問の後にされたものであり、本検討に影響を及ぼさないと考えられる。

比較対象への態度尺度:対象に対する態度尺度について、探索的因子分析を行ったところ、解釈可能な4因子が見出された。「拒否的態度因子」(5項目, $\alpha = .83$; 「できれば近づきたくない」他)・「劣等感因子」(3項目, $\alpha = .84$; 「その人と自分を比べると情けない気持ちになる」他)・「誇り因子」(4項目, $\alpha = .74$; 「周囲の人たちに自慢できる」他)・「励み因子」(2項目・ $\alpha = .56$; 「一緒にいることで自分にとって励みになる」他)の4因子である。さらにこの4因子構造について確認的因子分析を行った結果、高い適合性が認められた($CFI = .89$, $RMSEA = .081$)。

認知的構造化欲求:全項目の得点の平均値を算出し、認知的構造化欲求得点とした($\alpha = .85$, $M = 3.41$, $SD = .57$; 「何が起こるか分からない状況におかれると不愉快になる」「どんな問題にも明確な答えというものがあると思う」他)。認知的構造化欲求の高さが自己評価や他者の受容に影響することが示されている(浦, 1999)。よって、本研究では、この得点を共変量として扱うことにする。

親密度:想定した対象人物との親しさに条件による偏りがあるかどうかを検討するため、親密度を従属変数とし、被調査者の性別×比較対象の性別の2要因の分散分析を行った。その結果2要因の交互作用が有意である傾向が認められた($F(1,178) = 3.33$, $p < .08$)。下位検定の結果、女性は、対象が男性であるとき($M = 2.06$, $SD = .13$)に比べ、女性であるとき($M = 1.67$, $SD = .12$)に親密度を低く得点づけていた($F(1,178) = 4.99$, $p < .05$)。また、男性($M = 2.08$, $SD = .15$)に比べ女性が、女性の対象人物に対し、親密度を低く得点づけていた。比較対象との親密度により、社会的比較の影響は異なることが知られている(Tesser, 1988)。従って、本研究では親密度を共変量として扱うことにする。

3-2-2. 仮説の検証⁷

態度尺度の下位因子の項目平均値をそれぞれ従属変数とし、被調査者の性別(2)×比較対象の性別(2)×性役割態度(伝統的・平等的)の共分散分析を行った(共変量 = 親密度得点・構造化欲求尺度の合計得点)。なお、4つの下位因子すべてにおいて一変量の共分散分析を行っているが、ここでは有意な差が認められた結果のみを独立変数ごとに効果

⁷ 以下の分析において、認知的構造化欲求を共変量とした場合、その有意性が拒否的態度得点においてのみ認められている。また、親密度を共変量とした場合、その優勢が劣等感得点においてのみ示されなかった。このように従属変数による違いは見られるものの、分析の一貫性を保つために、以下の分析ではこれらの変数を共変量として投入する。

を報告する。

性役割態度（伝統的-平等的）の主効果は、拒否的態度得点 ($F(1,173) = 3.75, p < .06$) と励み得点 ($F(1,173) = 2.97, p < .09$) において有意である傾向が認められた。平等的性役割態度をもつ群 ($M = 1.47, SE = .06$) よりも伝統的性役割態度を持つ群 ($M = 1.64, SE = .06$) の方が、拒否的態度得点が高いことが分かった。また、伝統的性役割態度をもつ群 ($M = 3.86, SE = .09$) よりも平等的性役割態度をもつ群 ($M = 4.09, SE = .09$) のほうが、励み得点が高いことが分かった。

被調査者の性別の主効果は劣等感得点 ($F(1,173) = 7.08, p < .01$) と誇り得点 ($F(1,173) = 6.18, p < .05$) において認められた。劣等感得点において男性 ($M = 2.82, SE = .13$) より女性 ($M = 3.25, SE = .10$) のほうが対象に対する劣等感得点が高いことが分かった。また、誇り得点において男性 ($M = 3.51, SE = .09$) より女性 ($M = 3.80, SE = .07$) のほうが対象に対する誇り得点が高い傾向にあることが分かった。

被調査者の性別×比較対象の性別の2要因の交互作用は、拒否的態度得点 ($F(1,173) = 4.14, p < .05$) と劣等感得点 ($F(1,173) = 14.51, p < .001$) において認められた。拒否的態度得点における下位検定の結果、女性は、男性 ($M = 1.45, SE = .08$) より女性 ($M = 1.65, SE = .07$) の対象に対する拒否的態度得点が高い傾向にあることが分かった ($F(1, 173) = 2.75, p < .10$)。これは、仮説1を一部支持する結果である。

同様に、劣等感得点について下位検定を行った結果、男性は、優れた女性 ($M = 2.53, SE = .18$) よりも男性 ($M = 3.11, SE = .18$) に対して劣等感を感じやすいことが分かった ($F(1, 173) = 6.40, p < .05$)。一方女性は、優れた男性 ($M = 2.92, SE = .15$) よりも女性 ($M = 3.58, SE = .14$) に対して劣等感を感じやすいことが分かった ($F(1, 173) = 7.73, p < .01$)。これは、仮説1を支持する結果である。また、男性よりも女性が優れた女性に対して劣等感を感じやすいことが示された ($F(1, 173) = 20.27, p < .001$)。

また、対象の性別×性役割態度の交互作用が、励み得点において認められた ($F(1,173) = 6.31, p < .05$)。伝統的性役割態度をもつ群 ($M = 3.69, SE = .12$) より平等的性役割態度をもつ群 ($M = 4.24, SE = .14$) は、優れた男性が励みになることが分かった ($F(1,173) = 9.10, p < .01$)。伝統的性役割態度を持つ人は、優れた男性より女性 ($M = 4.04, SE = .14$) を励みに感じる傾向 ($F(1,173) = 3.60, p < .06$) がある一方で、平等主義性役割態度を持つ人は、優れた男性より女性 ($M = 3.94, SE = .12$) を励みに感じる傾向 ($F(1,173) = 2.84, p < .10$) があることがわかった。

3 要因の交互作用は、拒否的態度得点において認められた ($F(1,173) = 4.13, p < .05$; Figure 3-5)。下位検定を行った結果、参加者の性別×比較対象の性別の効果は、伝統的性役割態度を持つ人において有意であった (単純交互作用: $F(1,173) = 8.41, p < .001$)。また、男性において、比較対象の性別×性役割態度の交互作用が有意であった (単純交互作用: $F(1,173) = 4.21, p < .05$)。

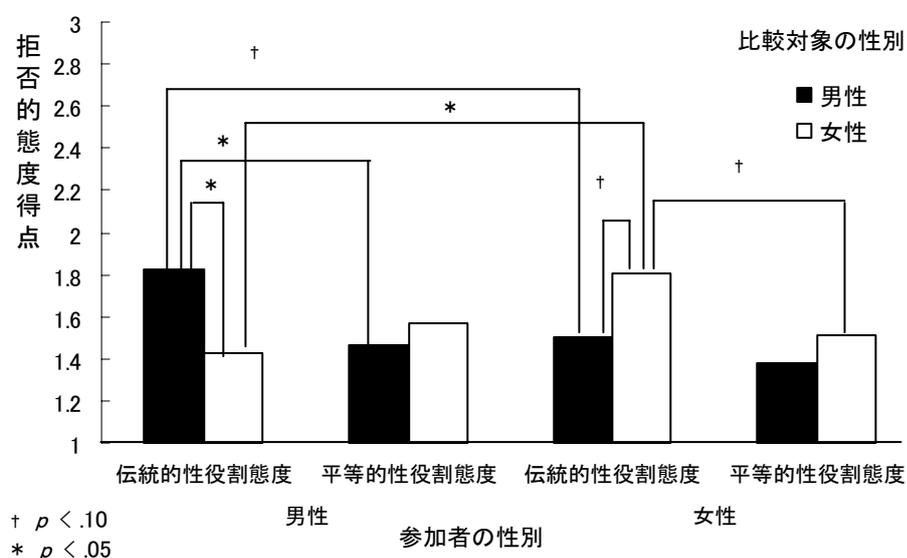


Figure 3-5. 被調査者の性別、比較対象の性別、性役割態度が、比較対象に対する拒否的態度に及ぼす影響

Figure 3-5 に示されたとおり、伝統的性役割態度をもつ男性は、優れた女性よりも男性に対する拒否的態度得点が高かった。また、平等的性役割態度をもつ男性に比べ伝統的性役割態度をもつ男性は、優れた男性に対する拒否的態度得点が高いことが分かった。一方、伝統的性役割態度をもつ高い女性は、優れた男性よりも女性を拒否する傾向が高かった。また、平等的性役割態度をもつ女性よりも伝統的性役割態度をもつ女性が、優れた女性を拒否する傾向が高いことが分かった。これらの結果は、仮説 2 を支持するものである。

3-3. 考察

以上の検討の結果、男性は、優れた女性よりも男性の対象に対し劣等感を感じやすいことが示された。また、女性は、優れた男性よりも女性の対象に劣等感を感じやすく、その対象を拒否しやすいことが示された。これは、外集団成員（異性）よりも内集団成員（同性）との比較において比較過程が生起しやすいという仮説1を支持する結果である。また、そのような効果は性役割態度によって調整されることが示された。伝統的性役割態度をもつ男性は男性に対し、それが高い女性は女性に対し、拒否的態度をとりやすいことが示された。一方、平等主義性役割態度をもつ群は、対象が異性であるか同性であるかによって、違いが認められなかった。これは仮説2を支持する結果である。

つまり、男性・女性に関わらず、性役割態度が、優れた内集団成員を拒否する傾向に違いをもたらすことが示された。これは、伝統的性役割態度の高い男性は、社会的に異なっていると考えられる女性を考慮せず、また、伝統的性役割態度の高い女性も男性を考慮せず、日頃から同性内における集団内比較に従事しがちであることを反映していると考えられる。それぞれの集団が区別可能でその関係性が変化しないと捉える傾向、つまり伝統的性役割態度の高さが、内集団を社会的比較の枠組みとして捉える傾向を高め、成員間に比較過程をもたらしたと言える。

Blanton et al. (2002) の研究では、ある課題領域における集団間の地位関係を承認する程度が、その領域における個人間比較に影響を及ぼすことを示していた。本研究では、集団間に地位関係があると思われがちな課題領域に限定しない場合においても、日常的に集団間関係をどのように捉えているかが、あらゆる領域における個人間比較に影響を及ぼす可能性が示唆された。

以上の結果は、伝統的性役割態度が特性的に高い人における性別カテゴリーの顕現性が、自己カテゴリー化をもたらさなかったことを示すものである。そのような人々は、性別カテゴリーへの接近可能性が高いため、性別カテゴリーの顕現性が高まっていると考えられるにもかかわらず、性別カテゴリーに同一視し集団間関係への関心が高まるという過程は認められなかった。それは、本研究の結果で、伝統的性役割態度が特性的に高い人において、外集団の成員である優れた異性へのネガティブな態度が生起しなかったことからわかる。逆に、伝統的性役割態度が特性的に高い人において、内集団の成員である優れた同性に対し、ネガティブな態度が生起したことから、このとき、個人的アイデンティティが自

己の中で優勢であったと言えるだろう。つまり、カテゴリーの顕現性が集団間関係の変動可能性に対する低い見積もりを伴うため、集団内での個人間関係性への関心が高まったと考えられる。

ここで、性役割態度は先にも述べたように、接近可能性を介してカテゴリー顕現性を高めると考えられる。本研究は、研究3と異なり、集団間文脈がさほど顕現化されていない状況での検討である。したがって、研究3とは、動機づけが影響するプロセスが異なると考えられる。研究3では、集団文脈によって集団が顕現化しており、その集団文脈と個人の集団への評価との交互作用が顕現化している集団文脈をどのように捉えるかとのどちらの自己評価維持・高揚に動機づけられるかが自己カテゴリー化過程において異なる作用をもたらすというプロセスを示した。しかしながら、研究4では、集団間関係の変動可能性に対する低い認知は、その集団への接近可能性を高めるためその集団を顕現化させるというプロセスを想定している。

また、集団間関係の変動可能性に対する低い認知は、社会的比較の枠組みとしてのその集団を顕現化させたと考えられる。伝統的性役割態度が特性的に高い人においては、集団間関係の変動可能性を低く見積もるため、集団間関係への関心が高まりにくかったと考えられる。自己カテゴリー化理論が述べているように、カテゴリー顕現性の高さが自己カテゴリー化を必ずしも高めるのではなく、カテゴリーの顕現性の高さが個人的アイデンティティへの関心をより高める場合もありうるということが認められたと言える。顕現性によって引き起こされる動機を考慮すれば、その逆も起こりうることを示している。つまり、研究4は、自己カテゴリー化を抑制する要因とし、自己カテゴリー化理論の見直しに貢献するものである。

ただし、このような問題をジェンダーを題材として扱おうとするとき、ひとつ留意すべき問題のあることを指摘しておかなければならない。それは、男女間には未だ歴史的・社会的な背景を持つ地位差が存在しているという点である。本研究では、性役割態度を指標として、男女間の集団間関係の変動可能性を変数化した。この得点の高低がそのような男女間の地位差を全く反映していないかどうかについては慎重であるべきだろう。言い換えれば、男女間の集団間関係の変動可能性に集団の地位関係の変動可能性が交絡している可能性は否定しきれない。

しかしながら、規範的一致 (normative fit; Oakes, Turner, & Haslam, 1991) の観点から考えると、この交絡の可能性はさほど高くないと言えるかもしれない。男女のいずれに

においてもそれぞれの伝統的性役割態度を高く内在化している者は、そうでない者と比較して、自らの性役割を社会的に望ましいものと捉えた上で、それぞれの関係が変動しないと評価していると言えるだろう。言い換えれば、そこに地位差を認めた上で低地位集団であることをあきらめている、あるいは高地位集団であることに慢心していることを示している可能性は低いと考えることもできる。しかし、いずれにせよ、この推論の妥当性は実証的に確認されたものではないため、今後より慎重な検討が必要である。

ところで、本研究の結果において、なぜ拒否的態度においてのみ3要因の交互作用が認められたのかについて、考察する必要がある。今回従属変数として用いた評価尺度は、因子分析の結果、拒否的態度・劣等感・誇り・励みの4因子が抽出された。このうち、拒否的態度と劣等感は、比較対象に対するネガティブな態度や感情を表すものであり、逆に誇り励みは、ポジティブな態度や感情を表すものと考えられる。仮説に関わる効果はネガティブな態度でのみ認められ、ポジティブな態度では効果が認められなかった。この理由として、本研究では、反映過程の生起が起こりにくかったことがあげられる。平等的性役割態度をもつ人は、男性や女性という枠組みに関わらず社会的比較に従事した結果、対象人物の性別により、従属変数に違いが認められなかったというだけで、この条件において反映過程が起こりやすいという訳ではない。従って、比較による反映的な感情や態度を測定する変数において、有意な効果が認められなかった可能性がある。

4. 第3章のまとめ

これらの研究より、集団間文脈の内容とそれを捉える個人の内的要因が個人の自己評価動機に影響を及ぼし、それが自己カテゴリー化レベルを決定するという過程が存在することが例証された。集団間文脈の内容とそれを捉える個人の内的要因が、個人が自己と集団のどちらのアイデンティティで自己評価を維持・高揚させようとするかを決定すると言える。自己カテゴリー化理論が述べているように、文脈におけるカテゴリーの顕現化が、必ずしも社会的アイデンティティを自己の中で優位にさせるわけではないことを示すものである。その文脈において集団間関係をどのように認知するかが、自己カテゴリー化の規定因となりうることが示された。

研究3では、内集団を低く評価する人が、内集団の低い地位を顕現化されると内集団成員との比較過程が生起するが、内集団の高い地位を顕現化される反映過程が生起しやすい

ことが示された。反対に、内集団を高く評価する人が、内集団の低い地位を顕現化される状況におかれると内集団成員との反映過程が生起しやすく、内集団の低い地位が顕現化される状況におかれると内集団成員との比較過程が生起しやすいことが示された。このような結果は、自分の集団に対する評価と与えられた集団情報が一致している場合、集団間関係の変動性を低く見積もりやすいため、集団内過程に従事したと考えられる。一方で、それらが不一致の場合、内集団の評価や地位の変動性を高く見積もりやすいため、集団間過程に従事したと考察できる。

また、研究4では、性役割態度の違いが、優れた内集団成員を拒否する傾向に違いをもたらすことが示された。それぞれの集団が区別可能でその関係性が変化しないと捉える傾向、つまり集団間関係の変動可能性への見積もりの低さが、内集団を社会的比較の枠組みとして捉える傾向を高め、成員間に比較過程をもたらしていた。

Turner (1987) は、個人の内的要因が自己カテゴリー化に影響する例として、以下の証拠をあげている。偏見をもった人は、そのような偏見を持たない人に比べ、人種という観点からカテゴリー化する傾向がある。しかしそれは、対象となる他者の身体的特徴とともに、その人の行動や外に現れた態度にも依存し、それが一致したときに、人種カテゴリー化がなされやすいという (Brown & Turner, 1981; Boyanowsky & Allen, 1973)。つまり、あるカテゴリーに対して偏見を持つ人は、そのカテゴリー接近可能性が高いためカテゴリー化がなされやすく、したがって、集団間相互作用に従事しやすいことを示している。この結果は、研究4の結果と逆のものである。このような結果に違いが見られる理由は定かではないが、自己認知と他者認知との違いから説明が可能かもしれない。他者をカテゴリー化する場合と自己をカテゴリー化する場合とでは、知覚された集団間関係がもたらす影響が異なる可能性がある。Turner (1987) は、他者認知の研究から自己カテゴリー化の規定因の仮説を立てていることについて、それを問題として指摘しながらも、自己認知と他者認知の違いが、カテゴリー顕現性の過程に違いを示すとは思わないと述べている。しかしながら、本研究のように認知というより動機づけという視点を重視してカテゴリー化の生起過程を考えるならば、自己認知と他者認知の違いが何らかの影響を及ぼすことが予想される。この可能性については、さらに検討する必要がある。

以上のように本章では、個人の内的要因として、集団間関係の変動性を規定するものに着目し、自己カテゴリー化理論では説明できない現象の理解を試みた。検討の結果、個人の内的要因（事前にもつ集団間関係への態度）が、顕現化されている集団間文脈の内容が

集団内の個人間比較が及ぼす影響を調整することが示されたため、本論文の基本仮説2が支持されたと言える。

次に、社会的比較という観点から本章で示された結果を考察する。本研究の結果から、自己関連性の高い課題における優れた内集団成員との比較が個人に及ぼす影響は、知覚された集団間関係に調整されることが示された。研究3と研究4の結果より、ネガティブなものであれポジティブなものであれ、集団間関係の変動性を低く見積もる場合には、優れた内集団成員との比較において比較過程が生起しやすく、逆に集団間関係の変動性を高く見積もる場合には、内集団成員との比較において反映過程が生起しやすいことが示された。

本研究の結果から、集団間上方比較の情報に対し内集団成員が是認することなく、集団間変動の可能性を内集団成員が各自自覚することが、個人が持つ優れた内集団成員の排斥の抑制や自尊心への脅威の低減にとって有効になると言えるだろう。逆に言えば、ある集団間関係への信念を高く有していることが、状況に応じて自己を多様で柔軟に捉えることを阻害し、個人間関係や集団間関係の改善にネガティブな影響をもたらす可能性があることを示唆している。

集団間関係変動可能性を低く見積もることが個人間関係や集団間関係の改善にネガティブな影響をもたらす可能性を示すものとして、スティグマに関する研究がある。この研究においても、研究4と類似した示唆が得られている。スティグマを持つ人は、自分が今ある状況を、自分と同じく差別されている内集団成員や、さらに劣位の集団、自分より悪い境遇にある人たちと比較することによって、自分について悪く感じることを避ける傾向があることが認められている (Crocker, Major, & Steele, 1998)。

このように、集団の個々の成員がその集団に特化した役割態度を高く有していることは、集団内での足の引っ張り合いに向かわせ、集団間比較の機会が与えられたとしても、その集団の社会的関係性の変動可能性を低く見積もらせてしまうかもしれない。そして、集団間変動の可能性を低く見積もり、内集団過程にのみ関心が高まると、集団を高めていこうとする動機づけが抑制されているため、社会のダイナミックな変動が抑制されてしまう可能性がある。

5. 第3章の要約

本章では、知覚された集団間関係の変動可能性の知覚が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響について検討した。Blanton et al. (2002) の知見に基づけば、そのような変動可能性

に気がつけば、集団間文脈において社会的アイデンティティへの関心が高まるが、変動可能性を低く見積もる場合には、集団間文脈においても個人的アイデンティティへの関心が高まると予想される。

この仮説を検討するため、研究3では、集団間比較の方向と日頃の内集団評価の高さの交互作用が、集団内での個人間比較に及ぼす影響について、大学生を対象に性別を内集団カテゴリーとした実験を行った。内集団を高く評価している人が集団間下方比較におかれた場合には集団間関係に慢心を感じやすく、また内集団を低く評価している人が集団間上方比較におかれた場合にはそれにあきらめを感じやすいと考えられる条件である。一方、内集団を高く評価している人が集団間上方比較におかれた場合、また内集団を低く評価している人が集団間下方比較におかれた場合には人は集団間変動可能性を高く見積もりやすいと考えられる条件である。

研究4では、特性的な集団間関係の変動可能性の知覚が集団内での個人間比較に及ぼす影響について、大学生を対象に、性別を内集団とする想定法による調査を行った。

以上の研究により、集団間文脈の顕現化に加え、個人がどのように集団間文脈を判断するかにかかわる個人の内的要因が、集団間関係の変動可能性の知覚への影響を介して、自己カテゴリー化過程に影響を及ぼすことが示唆された。

第4章. 個人的アイデンティティを維持・高揚しようとする動機づけが 自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

1. 問題

本章では、個人的アイデンティティの維持・高揚への動機づけが自己カテゴリー化に及ぼす影響を検討する。この検討において重要な示唆を与えてくれるのが、Mussweiler et al. (2000) の研究である。彼らは、人は、優れた人との個人間比較が行われる際に、その人と共有しないカテゴリーで自己を捉えるという、能動的な自己カテゴリー化の存在を示した。彼らは、研究1で、ヨーロッパ系アメリカ人の女性を対象にした実験を行った。まず彼女らに社会的判断課題を実施し、その後、その課題における参加者自身の評価とあるアジア系アメリカ人の女性の評価を知らせた。あるアジア系アメリカ人の女性のもので与えられた評価は、参加者自身の評価よりも優れている、もしくは劣っていることを示すものであった。つまり、参加者にとってこのような状況は、性別カテゴリーを共有し、人種カテゴリーを共有していない対象との個人間比較が行われたことを意味する。このとき、特性自尊心の高い参加者は、個人間上方比較後に、人種カテゴリーへのアイデンティティを高める傾向がみられた。また、研究2では、最小集団パラダイムを用いて2つのカテゴリーを設定し、研究1と同様に、比較対象とのカテゴリー共有・非共有を操作した。個人間上方比較にさらされた高自尊心者の参加者は、共有カテゴリーより非共有カテゴリーにアイデンティティの焦点をあてていた。さらに研究3では、そのようにアイデンティティをシフトさせる戦略が、気分や状態自尊心の維持高揚にとって効果的であることが確認された。

Mussweiler et al. (2000) による上記の結果をまとめると、自己評価を維持・高揚したいという動機のため、個人は上方比較の対象と共有しないカテゴリーに自己のアイデンティティを能動的に焦点づけ、それにより比較対象との関連性を最小化し、その比較によって生じる自己に対するネガティブな影響を低減しようとしたと言える。つまり、状況によるカテゴリーの顕現化がない場合においても、個人的な自己評価を維持・高揚しようという動機づけが、自己カテゴリー化の方向を決定すること示した。彼らは、この結果に基づき、アイデンティティの多面性が上方比較による脅威状況の回避に役立つと考察している。

比較対象と同一の集団に属していたとしても、人は別の社会的カテゴリーにも所属している。もし内集団の成員である比較対象と、その集団以外の共有していない別のカテゴリー

一が存在すれば、人はその非共有である別のカテゴリーに焦点を向けることによって、個人間上方比較によって生じる個人的アイデンティティという側面での自己評価への脅威を避けようとするかもしれない。そこで本章では、内集団成員と別のカテゴリーを共有しているか否かが自己カテゴリー化過程に及ぼす影響について検討する。

ところで、Mussweiler et al. (2000) の結果は、アイデンティティ・シフトによる個人的アイデンティティ脅威回避選択の使用は、高自尊心者においてのみ顕著であることを示している。これは、第2章で述べたとおり、低自尊心者は高自尊心者より、社会的比較の情報を好ましい意味へと再構築するスキルが劣っている (Taylor et al., 1996) ためである可能性がある。特性自尊心の高い人は、認知的回避を適切に用いやすく、自己脅威を回避したいという動機づけのもと、自分より優れた比較対象と異なるカテゴリーに属することを自ら顕現化させ、自尊心を維持しやすいだろう。一方、低自尊心者は、そのような回避戦略をとりにくいだろう。

以上より、別のカテゴリー共有条件より非共有条件において、集団内での個人間上方比較後の状態自尊心は高く、比較の対象を受け入れやすいだろう。また、その傾向は、特性自尊心が高い人において顕著であると考えられる。

本章ではさらに、第2章で扱った、自己カテゴリー化における集団間文脈の顕現化が、このような個人的アイデンティティ維持・高揚動機とどのように相互作用するかを検討する。それは、Mussweiler et al. (2000) の研究1で用いられたカテゴリーで説明するならば、共有している性別カテゴリー間の比較が顕現化している文脈において (Mussweiler et al. (2000) では、どちらかのカテゴリーが文脈的に顕現化されるという操作は行っていない)、共有していない人種カテゴリーが存在することがどのような影響を及ぼすかということである。この相互作用が自己カテゴリー化に及ぼす過程の予測は、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの共存の可能性を考慮することによって可能となるだろう。

Blanton et al. (2000) や第2章が示すように、集団間上方比較は反映過程を用いやすくする。そしてその結果、内集団における優れた成員との上方比較が個人にとってポジティブな効果をもたらすものとなる。しかしその一方で、集団間上方比較は、自己関連性が高い課題における内集団成員との上方比較を、個人にとってより大きな意味をもつものとし、個人的アイデンティティという側面での自己評価にはより大きな脅威をもたらすものとする可能性がある。集団間上方比較によって、集団アイデンティティが高められた状況で

は、比較対象である内集団成員との心理的距離が狭まる結果、その比較対象との上方比較は、自己評価の個人的アイデンティティという側面にネガティブな影響を与えることになると考えることもできるのである。このようなとき、心理的距離をほどよく広げる手段があれば、人はその手段を積極的に用いることによって、個人的アイデンティティという側面での自己評価に及ぼされる脅威をも効果的に低減しようとするかもしれない。

そして、それを可能にするのは、Mussweiler et al. (2000) が提唱したアイデンティティ・シフトであろう。比較対象と同一の集団に属していたとしても、人は当然それとは別の社会的カテゴリーにも所属している。もし内集団の成員である比較対象と、その集団以外の共有していない別のカテゴリーが存在すれば、人はその非共有である別のカテゴリーに焦点を向けることによって、個人間上方比較によって生じる個人的アイデンティティという側面での自己評価への脅威を避けようとするだろう。

Spears (2001) によれば、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの相互作用のありかたの1つとして、これら2種類のアイデンティティの共存の可能性があるとして述べている。個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの属性が一致しており両立可能な場合（たとえば、個人的な特性が集団の特性・規範と一致している場合）、もしくは、共通の利益が存在する場合（たとえば、集団から個人として必要とされている場合）、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティが自己の中で調和できるという。相互作用のあり方のもう1つとして、戦略的なものがあるという。それは、両アイデンティティが共存できないときの相互作用のあり方であり、アイデンティティ脅威を個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの一方で回復しようとするものであったり、また観客への反応（自己呈示）を目的とする（たとえば、自己呈示する相手に応じて、相手が望む方向に集団間への態度を変える）ものであったりするという。

また、Brewer (1991) の最適差異化理論は、集団内における類似と集団間における差異を同時に考慮し、それらの欲求が満たされることを述べたものである。このことは、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティがともに安定できる位置を自ら求め、獲得している過程を示している。このように、人が、両アイデンティティを共に満たすような状態を求め、能動的に自己カテゴリー化する過程が存在する可能性は十分に考えられる。

本研究では、優れた内集団成員（カテゴリー成員）との比較において、最も顕現化している比較他者との共有カテゴリーに注目することで反映効果を用い、同時にその他の別のカテゴリーに関して比較他者との非共有を強調し、自己評価全体を維持・高揚するという

二重の戦略があると予想する。たとえば、もし先の *Mussweiler et al. (2000)* の研究1とは異なり、女性であることが顕現化している文脈（集団間上方比較条件）で、女性同士の個人間比較が行われるとしよう。そのとき、その比較対象の女性と人種カテゴリーを共有していなければ、自分がアメリカ人女性でありヨーロッパ系であるということをより重視する可能性が考えられる。そうすることで、同じ女性として優れた仲間がいるということにより集団アイデンティティが維持・高揚され、同時に、その優れた仲間と自分は少し違うと思えることで個人的アイデンティティへの脅威を緩和できるといった、両側面から自己評価を維持・高揚することが可能となると考えられる。

つまり、集団間上方比較におかれたとき、別のカテゴリー共有条件より非共有条件において、優れた内集団成員との個人間上方比較による状態自尊心の低下がより低減され、その成員に対する拒否的態度は低減されると予想される。

このような視点は、ステレオタイプの低減を目的として進められている、下位カテゴリー化や交叉カテゴリー化の知見と類似した点を持つ。たとえば、対立する2つの会社を統合する必要があるとき、合併後に社員間の対立を抑制するためには、下位カテゴリー化が有益であるという。より具体的には、2つの組織からのそれぞれの成員が補足的な役割を担い共通目標のために別々に貢献するような形で、新たな組織を構成することが有効である (*Deschamp & Brown, 1983*)。なぜなら、この状況、もともとの集団に対する社会的アイデンティティへの脅威をもたらさないからである。合併前の集団アイデンティティと合併後の集団アイデンティティが対立することなく、調整される状況では個人にとって受け入れやすいだろう。また、*Barreto, Spears, Ellemers, & Shahinper (2003)* は、人が、戦略的に2重のアイデンティティを示すことを示している。具体的には、オランダに移民したトルコ人は、オランダ人に対して自己呈示するとき、オランダとトルコのどちらに対するアイデンティティも高めることが示された。*Barreto et al. (2003)* は、オランダ人に対してそのような自己呈示をすることによって、アイデンティティを戦略的に管理していると述べている。

これらの知見と同じように、本論文では、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティに折り合いがつくような状況におかれることは、個人にとって最も望ましいことであり、人はそれを求めて状況の解釈の仕方や自ら自己の捉え方を能動的に変容させると予想する。

以上より本章では、集団内での個人間比較による個人的な自己への脅威を低減するとい

う動機づけによって、その比較対象とは共有しない別のカテゴリーに自己を同一視する可能性を検討する。まず、研究5では、研究2と同じ準実験において、性別カテゴリーを別のカテゴリー共有度として操作し、それが集団内での個人間比較に及ぼす影響を検討する。次に、研究6では、上記で示された傾向が、特性自尊心により異なるかどうかを検討する。本章では、これら2つの研究により、状況によるカテゴリーの顕現化がさほどない場合においても、人は個人としての自己評価維持に向けた動機づけによって、能動的に自己をカテゴリー化する可能性について考察することを目的とする。

2. 研究5. 集団間上方比較条件の有無と別のカテゴリー共有度が

集団内での個人間比較に及ぼす影響

本研究においては、個人間比較（上方比較・同等比較）、集団間上方比較状況（有・無）、特性自尊心（高・低）、別のカテゴリーの共有度（共有・非共有）が状態自尊心・感情状態に及ぼす影響を検討する。個人間比較・集団間上方比較の有無・特性自尊心の交互作用に関する検討は、第2章の研究2において行った。したがって、ここでは、別のカテゴリー共有度に関する予測の検討のみを報告する。先に述べたように、別のカテゴリー共有度と特性自尊心との交互作用についても理論的に予測が可能かもしれないが、本研究においては参加者の人数がその検証に耐えうるほど十分なものでないため検討しない。

予測. 集団間上方比較におかれたとき、別のカテゴリー共有条件より非共有条件において、内集団成員との個人間上方比較による状態自尊心の低下・感情状態の低下が低減されるだろう。

この予測を検証するため、集団間上方比較の有無の操作に用いた学科カテゴリーに加え、別のカテゴリーとして性別カテゴリーを用いた。その理由は、性別カテゴリーは慢性的な接近可能性（chronic accessibility）が高いカテゴリーであり、どのような場合においても顕現化しやすいとされている（Blanz, 1999）からである。Blanz（1999）によれば、認知的な接近可能性によりカテゴリー顕現性が最も決定されやすい（Bruner, 1957）のであれば、よく使われているカテゴリー（慢性的なカテゴリー）がたぐり寄せやすいカテゴリーであり、カテゴリー顕現化を引き起こしやすいという。

2-1. 方法

研究1において、具体的な方法について述べたため、以下にその要約を述べる。

実験では、特性自尊心尺度（山本他, 1982）への回答を求めた。次に、空間知能の能力を測定する知能テスト（苧坂・梅本, 1973）を実施し、各自採点を行うよう求めた。

その後、参加者が通う看護学科を内集団、近隣の大学の看護学科を外集団とし、集団間上方比較状況の有無を操作した。集団間上方比較有条件では、昨年・一昨年の調査の結果、外集団に比べ内集団の知能が劣っていると呈示した。一方、集団間上方比較無条件では、そのような外集団の情報は伝えなかった。次に、個人間比較と別のカテゴリー共有度を想定法により操作した。個人間比較の操作は、比較対象のテストの得点より高い得点を得た内集団成員もしくは、低い得点を得た内集団成員を想像させることにより行った。このとき、同時に、別のカテゴリー共有度も操作した。別のカテゴリー共有度の操作には、性別カテゴリーが用いられた。参加者の中に男性参加者は含まれていたが、女性参加者のみを分析対象者とするため、個人間比較の対象として女性を想像する条件であれば別のカテゴリー共有条件、比較対象として男性を想像する条件であれば別のカテゴリー非共有条件であることを意味する。

以上の操作を行った後、一般感情尺度（小川他, 2000）、日本語版状態セルフ・エスティーム尺度（舘・宇野, 2000）、操作チェックに回答を求めた。

2-2. 結果

2-2-1. 操作チェック

別のカテゴリーと課題の関係性 Mussweiler et al. (2000) は、社会的比較による脅威を回避したいという動機づけによってもカテゴリー顕現性が異なることを主張している。この点に関して、規範的一致（Oakes et al., 1991）の知覚がなされるか否かにより、カテゴリー顕現性が変化することが知られている。どちらかの性と課題との一致度を高く知覚していたならば、その条件における結果はカテゴリー顕現性の影響を反映している可能性も考えられるということである。したがって、この点についての操作チェックとして、課題と性別カテゴリーとの関連性への評価得点を従属変数とした分散分析を行った結果、主効果、交互作用ともに認められなかった。このことは、参加者が空間知覚能力の能力と性別

カテゴリーの間に何らかの規範的一致を知覚していなかったことを示している。

2-2-2. 仮説の検証

各得点について、個人間比較×集団間上方比較×特性自尊心×別のカテゴリー共有度の分散分析を行った。

その結果、別のカテゴリー共有度の主効果、また別のカテゴリー共有度と他の変数との2要因の交互作用は、いずれの変数においても認められなかった。

個人間比較×集団間上方比較×別のカテゴリー共有度の3要因の交互作用が、肯定的感情得点において有意な傾向が認められた ($F(1,79) = 2.86, p < .10$; Figure 4-1)。下位検定の結果、別のカテゴリー(性別カテゴリー)を共有する比較対象との上方比較にさらされた場合、集団間上方比較が無い状況よりもある状況において、肯定的感情が低いことが分かった ($F(1,79) = 3.10, p < .09$)。また、集団間上方比較状況で、比較対象と別のカテゴリーも共有している場合、個人間同等比較より上方比較において、肯定的感情が低いことが分かった ($F(1,79) = 3.62, p < .07$)。集団間上方比較状況における非共有条件では、個人間比較の間にこのような差は認められなかった。集団間上方比較状況において、別のカテゴリー非共有の内集団成員との上方比較は同等比較と同程度の肯定的感情を維持していた。

4 要因の交互作用はいずれの得点においても認められなかった。

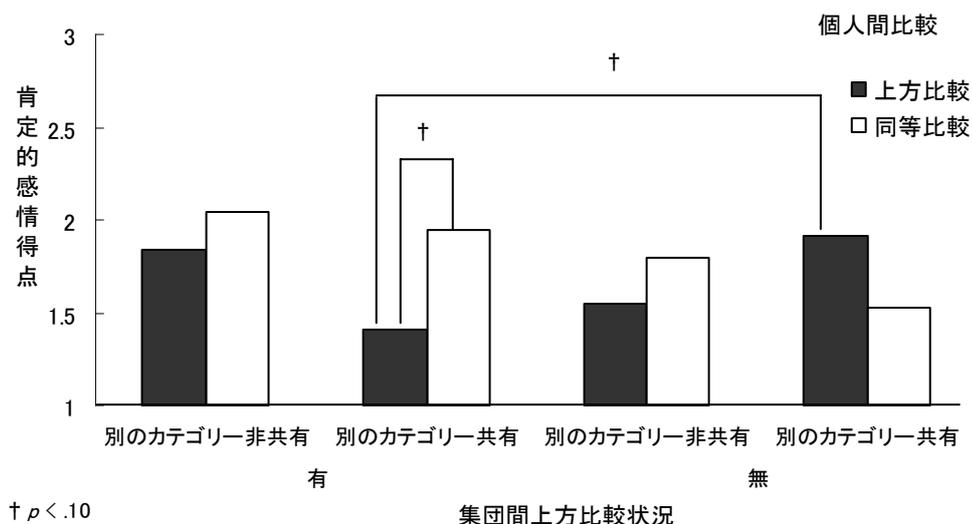


Figure 4-1 肯定的感情得点に、集団間上方比較状況、個人間比較、別のカテゴリー共有度が及ぼす影響

2-3. 考察

上記の結果は、別のカテゴリー共有度に関する予測を支持する方向の結果である。つまり、集団間上方比較状況により、集団アイデンティティが高まった場合、言い換えれば、比較対象と共有している集団カテゴリーが顕現化している場合であっても、優れた内集団成員と非共有の別のカテゴリーがあれば、肯定的感情の低下を防ぐことができることが示された。この場合、比較対象と適切な距離を置くことができるため、個人的アイデンティティという側面で自己評価が維持された結果であると考えられる。

Mussweiler et al. (2000) と同様、本研究の結果においても、自己カテゴリー化の規定因として、同様の個人的アイデンティティ脅威回避のためのメカニズムが働いたと考えることができる。顕現性を決定する要因である規範的一致 (Oakes et al., 1991) が知覚されたために顕現性が高まったのではないということは、操作チェックにより示されている。

ところで、本研究では、学科カテゴリーと性別カテゴリーのどちらがどのような条件で顕現化されたのだろうか。本研究の結果から、集団間上方比較状況では、性別カテゴリーに比べ慢性的接近可能性が低いと考えられる学科カテゴリーが顕現化したと言えるだろう。そしてそれは、集団間上方比較状況におかれることで、集団アイデンティティに関する動機づけ要因が加わったためだろう。なぜなら、もし、性別カテゴリーがより顕現化しているならば、性別カテゴリー非共有条件より共有条件において、反映過程を用いた状態自尊心低下の回避が見られたはずである。しかしながら、本研究では、集団間上方比較状況により、状態自尊心低下を回避することができていた。これらのことから、本研究では、優れた内集団成員(カテゴリー成員)との比較において、最も顕現化している比較他者との共有に注目し反映効果を用い、その他の別のカテゴリーに関して比較他者との非共有を強調し自己評価を維持するという二重の戦略が、自己評価の低下を防ぐために用いられていることが示唆された。

なお、Mussweiler et al. (2000) は、カテゴリー共有度による回避戦略の使用も特性自尊心によって調整されることを示している。本研究では、参加者の人数が少なかったため検討できなかったが、個人間比較×集団間上方比較×性別カテゴリー共有度×特性自尊心という4要因の交互作用を検証する必要があるだろう。

3. 研究6. 集団間比較の方向, 別のカテゴリー共有度, 特性自尊心が, 優れた内集団成員に対する拒否的態度に及ぼす影響

研究6では, 集団間比較の方向, 別のカテゴリー共有度, 特性自尊心が, 優れた内集団成員に対する態度にどのような影響を及ぼすかを実験により検討する。まず, 研究5と同様, 集団間上方比較と別カテゴリーの共有・非共有が個人間比較に及ぼす影響を検討する。また, それらの過程における個人的自尊心の調整効果について検討することにする。そのため要因を整理し, 個人間比較を優れた内集団成員との比較のみとする。

Mussweiler et al. (2000) より, 優れた内集団成員と別のカテゴリーを共有しているとき (別のカテゴリー共有条件) より, 共有していないとき (別のカテゴリー非共有条件) に, 優れた内集団成員は他の内集団成員に脅威を与えにくく, 拒否されにくいだろう。また, このような別のカテゴリー共有度の効果は, 認知的戦略が不得手といわれる特性自尊心の低い人に比べ, 特性自尊心の高い人において顕著であろう。したがって, 以下のような仮説がたてられる

仮説

1. 集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件において, 優れた内集団成員は拒否されにくいだろう
2. 別のカテゴリー共有条件であるより別のカテゴリー非共有条件であるときに, 優れた内集団成員は拒否されにくいだろう
3. 仮説1の効果は, 特性自尊心が高い人よりも低い人において顕著だろう
4. 仮説2の効果は, 特性自尊心が低い人より高い人において顕著だろう

ここで, 優れた内集団成員が他の内集団成員のアイデンティティに最も脅威を与え, 状態自尊心を低下させやすいのは, 集団間下方比較-別のカテゴリー共有条件だと予測される。このような条件では, 個人的アイデンティティが顕現化しており, 個人間上方比較によってそれが脅威を受け, しかもアイデンティティ・シフトが不可能だからである。このとき, 特性自尊心の高さが優れた内集団成員の受容・拒否にどのような影響を及ぼすであろうか。Mussweiler et al. (2000) の結果は, アイデンティティ・シフトが不可能である条件で, 特性自尊心が高い人は, 状態的な well-being が低かった。また, Brown and Gallagher (1992) は, 社会的比較によってもたらされた脅威が大きいとき, 低自尊心者にくらべ高自尊心者

は高い自己評価を維持するために、他者の評価をあまり高く評価しないことを示唆している。そうであるならば、集団間下方比較において、アイデンティティ・シフトが不可能である場合、つまり、優れた内集団成員から最も大きな脅威を受けやすい可能性がある場合、特性自尊心が高い人は、その脅威を回避するために優れた内集団成員を拒否しやすいかもしれない。

その一方で、高自尊心者が他の認知的回避戦略を巧みに使い、優れた内集団成員による脅威を回避し、集団間下方比較-別のカテゴリー共有条件においても、特に拒否傾向が高まることはないだろうと予測することも可能である。研究 2・5 では、比較対象の情報を準実験的な手続きで統制し、認知的回避を制御するような実験操作を行ったにも関わらず、高自尊心者は、集団間上方比較がない条件においても十分に状態自尊心を高く維持していた。また、高自尊心者は、類似他者との上方比較にさらされたとき、ネガティブ感情が生起しない、また、その課題に対する制御可能性を高く見積もることも示されている (Buunk et al., 1990)。

上記 2 つは、どちらも予測可能である。そこで、本研究では、3 要因の交互作用について探索的な検討を行うことにする。

3-1. 方法

3-1-1. 参加者

大学生 76 名 (男性 36 名, 女性 40 名, 平均年齢 19.41 歳 ($SD = 1.24$), 18-22 歳)。

3-1-2. 独立変数

集団間比較 (上方比較-下方比較), 別のカテゴリーの共有度 (共有-非共有), 特性個人的自尊心 (高-低)。これらは、すべて被験者間変数とした。

3-1-3. 手続き¹ (Figure 4-2 参照)

参加者のリクルート

「社会的知能テストの検討を目的とする実験である」とし、心理学の授業の受講生、もしくは実験者の知人を通じて同大学の学生に実験への参加協力を依頼した。依頼をする際に以下の調査紙に回答を求めた。

(i) 自尊感情尺度 (Self-Esteem Scale; Rosenberg, 1965) の日本語版 (山本他, 1982 ; 10 項目, 5 件法 (あてはまらない (1) ~ あてはまる (5))) (ii) 集団自尊心尺度 (渡辺, 1994) : 自らの性別カテゴリーに対し集団自尊心をどの程度持っているかについて回答を求めた (16 項目, 5 件法 (全くそうではない (1) ~ 全くそのとおりだ (5)))。 (iii) 認知的構造化欲求尺度 (Bar-tal (1994) の翻訳版 ; 浦, 1999 ; 20 項目, 6 件法 (全くあてはまらない (1) ~ 非常にあてはまる (6))) (iv) その他 「現在所属する学部・学科もしくは専攻がどれくらい理系的もしくは文系的であるか」と「高校生のとき理系・文系どちらに属していたか」

これらの情報をもとに、参加者の理系・文系出身が半々となるように、また、参加者の性別が半々となるように、リクルートをおこなった。

実験手続き

実験では、性別カテゴリーを集団間比較の操作に用いるカテゴリーとして用いたため、同性 3・4 名ずつでの実験室実験を行った。実験室内は、参加者どうしが課題試行中や質問紙回答中に隣人の様子をうかがうことができないよう、ついたてで仕切っていた。実験者は男女各 1 名で、実験は参加者全員がそろい次第始められた。

実験目的の教示 参加者はまず実験の目的が告げられた。ここでは、参加者の課題の重要度を高めるため、社会的知能と社会での成功との関連性を説明し、社会的知能に関する研究がこれまで男性のみで行われてきたこと、今回の我々の実験目的は社会的知能を測定する「社会的知能テスト」と様々な関連性を知ることであると教示した。参加者の質問がないことを確認した後、社会的知能テストが参加者にとってどの程度重要であるかに関する質問 (事前の課題の重要度) に回答を求めた。これは、社会的知能と社会生活での成功、

¹ 本研究には、問題で述べてきた一連の過程に介在する帰属メカニズムを検討するためのいくつかの尺度も含まれていたが、ここではそれらについては記載しない。なお、それらの尺度は本研究で扱った尺度の後に続くものであり、本研究の結果には影響がない。

直感的な処理能力がどれくらい関連していると思うか、またそれらの能力が高いことが参加者にとってどのくらい重要であるかを測定するものであり、4項目に5件法(全くそう思わない(1)～かなりそう思う(5))で回答を求めた。

社会的知能テストの実施 次に、実際に社会的知能テストを実施した。このテストは、写真に写った複数の人物の関係性を推測させるというテストである。「ボディ・ランゲージ解読法」(Archer, 1980; 工藤・市村(訳), 1988)に掲載されている問題から例題用と本番用の11枚を抜粋してテストを作成した。写真が掲載された問題冊子と関係性の選択肢が印刷されている回答用紙を配布し、例題(1問)を用い、テストへの回答方法を十分に理解させた。テストは2分間実施し、直感的に回答することが重要であり、時間内に10問全てに回答しなければならないと教示した。2分間、一斉に課題を行った後、実験者のうち一人がテストを回収し、採点のためだと言い隣室に移動した。

集団間比較の操作 一人の実験者が採点をおこなっている間、もう一人の実験者は参加者に対し、採点が終了するまでもう少し社会的知能テストについて説明を加えると告げ、以下の内容を教示した。「この社会的知能テストの得点が高いほど、学業の場・職場などにおいて好ましい業績をあげることが示されています。学校や職場などの現実社会において、男性のほうが女性よりも高い業績をあげ、社会的に高い地位につきやすいことが知られています。このような実際社会の性差の問題を考えると、社会的知能の高さにも男女の差が見られるのではないかと考えられます。実際、私たちがこの大学の学生に対し昨年調査を行ったところ、男性のほうが女性よりもこのテストの平均得点が高いという結果が示されました」。この情報は、男性参加者にとっては集団間下方比較状況、女性参加者にとっては集団間上方比較状況であることを意味する。

個人間上方比較・別のカテゴリーの共有度の操作 テストを回収してから3分後に、採点を終わらせた一人の実験者が入室した。「テストの得点は、問題ごとに得点が決まっており、正解した問題の合計得点できまる」とテストの得点の付け方を説明した後、参加者の成績表を一人一人に配布した。さらに、「ある得点を得た人がどのように他者から思われているのかを知ることが本実験のさらなる目的であり、以前に同様の実験に参加した人からランダムに選んだAさんの情報を配る」と告げた。参加者に配布した本人の成績表とAさんの情報の内容を操作することにより、個人間上方比較、また、別のカテゴリー共有度の操作を行った。具体的には、参加者の成績表には「あなたの得点は21点」と書かれており、Aさん情報には、「Aさんは(理系・文系)の(男性・女性)であり、得点は43点」と書かれ、

Aさんの情報の理系の部分と参加者と一致する性別に○が印されていた。このような操作は、全ての参加者にとって、集団内（性別が同じである）における、個人間上方比較（参加者よりAさんの得点が高い）を意味する操作である。また、Aさんが理系としたため、参加者が理系であれば、別のカテゴリー共有条件に、文系であれば別のカテゴリー非共有条件に属することになる。たとえば、参加者が女性で文系出身者であるとすれば、彼女は集団間上方比較-別のカテゴリー非共有条件に割り当てられたことになる。

成績表を配布した後、以下にあげる一連の質問に回答を求めた。

質問紙

(i) 事後の課題の重要度：事前の課題の重要度と同一の尺度を用いた。(ii) 拒否排斥尺度 (前田, 1998)：対象人物 (Aさん) に対して拒否的・受容的な行動をどの程度とるかにについて回答を求めた (14項目・7件法；絶対とる (1) ~ 絶対にとらない (7))。(iii) 操作チェック：自身と対象人物 (Aさん) の社会的知能がそれぞれ、どれほど優れていたか、また、男性の一般的な社会知能・女性の一般的な社会的知能がそれぞれどの程度優れているか (全く優れていない (1) ~ 非常に優れている (5)) に回答を求めた。日頃、性差と社会的知能 (他者を判断する能力) とは一般にどれくらい関係があると思っていたのかについて、男性と社会的知能は非常に関係がある (1) ~ 女性と社会的知能は非常に関係がある (5) で回答を求めた。また、日頃、理系もしくは文系であることと社会的知能の能力とは一般にどれくらい関係があると思っていたかについて、文系出身と社会的知能は非常に関係がある (1) ~ 理系出身と社会的知能は非常に関係がある (5) で回答を求めた。最後に、対象人物に実際の人をイメージしたかどうか (はい・いいえ) に回答を求めた。

参加者全員が質問紙に回答した後、ディブリーフィングを行った。

研究6の実験手続き

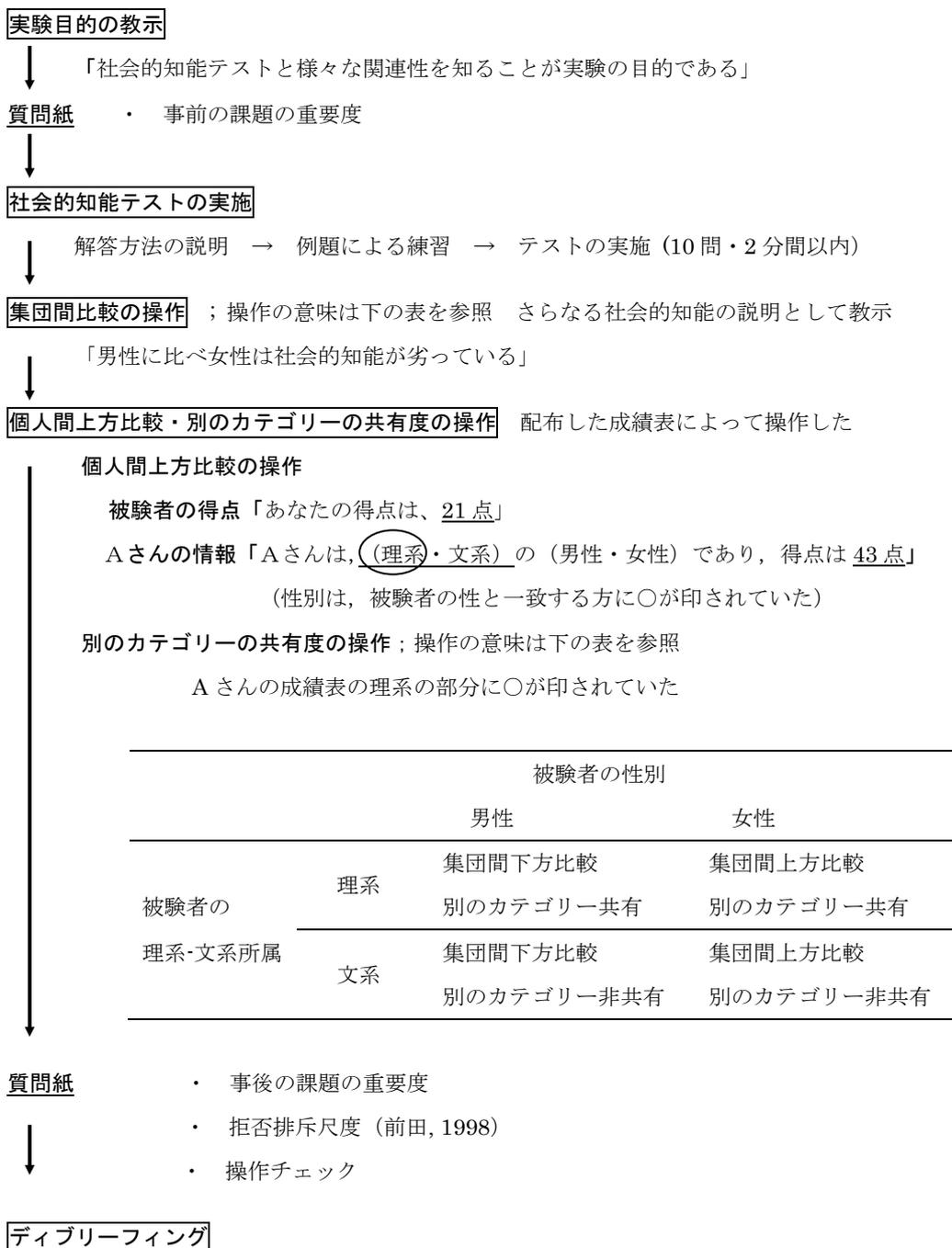


Figure 4-2. 研究6の実験手続きのフローチャート

3-2. 結果

3-2-1. 予備的分析

特性個人的自尊心 特性自尊心尺度 (山本他, 1982) の信頼性は十分に高かった ($\alpha = .86$)。平均値 3.15 ($SD = 0.72$) に基づき, 参加者を高自尊心者群 ($N = 42, M = 3.67, SD = 0.39$) と低自尊心者群 ($N = 34, M = 2.49, SD = 0.44$) に分割した ($t(74) = 12.48, p < .001$)。

集団自尊心尺度 全項目の得点の平均値を算出し, 集団自尊心得点とした ($\alpha = .68$)。

認知的構造化欲求尺度 全項目の得点の平均値を算出し, 認知的構造化欲求得点とした ($\alpha = .72$)。

拒否排斥尺度 受容的な項目においては得点を逆転し, 拒否的な行動の指標として全項目の得点の平均得点を算出し, 拒否得点とした ($\alpha = .81$)。

3-2-2. 操作チェック

個人間上方比較 個人間上方比較の操作を確認するため, A さんの能力評価得点 ($M = 4.54, SD = 0.62$) と参加者自身の能力評価得点 ($M = 2.04, SD = 0.66$) の比較を行った。その結果, 参加者自身の能力よりも A さんの能力のほうが高いと評価していた ($t(75) = 20.47, p < .001$)²。

集団間比較 集団間比較の操作を確認するため, 男性に対する社会的知能評価得点 ($M = 3.38, SD = 0.49$) と女性に対する社会的知能評価得点 ($M = 3.09, SD = 0.41$) の比較を行った。その結果, 女性の能力よりも男性の能力のほうが高いと評価していた ($t(75) = 4.70, p < .001$)³。

課題の重要度 課題を実施する前の課題の重要度 ($\alpha = .68$) と課題を実施した後の課題の

² 個人間比較の操作チェックにおいて, A さんの能力評価得点から参加者の自身の能力評価得点を引いた差得点を算出し, その得点について集団間上方比較×別のカテゴリー×特性個人的自尊心の共有度の共分散分析 (共変量=集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点) をおこなった。その結果, 主効果・交互作用ともに有意な差は認められなかった。

³ 集団間比較の操作チェックにおいて, 男性の能力評価得点から女性の能力評価得点を引いた差得点を算出し, その得点について集団間上方比較×別のカテゴリー×特性個人的自尊心の共有度の共分散分析 (共変量=集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点) をおこなった。その結果, 別のカテゴリー共有度×特性個人的自尊心の交互作用と3要因の交互作用が有意である傾向が認められた。何がこれらの結果をもたらしたのかについてはさだかではないが, 操作チェックへの回答は, 全ての要因操作と尺度への回答を終えた後に求めたものであり, それらの操作や回答の過程が何らかの影響を及ぼした可能性が考えられる。

重要度 ($\alpha = .66$) の平均得点は、それぞれ 3.43 ($SD = .64$) と 3.29 ($SD = .64$) であった。課題前の課題の重要度得点において、集団間比較×別のカテゴリーの共有度×特性個人的自尊心の共分散分析 (共変量=集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点) を行った。その結果、別のカテゴリー共有度 ($F(1,65) = 3.13, p < .10$) と特性個人的自尊心 ($F(1,65) = 2.98, p < .10$) に主効果がある傾向が認められた。別のカテゴリー非共有条件 ($M = 3.34, SD = .63$) より共有条件 ($M = 3.53, SD = .64$) のほうが課題の重要度を高く評価していた。また、特性個人的自尊心が低い人 ($M = 3.29, SD = .65$) より高い人 ($M = 3.55, SD = .61$) のほうが課題の重要度を高く評価していた。そのため、課題前の課題の重要度得点を共変量に投入し仮説の検証を行った結果、共変量を投入するかどうかで明確な差は認められなかった。したがって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。また、課題を実施する前後の重要度の変化を検討するため、課題後から課題前の重要度の差得点を算出し、その得点について集団間比較×別のカテゴリーの共有度×特性個人的自尊心の共分散分析 (共変量=集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点) を行った。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差は認められなかった。

性別カテゴリーと社会的知能の関係性 「性差と社会的知能とが一般的にどのくらい関係があると思っていたのか」という項目の平均得点は 2.79 ($SD = 0.55$) であった。男性もしくは女性であることと社会的知能の高さとの一般的な関連性の評価を知るため、性差と社会的知能の関連性の得点をそれぞれ従属変数とし、3 要因の共分散分析を行った結果、主効果、交互作用ともに認められなかった。性別カテゴリーと社会的知能の高さとの間の規範的一致 (Oakes et al., 1991) を参加者が事前に有していなかったことが分かった。

文理カテゴリーと社会的知能の関係性 「理系もしくは文系であることと社会的知能とが一般的にどのくらい関係があると思っていたのか」という項目の平均得点は 3.24 ($SD = 0.63$) であった。Mussweiler et al. (2000) は、社会的比較による脅威を回避したいという動機づけによってもカテゴリー顕現性が異なることを主張している。一方で、規範的一致の知覚がなされるか否かにより、カテゴリー顕現性が変化することが知られている。文理カテゴリーどちらかと課題との規範的一致度を高く有していたならば、その条件における結果はカテゴリー顕現性の影響を反映している可能性も考えられる。したがって、操作チェックとして、理系もしくは文系であることとの関連性の得点を従属変数とした 3 要因の共分散分析を行った結果、主効果、交互作用ともに認められなかった。実験参加者が理系・文系カテゴリーと社会的知能に何らかの規範的一致を知覚していないことが確認された。

対象人物のイメージ 対象人物に実在の人をイメージした人は19名、しなかった人は57名であった。そこで、対象人物をイメージしたか・しなかったかを共変量として、共分散分析を行ったが、共変量の説明率はいずれの変数においても有意でなかった。よって、以下の分析ではこの変数を組み込んでいない。

3-2-3. 仮説の検証

拒否得点について、集団間比較×別のカテゴリー共有度×特性個人的自尊心を独立変数とする共分散分析（共変量 = 集団自尊心得点・認知的構造化欲求得点）を行った。その結果、集団間比較 ($F(1,66) = 3.16, p < .08$) の主効果が有意である傾向が認められた。集団間上方比較条件 ($M = 2.44, SD = .08$) よりも下方比較条件 ($M = 2.64, SD = .49$) において、自分よりも優れた内集団成員を拒否する傾向があった。また3要因の交互作用も有意であった ($F(1,66) = 4.09, p < .05$; Figure 4-3)。

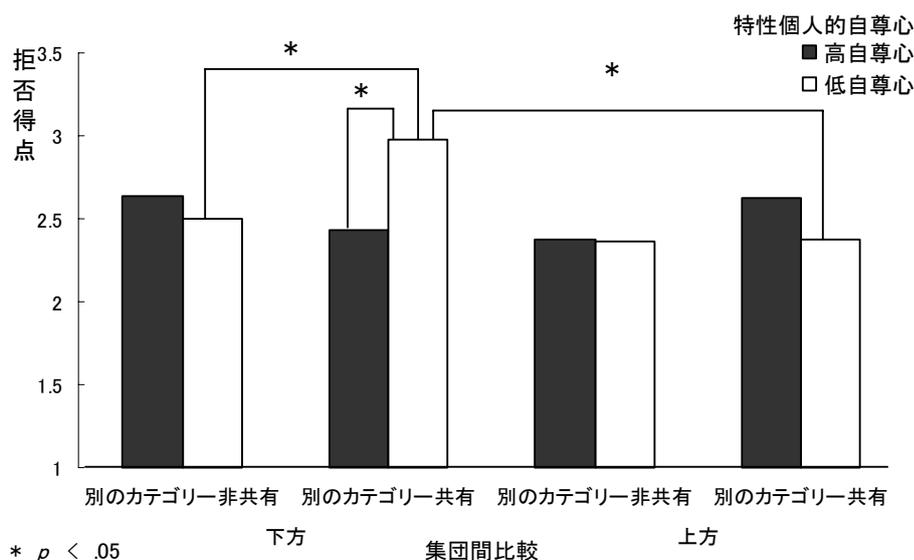


Figure 4-3. 拒否得点に、集団間比較、別のカテゴリー共有度特性自尊心が及ぼす影響

下位検定の結果、集団間下方比較条件において別のカテゴリーも共有するとき、優れた内集団成員に対し、高自尊心者 ($M = 2.43, SD = .15$) より低自尊心者 ($M = 2.98, SD = .17$) がその人物を拒否することが分かった ($F(1,66) = 6.23, p < .05$)。また、低自尊心者は、集団間下方比較に置かれたとき、別のカテゴリー非共有条件 ($M = 2.50, SD = .18$) より共有条件において拒否する傾向が高かった ($F(1,66) = 4.16, p < .05$)。低自尊心者は、

集団間上方比較条件 ($M = 2.38, SD = .15$) より集団間下方比較条件に置かれたとき、別のカテゴリーを共有する、優れた内集団成員を拒否する傾向が高かった ($F(1,66) = 6.20, p < .05$)。

3-3. 考察

集団間比較の結果から、集団間下方比較条件よりも集団間上方比較条件において、優れた内集団成員は拒否されにくいだろうという仮説1が支持された。集団間上方比較に置かれたとき、内集団を高めたいと動機づけられ、優れた内集団成員への拒否が低減されたと言える。集団間上方比較条件において、このように優れた内集団成員を受け入れることによって、集団アイデンティティを高めることが可能となり、個人にとってポジティブ効果をもたらすためである (Blanton et al., 2000; 研究1・2)。

また、3要因の交互作用が有意であったことから、優れた内集団成員との比較における脅威回避が困難な状況、つまり集団間下方比較-別のカテゴリー共有条件では、高自尊心者より低自尊心者のほうが、比較他者を拒否しやすいことが示された。集団間上方比較-別のカテゴリー共有条件において、高自尊心者は、低自尊心者より拒否する傾向が高くなる予測も可能であった (Brown & Gallagher, 1992)。しかしながら、本研究の結果は、高自尊心者は、この条件においても、優れた成員を拒否する以外の何らかの脅威回避戦略をとった可能性を示すものであった (e.g., Buunk et al., 1990)。本実験状況において、高自尊心者は優れた内集団の比較に対し脅威をさほど感じず、他者を拒否する必要がなかったのかもしれない。この理由として、集団間下方比較条件に置かれた高自尊心者が他の認知的回避戦略を用いた可能性が考えられる。高自尊心者は、類似他者との上方比較にさらされたとき、ネガティブ感情が生起しない、また、その課題に対する制御可能性を高く見積もることが示されている (Buunk et al., 1990)。しかし本研究では、操作チェックにより課題の重要度を変化させるといった回避戦略を用いていなかったことが分かったこと以外、実際にどのような戦略を用いて脅威を回避しているのかを特定することができなかった。

別のカテゴリー共有度については、別のカテゴリーの主効果が認められず、仮説2は支持されなかった。また、集団間比較×特性自尊心の交互作用が認められず、仮説3も支持されなかった。Mussweiler et al. (2000)の研究の結果は、上方比較による脅威を認知的に回避する戦略を低自尊心者が用いにくいことを示していた。低自尊心者においては、ア

アイデンティティをシフトすることが可能な別のカテゴリーが存在していても、優れた内集団成員との比較による脅威が低減されなかったのである。しかし本研究の結果では、別のカテゴリー共有度×特性自尊心の交互作用は認められなかった。さらに、3要因の交互作用において、別のカテゴリー共有度の影響が認められた。それは、低自尊心者は、集団間下方比較情報において、別のカテゴリー共有条件に比べ非共有条件で、優れた内集団成員を拒否する傾向が低かった。このことから、低自尊心者であってもアイデンティティ・シフトをおこなった可能性を考えることができる。

このような Mussweiler et al. (2000) の結果との違いは何に起因するのだろうか。その理由として、本研究では理系・文系カテゴリーを別のカテゴリーとして用いたことがあげられるかもしれない。本研究の実験参加者が、大学の低学年に属しており、日本の高等教育を受けてきた学生であるため、理系・文系カテゴリーは彼らにとって十分に慢性接近可能性が高いカテゴリーであると考えられる。また日常生活においても、我々は、理系・文系カテゴリーを何らかのいいわけの際によく用いる。つまり、日常として使い慣れたカテゴリーを別のカテゴリーとしたため、Mussweiler et al. (2000) の結果と異なり、特性自尊心による違いが認められなかったのかもしれない。本研究においては、理系・文系カテゴリーへのアイデンティティ・シフトは、低自尊者にとっても利用しやすいため、彼らにとっても脅威回避戦略として有効であったのかもしれない。

そのような脅威回避に及ぼすカテゴリーの影響について詳しく知るため、用いた二つのカテゴリーのどちらが顕現化したのかについてさらに考察することにする。研究5では集団間比較により顕現化させる集団を、学科カテゴリーとし、別のカテゴリーとして性別カテゴリーを用いていた。その理由は、集団間上方比較状況により、学科カテゴリーが顕現化したときでさえ、別のカテゴリーへの焦点移行を可能とするためであった。そのため本実験でも、先述したように、十分に慢性的な接近可能性が高いであろう文理カテゴリーを別カテゴリーとして用いた。では、本研究において、性別カテゴリーと理系・文系カテゴリーのどちらがどのような条件で顕現化されたのだろうか。本研究の結果も研究5と同様に、集団間比較で用いた性別カテゴリーのほうが、別のカテゴリーとして用いた理系・文系カテゴリーよりも顕現化したと言えるのではないだろうか。理系・文系カテゴリーがより顕現化しているならば、別のカテゴリー非共有条件より共有条件において、反映過程を用いた結果、優れた内集団成員に対する拒否的な態度が低減されたはずである。しかし、結果はこの予測を反証している。優れた内集団成員との比較において、最も顕現化している比較他

者との共有（性が同じであること）に注目し反映過程を用い、その他の別のカテゴリーに関して比較他者との非共有を強調し自己評価を維持した可能性が示唆される。このような戦略を用いることが、優れた内集団成員を拒否させにくくするのだろう。以上のような未だ明確になっていない点について、自己カテゴリー化過程に注目し、さらに詳細な検討をする必要がある。

4. 第4章のまとめ

本章の結果においても、Mussweiler et al. (2000) と同様、自己カテゴリー化の規定因として、個人的アイデンティティ脅威回避のためのメカニズムが働くことが例証された。集団間文脈に依存するものではなく、より個人的なアイデンティティへの自己評価維持高揚の動機づけが、能動的な自己カテゴリー化をもたらすという過程が認められた。

本章の結果では、集団間文脈が顕現化されている状況において、別のカテゴリーの効果も認められた。研究5では、集団間上方比較状況において、優れた内集団成員と別のカテゴリーを共有する場合に、肯定的感情が低いことが示されていた。研究6では、低自尊心者は、集団間下方比較に置かれたとき、別のカテゴリー非共有条件より共有条件において比較対象である内集団成員を拒否しようとする傾向が認められていた。このことは、集団内での個人間上方比較においてもたらされる脅威を回避するために、人は別のカテゴリー、個人間比較の対象と共有しないカテゴリーを用いて自己を捉えたことを意味するだろう。自己カテゴリー化理論では、自己カテゴリー化の過程において集団間文脈の顕現化などの状況の要請を重要視している。しかしながら、そのような要請がない場合においても、自らをあるカテゴリーの一員と捉えることによって、自身の自己評価の維持・高揚を図っていたと言える。以上より、本研究の基本仮説3は支持されたと言える。

また本章では、能動的な自己カテゴリー化の過程において、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの共存する可能性を検証した。研究5では、優れた内集団成員と共有しているカテゴリーの成員であることによって反映効果を用いつつ、比較他者と共有していない別のカテゴリーの成員であることによって自己評価を維持するという二重の戦略を行っている可能性が示唆された。社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの好ましさを共に維持・高揚していくことができれば、それは個人の自己評価の全体を高く維持でき、最も高い適応をもたらすはずである。本研究は、そのような自己の状態を得

たいという動機づけによって、人が能動的に自己の捉え方を変化させた結果であると考えられる。

次に、社会的比較という観点から本章で示された結果を考察する。本研究の結果より、自己関連性の高い課題における優れた内集団成員との比較は、その内集団成員と共有しないカテゴリーで自らを捉えるという認知的方略によって、脅威を低減できることが示された。このことから、ある特定のカテゴリーにアイデンティティを高く置くのではなく、柔軟にアイデンティティ移行が可能となるように、多面的なカテゴリーを所有しておくことが、自己評価維持に重要となるだろう。

5. 第4章の要約

本章では、より個人的な自己の側面が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響を検討した。Mussweiler et al. (2000) に基づき、集団内での個人間比較による個人的な自己への脅威を低減するという動機づけによって、その比較対象とは共有しない別のカテゴリーに自己をカテゴリー化すると予想した。

この仮説を検証するため、研究5では、研究2と同じ準実験において、性別を別のカテゴリー共有度として操作した。さらに研究6では、上記で示された傾向が、特性自尊心により異なるかどうかを、性別を集団間比較、理系-文系カテゴリーを別のカテゴリー共有度の操作に用い、大学生に対して実験を行った。

これらの検討を通し、人は個人としての自己評価維持に向けた動機づけによって、能動的に自己をカテゴリー化する可能性が示された。特に、研究5では、状況によってある社会的アイデンティティへの関心が高められていた時でもなお、それとは別のカテゴリーでも自らを捉えることによって、個人としての脅威を低減している可能性が示された。このことより、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは相反するものではなく、それらを同時に維持・高揚しようとするメカニズムが自己カテゴリー化過程に存在する可能性も示唆された。

第5章. 総括と展望

第1章で述べたとおり、「内集団を高揚させるような優れた内集団成員が他の成員から拒否されるのはどのような時であり、逆に、その成員が賞賛され、受け入れられやすくなるのはどのような時であるのか」という問いに答えるため、本論文では、個人がどのような文脈において、自己をどのように捉えているかを整理することを目指し検討を行った。文脈と自己の捉え方との関係を説明するものとして、自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) が広く知られている。しかしながら、その主張に関しては近年、問題が指摘されている。そこで、本論文では、自己カテゴリー化理論に対する批判的指摘、すなわち、自己カテゴリー化の規定因として「個人の自己評価への動機づけ」の役割を軽視している点において自己カテゴリー化理論の説明では不十分であるという指摘を考慮することによって、自己カテゴリー化理論を見直すことを第1の目的としてかかげた。

本章では、まず、第1節において、このような理論的背景に基づいて検討された6つの研究によって得られた知見を総括する。そして、自己カテゴリー化がなされる過程において、個人が複合的に自己評価を維持しようとする動機づけの観点から、どのような要因がどのように自己カテゴリー化の過程に影響するのかというプロセスについて考察する。さらに、本論文と同様に自己カテゴリー化過程をより精緻に理解することを目指し行われている研究を紹介し、状況の捉え方の違いといった個人の態度的側面だけでなく、自己の捉え方といったより特性的な要因に注目することの必要性について述べる。本論文と同時にそれらの研究をも考慮することによって、複合的に自己評価を維持するという動機づけが自己カテゴリー化に影響しているメカニズムをさらに明確にするという今後の課題と展望について言及する。

加えて、本論文は、集団間文脈の内容を取り入れることによって、集団内における個人間関係を理解することも目的とした。本章では、この視点から本研究の結果を検証することによって、集団内での個人間関係や集団全体の評価の向上という意味で、実践的な貢献について第2節で論じる。どのような場合に、個人が自らの能力を活かしながら、集団・組織に適応することができるのか、また、集団・組織は、個人にとってどのような働きかけをすれば個人の能力を活かし、集団・組織全体の成果を高めることができるのか、に関しての提案を行う。

1. 自己カテゴリー化の規定因としての動機づけ機能の検証

1-1. 自己カテゴリー化の規定因についての結果の総括

以下では、本論文における一連の結果から、自己カテゴリー化の規定因として、自己評価に関する動機づけがどのような役割を果たすのかについて考察する。特に、個人のような動機づけ・自己評価への関心が自己カテゴリー化の規定因としてどの時点で機能するかについて、第1章において示した2つのアプローチ (Figure 5-1) に基づき検証する。

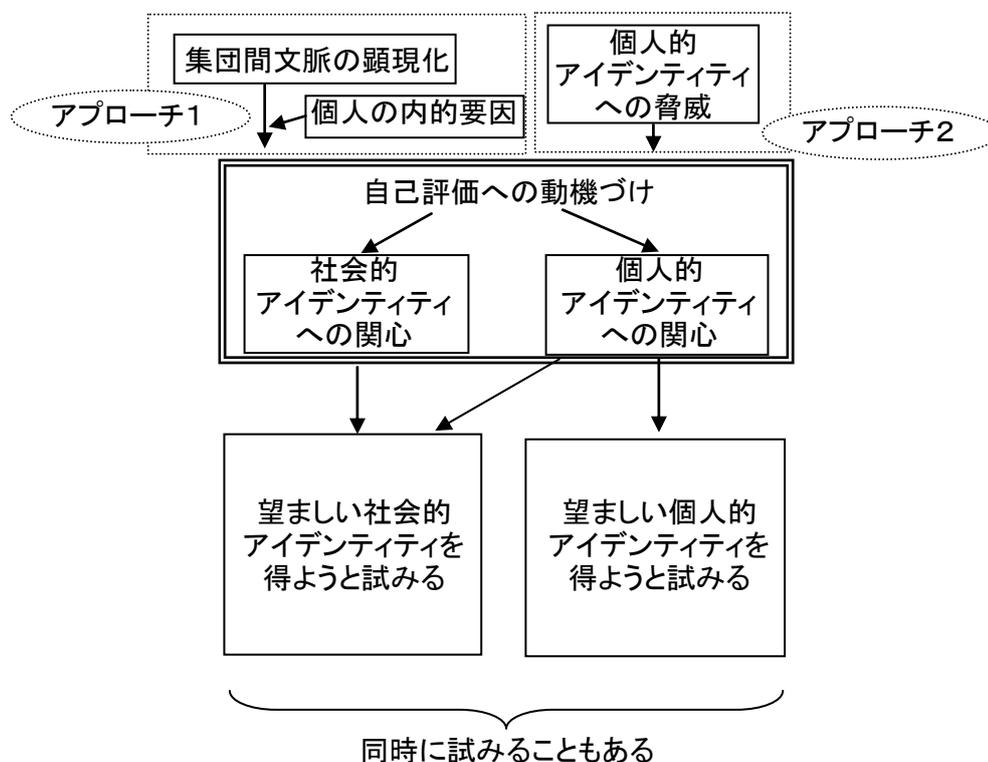


Figure 5-1. 本論文の結果の総括

自己カテゴリー化における動機づけの影響メカニズムへのアプローチ1からの検証

アプローチ1では、自己カテゴリー化理論が述べているように、集団間文脈の顕現化が必ずしも社会的アイデンティティを自己の中で優位にさせるわけではないとの仮説に基づき、その集団間文脈の顕現化と自己カテゴリー化の関連を調整するものとして自己評価へ

の動機づけを捉えるという視点から検討を行った。すなわち、集団間文脈の内容とそれを捉える個人の内的要因が個人の自己評価動機に影響を及ぼし、それが自己カテゴリー化レベルを決定する過程を想定し、この過程は第2章と第3章において示された。

第2章では、集団間文脈の内容が自己カテゴリー化に影響することが例証された。人は必ずしも自己カテゴリー化理論が述べているように、集団間文脈の顕現化によって受動的に自己をその集団にカテゴリー化し、それに基づき評価・行動を行うだけではないことが明らかになった。

第3章では、集団間文脈の内容と共に、それを捉える個人の内的要因が、自己カテゴリー化に影響することが例証された。すなわち、文脈において集団間関係をどのように認知するかが、自己カテゴリー化の規定因となりうることが示された。研究3では、自分の集団に対する評価（個人の内的要因）と与えられた集団情報（集団間文脈の内容）が一致している場合、集団間関係の変動性を低く見積もりやすいため、集団内過程に従事したと考えられる。一方で、それらが不一致の場合、内集団の評価や地位の変動性を高く見積もりやすいため、集団間過程に従事しやすいと考察できる。また、研究4では、集団間の区別が明確でその関係性が変化しないと捉える傾向、つまり集団間関係の変動可能性への見積もりの低さが、内集団を社会的比較の枠組みとして捉える傾向を高めることが示された。これら2つの検討より、文脈において、知覚された集団間関係の変動可能性のレベルが自己評価の動機づけに影響し、結果として自己カテゴリー化に影響すると考えられる。

社会的アイデンティティ理論では、本論文と同様に知覚された集団間関係が集団間相互作用に影響する過程を説明している。しかしながら、本論文の知見は、社会的アイデンティティが脅威づけられているように思われる状況において、集団間関係が変動しないという認知が、個人の関心を個人的なアイデンティティに基づくものへと移行させるというものであり(Blanton et al., 2000; Blanton et al., 2002)，これは、社会的アイデンティティ理論では説明しきれていない。本論文の結果は、社会的アイデンティティへの脅威が与えられる文脈において、社会的アイデンティティ維持・高揚への何らかの取り組みを行わない場合がありうることを示している。さらに、この影響は、内集団が優位にある場合においても認められた。社会的アイデンティティへの欲求が十分に満たされると考えられる文脈においても、それが必ずしも社会的アイデンティティに基づく認知や行動をもたらさないことが示された。このことは、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらで自己を捉えるかは、文脈に依存するだけでなく、自己評価への動機づけを反映して

いることを示しているだろう。

また、自己カテゴリー化の規定因として個人の内的要因に関わる動機づけがどの時点で作用するのかについての代替説明の検証を行った。自己カテゴリー化理論に基づけば、個人の内的要因に関わる動機づけが、カテゴリー顕現性を左右するために、自己カテゴリー化に影響するとも考えられる。それに対し、研究3では、カテゴリー顕現性が同程度である文脈であったとしても、その文脈において集団間（カテゴリー間）関係をどのように知覚するかによって、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらの自己評価に動機づけられるのかが異なることが示された。つまり、カテゴリー顕現性を介して動機づけが自己カテゴリー化に影響したわけではないことを示すものである。

以上より、集団間文脈の内容と個人の内的要因（集団にどのような評価・態度を有しているのか）が、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのいずれに基づいて自己を評価することへの関心を高めるかを決定するため、自己カテゴリー化の規定因となりうると言えるだろう。

自己カテゴリー化における動機づけの影響メカニズムへのアプローチ2からの検証

アプローチ2は、個人的アイデンティティに由来する自己評価への動機づけという観点からのアプローチである。すなわち、個人的なアイデンティティ維持・高揚動機も自己カテゴリー化に影響をもたらさうという過程が、第4章において示された。

研究5と研究6において、優れた内集団成員と別のカテゴリーを共有していない時には、別のカテゴリーで自らを捉える可能性が示された。自己カテゴリー化理論では、自己カテゴリー化の過程において状況の要請を重要視している。しかしながら、本論文における検討によって、状況による要請がない場合においても、個人的アイデンティティの維持・高揚のため、能動的な自己カテゴリー化が起こりうることが例証された。

社会的アイデンティティ理論においても、アイデンティティ脅威を回避することによって、能動的な自己カテゴリー化が起こる可能性は論じられている。しかしながら、その誘因は、あくまでも社会的アイデンティティへの脅威に限られている。これに対し、本論文の結果より、自己カテゴリー化や集団行動の生起において、個人的アイデンティティへの脅威がその誘因になり得ることが示された。先行研究においても、同じように、個人的な自尊心を低められた人が成功をおさめた内集団との同一化を強めたり (Cialdini, Borden, Throne, Walker, Freeman, & Saloan, 1976; Chialdini & Richardson, 1980), 失敗した内

集団との同一化を弱めたりする (Major et al., 1993) ことが示されている。このことは、人が、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらで自己を捉えるかについて、自己評価への動機づけに基づき、両アイデンティティを相互に補完するよう、その時々で能動的に対応していることを示しているだろう。

さらに、研究5では、アイデンティティ脅威回避に基づいた能動的自己カテゴリー化において、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティが共に考慮されている可能性が示された。このことは、自己カテゴリー化理論が述べているように、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは相反するものではないことを意味している。個人的アイデンティティと社会的アイデンティティを同時に維持・高揚しようとするメカニズムが自己カテゴリー化過程に存在すると言えるだろう。

以上より、個人の自己評価の全体を高く維持しようという動機づけによって、人が能動的に自己の捉え方を変化させたり、望ましいカテゴリーへ自らのアイデンティティをシフトさせたりする過程が示された。

以上、2つのアプローチを通して、(1) 自己評価に関する動機づけが自己カテゴリー化に影響を及ぼす過程が存在する、(2) 個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは共存しうる、と言えるだろう。したがって、両アイデンティティを考慮し、自己評価全体を高めようという動機づけが自己カテゴリー化に影響を及ぼす過程が存在する可能性が認められた。これは、遠藤 (1999) や Spears (2001) の主張を実証的に支持するものである。さらに、自己カテゴリー化過程理解の精緻化において、本論文は、集団文脈や個人内過程が、どのような自己評価への動機づけを伴って、自己カテゴリー化にどのように機能するかを検討している点で新たな示唆を与えると考える。

本研究における、「知覚された集団間関係の変動可能性」による自己カテゴリー化過程の説明は、Spears (2001) の知見の一部を整理もしくは統合できる可能性がある。Spears (2001) は、どちらかのアイデンティティに脅威がもたらされた時、人は、戦略的にアイデンティティ管理を始めると述べている。そして、アイデンティティ脅威が、自己評価維持・高揚においてどちらのアイデンティティを選択させるのかは、人が、慢性的に個人的アイデンティティと社会的アイデンティティに対してどのような価値をおいているのかによって調整されると主張している。たとえば、Spears, Doosje, and Ellemers (1999) は、集団への同一視が低い人は、内集団が好ましく評価されている文脈では自己をカテゴリー化し、

内集団が好ましく評価されていない文脈では自己を社会的アイデンティティで捉えることを示している。それに対し、集団への同一視が高い人は、どちらの文脈においても自己カテゴリー化する傾向を示した。

この主張に関し、本論文では、ある集団間文脈において知覚された集団間関係の変動可能性が自己カテゴリー化に重要な役割を果たすと主張する。Spears (2001) の主張にある個人が慢性的に内集団をどのように捉えているのか、たとえば自分にとって重要であると捉えていたり、優れた集団であると思ったりすることは、知覚された集団間関係の変動可能性の規定因として機能すると本論文では考えている。このような観点から個人の内的要因として集団同一視を用いた Spears et al. (1999) や Schmitt et al. (2000) の研究を見ると、これらの研究では、個人がある集団間文脈におかれた時、集団間関係を変動することが可能であるという知覚、言い換えれば、変動させよう（変動させまい）という動機づけの生起において、内集団への同一視のレベルが影響したと捉えることができる。

このように考えることで、アイデンティティ脅威が存在しない文脈における、アイデンティティ選択のプロセスが説明できる。たとえば、本論文の研究3では、集団間下方比較条件に置かれた場合、内集団評価が高い人は、社会的アイデンティティで自己を捉えない傾向が示された。この集団間下方比較状況はアイデンティティ脅威を生じさせない状況であるため、アイデンティティ脅威の影響を重視する Spears et al. (2001) の考え方からすれば、この状況では自己を最も社会的アイデンティティで捉えるようになる条件のはずである。しかし、研究3の結果はそうではないことを示していたのである。

このように本論文では、知覚された集団間関係の変動可能性が自己カテゴリー化を規定すると考えることによって、劣位集団・優位集団におこる過程のどちらも統合的に説明することに成功している。

また本論文では、個人的アイデンティティ脅威回避戦略において、自己を複合的に捉え管理する過程が存在する可能性を新たに示した。自己カテゴリー化理論を見直す研究では、この過程については、まだ十分に検討されておらず、整理されていない。本研究は、自己カテゴリー化過程の精緻化において、複合的な自己評価への動機づけという観点からを取り入れることの必要性を提案するものである。

1-2. 自己カテゴリー化理論の再検討に関する限界と今後の課題

以上より、集団文脈と個人内過程が共に自己カテゴリー化の規定因として機能することが示された。本論文では、どのような集団・カテゴリーにおいても応用可能である知見となることを目指し、具体的集団と抽象的集団の両方を用い検証した。具体的集団とは、性別カテゴリーや人種カテゴリーなど明確なカテゴリーを指し、抽象的集団とは、学科や職場など一見ただけではわかりにくい集団を指す。しかしながら、社会的比較（集団間比較と個人間比較）の次元を明確にし、各メンバーにとって社会的比較で用いられた課題が自己関連性の高いものとするため、本研究で扱われた集団は、既存の集団であり、個人にとって比較的重要な集団・カテゴリーであった。また、集団間透過可能性が低い集団だけを扱っていた。にわか集団であったり、個人にとってあまり重要ではない集団・カテゴリーや集団間透過可能性が低い集団である場合には、本研究で得られた知見とは異なる形で自己評価の動機づけに基づいた自己カテゴリー化が行われる可能性がある。この検討については、今後の課題としたい。

また、本論文では、集団内の個人間比較が個人に及ぼす影響について一連のメカニズムを理解することが可能だと考え、認知・感情・態度の各側面を測定し検討を行った。しかしながら、全ての研究をとおし、どの側面に影響が及ぼされるかについて、一貫した結果が得られておらず、それらの変数間の関係を明らかにすることはできなかった。唯一、研究3においては、状態自尊心と優れた内集団成員に対する態度の両変数において、3要因の交互作用が認められたが、各従属変数における結果のあり方は異なっていた。この違いに着目すると集団内での個人間比較による影響への反応が、内集団評価の高い人と低い人の中で異なる可能性が考えられた。個人間比較によって得られた結果の原因をどこに帰属しやすいのかといった点から考慮がなされた。すなわち、内集団への評価が高い人は、集団内の個人間比較によって自分が脅威づけられた場合、その原因を自分の能力欠如といった内的要因で処理しやすく、そのために状態自尊心の変動が顕著に認められた可能性がある。一方、集団への評価が低い人は、自分が脅威づけられた原因を相手に帰属し、自分を脅威つけた優れた内集団成員への敵意を抱き、彼ら／彼女らを受け入れないことで個人的アイデンティティを維持するといった方略をとったものと考えられる。このように今後、どのような場合において、集団内の個人間比較が個人にどの側面で影響を及ぼすかをさらに整理していく必要があると考える。

加えて、どのような個人内過程がどのような集団文脈や状況と組合わさり、内集団成員との比較による効果の方向を決定する要因として重要となるのかについてはさらなる検討が必要である。近年、自己カテゴリー化理論だけでは説明できない現象を説明しようとするいくつかの研究が報告されているが、それらの研究が用いている概念や変数は多様であり必ずしも体系的に整理されているわけではないからである。

たとえば、Schmitt et al. (2000) は、日頃持つ集団への同一視が高い内集団成員は集団間比較の状況でのみ、集団アイデンティティへの関心を高めるとしている。また、Long and Spears (1998) は、集団間比較状況におかれると、内集団に対する評価が低い人の方が、内集団と同様に低く評価される可能性を脅威に感じ、外集団のメンバーよりも内集団のメンバーに対して高い評価を与える内集団バイアスを示しやすい、つまり、集団アイデンティティ維持への関心を高めると述べている。本論文を含めこれら諸研究はいずれも、自己カテゴリー化理論と自己評価維持モデルに基づく説明を試みており、個人の内的要因の概念や尺度が類似しているが、仮説の根拠や得られた結果は必ずしも十分に整理されていない。しかしながら、知覚された集団間関係の変動可能性が自己カテゴリー化を規定すると考えることによって、統合的に説明できるかもしれない。Long and Spears (1998) や、内集団成員の日頃の内集団への評価と集団に与えられた評価との関係（集団間比較の状況）によって個人間比較の効果が異なることを示した本研究を考慮すると、集団アイデンティティの構成要素を内集団への評価と集団への同一化の程度という各側面で捉えることでさらなる理解が進むことが予想される。自己カテゴリー化過程の理解において、それらがどのような集団文脈と相互作用し、社会的アイデンティティへの関心を高めるのかを整理していく試みが必要だと考える。

また、個人の内的要因として、個人が内集団をどのように捉えているのかではなく、個人が自分自身をどのように捉えているのかに着目し、その捉え方の違いが自己カテゴリー化に及ぼす影響を検討する研究も行われ始めている。Kampmeier and Simon (2001) は、個人的アイデンティティを独立としての自己（規則や制限から自由なものとしての自己）と差異としての自己（他者からの違いとしての自己）の2つで捉えている。そして彼女らは、独立として自己を捉えている場合には社会的文脈における多数派集団（自由が許される特徴をもつ）への同一視が高まり、差異として自己を捉えている場合には少数派集団（他集団からの差異が顕著という特徴を持つ）への同一視が高まることを示している。個人が集団形成や集団への同一視を通じて個人としての自己を維持しようとするこの過程は、

磯部・浦 (2004), Isobe and Ura (2004) の研究においても確認されており、加えて、その維持が困難な状況において、人は集団や人間関係に対してさまざまに能動的な働きかけをすることが示されている。

さらに、集団のアイデンティティ構造には、自己カテゴリー化理論が想定している構造とは異なるものがあるという知見 (Prentice, Miller, & Lightdale, 1994) に基づき、集団行動を理解しようという試みも行われている。Brewer and Gardner (1996) は、集団のアイデンティティ構造 (Prentice et al., 1994) と自己の捉え方との関連性について述べている。人が独立的に自己を捉えている場合、外集団と対立した集合的な集団 (common identity group) を選好しやすく、関係的に自己を捉えている場合、メンバー間の複雑なネットワークとして捉えることが可能な内集団 (common bond group) を選好することが予想される。

ここに、存在脅威管理理論 (Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986) やソシオメーター理論 (Baumeister & Leary, 2000; Leary & Downs, 1995) を加味し、個人的アイデンティティが脅威づけられた時、独立的な自己を高く有する場合はアイデンティティの維持を求め集団間の差異化に取り組むのに対して、協調的な自己を高く有する場合は、メンバーとの信頼関係を吟味しつつ、メンバーや外集団への働きかけを行うことが示唆されている (中島, 2004)。

以上より、上述したような個人特性や集団特性から自己カテゴリー化過程を再検討することは、社会的アイデンティティと個人的アイデンティティの複合的、あるいは相補的な働きによる自己カテゴリー化過程に関して、理解を進めると考えられる (Spears, 2001)。さらに、社会的アイデンティティのあり方そのものが集団によって異なるという知見 (Prentice et al., 1994) やソシオメーター理論に基づけば、個人にとって何が脅威をもたらすのか自体が個人特性や集団特徴・文化によって異なる可能性を含む。ソシオメーター理論では、自尊心とは、自分と他者との関係を監視する心理的システムであるとしており、主観的自尊心とは、他者からの受容の程度を示すメーターであり、人は生きていくために、他者から受け入れられているのか、排除されているのかを常にモニターしていると考えられているからである。他者からの受容感を失う要因、そしてそれを確証する要因は、個人特性や集団特徴・文化によって異なるだろう。また、文脈に依存した、もしくは依存しているように見える自己カテゴリー化過程のメカニズムさえも、自己評価への動機づけという観点から見直すことができるかもしれない。最小条件集団実験では、何も手がかりがな

い状況であるからこそ、自己評価への動機づけが機能し、利用可能であるカテゴリでの自己カテゴリー化を促進させやすいと考えられる(e.g., Grieve & Hogg, 1999)。文脈があいまいであったり不安定である状況では、人は他者からの受容感を得にくいため、それを得ようと自己カテゴリー化したと言えるかもしれない。

人はどのような状況において、どのように受動的あるいは能動的に自己をカテゴリー化しているのだろうか。自己が持つ個人的アイデンティティと社会的アイデンティティという両側面を、人がどのように使い分け、そして、どのように相互が影響しあい、自己評価維持・高揚をなしているのだろうか。以上に示した様々な研究・理論をふまえ、集団がどのような状況にあるのかに加え、個人がどのように自己を捉えているのか、集団がどのような特徴を持っているのかという点を加え、より詳細に集団間・集団内過程について研究することが今後の自己カテゴリー化過程の理解において必要となるだろう。その際、自己評価への動機という人の基本的な動機づけに焦点を当て説明を試みることによって、自己カテゴリー化過程を統合的に説明することが期待される。

2. 実践的貢献

第1章で述べたように、本論文は、個人間過程と集団間過程のインターフェイスについての理解をより精緻化するものという意味でも価値がある。従来、個人間過程と集団間過程はそれぞれ独立に扱われ、それらを統合した研究はされてこなかった。近年になって、個人間比較過程に、社会的アイデンティティという視点を取り入れると異なる予測が成り立つことが示され始めた。本論文ではこのような観点による検討から、どのような場合に、個人間比較から受ける脅威が大きいのか、またそのため個人間関係が劣化する態度をもちやすいのかを明確にすることができた。また、このような集団内の個人間関係の理解は、集団全体にとっても必要なものである。それは、個人が個人間上方比較の対象になることでストレスを感じる (Juola-Exline & Lobel, 1999)、集団成員が他者からの排斥を回避するためわざと優れた成果をあげない (Pappo, 1983) など、集団全体のパフォーマンス評価にもネガティブな影響を及ぼす可能性があるからである。そこで、集団がこのようなネガティブな影響を受けないためにはどのようにすればいいのかについて考察する。

さらに、個人間過程と集団間過程のインターフェイスについての理解を目指した本研究は、社会のダイナミックな変動の生起もしくは抑制メカニズムについての示唆も含む。

以下では、本論文の結果から、個人としてどうあればいいのか、集団・組織として、その成員にどのような働きかけをすればいいのか、社会はどのようなものであればいいのか、についての示唆を順に考察する。

個人としてどうあればいいのか

内集団の成員からもたらされるネガティブ影響、それによるその成員との関係の劣化を防ぐためには、集団内での個人間関係に固執しないように、文脈に対して柔軟に対応するよう心がけることが必要だと言えるだろう。

まず、第2章からは、集団間上方比較といった外部状況に注目することにより、優れた内集団成員との比較の際に、脅威を低減できることが示された。また、この効果は、社会的比較による脅威回避が不得手であるといわれている低自尊心者において顕著であった。成員が自らを社会的アイデンティティで捉えることは、時に集団内の個人間関係を円滑なものにする可能性がある。

第3章では、ネガティブなものであれ、ポジティブなものであれ、人が集団間の変動性の可能性を低く見積もらないことが、自尊心の低下や、集団内での足の引っ張り合いを抑制する可能性が示された。研究3の結果からは、集団間文脈の情報に対し内集団成員が是認することなく、また、集団間変動の可能性を内集団成員が各自自覚することが、優れた内集団成員の排斥の抑制、自尊心への脅威の低減において必要であるといえよう。また、研究4の結果から、個々人が社会的に存在する枠組み的な判断を常に鵜呑みにすることなく、状況に応じた判断をし、周囲の人々との関係だけでなくより大きな視点をもつことが重要であることが示唆される。

第4章では、比較対象と共有しない別のカテゴリーに注目することで、アイデンティティへの脅威が低減されることが示された。ある特定のカテゴリーにアイデンティティを高く置くのではなく、柔軟にアイデンティティ移行が可能となるように、多面的なカテゴリーを所有しておくことが重要であることが示唆される。

集団・組織として、その成員にどのような働きかけをすればいいのか

集団・組織はそれをよりよいものにしていくため、成員に対して、集団間文脈に注意を向け、客観的な視点から内集団を評価するよう、働きかけることが重要だと考えられる。

第2章からは、集団間下方比較状況の顕現化が自己カテゴリー化をもたらし、個人間比

較において個人を反映過程に導くことで、優れた内集団成員との比較によるアイデンティティ脅威回避を可能にさせることが示された。

加えて、第3章の結果は、たとえ集団間比較の機会が与えられたとしても、その集団の社会的関係性の変動可能性を低く見積もらせてしまう条件がある場合には、集団を高めていこうとする動機づけが抑制される可能性があることを示していた。集団・組織は、集団間関係に関して慢心やあきらめの観を持たせることのないよう、成員に働きかけることが有効であることを示唆している。

さらに第4章の結果から、個人が柔軟にアイデンティティを移行できるように、集団・組織内の多様性を高めることが有効かもしれない。集団・組織内の多様性に関して、それが職務集団に及ぼす影響についての研究は盛んに行われてきている。例えば、集団成員の属性による多様性は、集団成員の志向性や価値観の多様化に結びつき創造性が向上する (Schrujjer & Mostert, 1997) という報告がある。また、古川 (2003) は、集団が成長するに伴って、興味や関心の内部化が進むと述べている。これは、集団活動の安定化と効率化の実現につながると同時に、集団の外部動向に対して興味や関心が薄れて、井の中の蛙現象が目立ち始めることを指摘している。逆を言えば、集団内の多様性を維持することが集団の外部動向への関心の薄れを抑制させうると言えるだろう。したがって、集団・組織内の多様性は、先に述べた、その集団の社会的関係性の変動可能性の見積もりにおいても、集団内の個人間関係に影響を与えるかもしれない。

しかしながら、このような知見に対し、集団内の多様性が集団凝集性の低下を導いたり、成員間での葛藤や対立を引き起こす (Pelled, Eisenhardt, & Xin, 1999) というネガティブな事例の報告も存在する。集団・組織内のどのような側面における多様性が、成員の安寧をもたらすのか、集団・組織の実績に影響するのかについて、今後の研究に期待される。

社会はどのようなものであればよいのか

社会におけるダイナミックな変動を促進するためには、集団・組織間の競争を阻む社会構造、すなわち規制を解消することが有効だと言えるだろう (浦, 2004)。

本論文から社会や集団文脈が集団間の関係性変動の可能性の見積もりを規定し、それが、ステレオタイプ是認などの集団関係の形成や強化につながり、それがまた、集団間関係の変動可能性の見積もりに影響するというネガティブループが存在する可能性が示唆された。このようなネガティブループを断ち切るには、社会がダイナミックな変動を促進するもの

であることが重要だと考えられる。規制は、優位集団における慢心と劣位集団におけるあきらめを強化し、集団間の競争を抑制してしまう。その結果、集団・企業がお互いに切磋琢磨することで得られる社会的な向上も抑制される可能性があるだろう。

以上のように、本論文から、自己-集団-社会の間の重層的な関係性が示唆された。今後、さらなる検討を通し、この関係についてのより精緻化したモデルを作成することが期待される。

3. 第5章の要約

本章ではまず、自己カテゴリー化の規定因の精緻化のために行った一連の研究の結果を総括し、個人が複合的に自己評価を維持・高揚しようとする動機づけの観点から考察を行った。また、自己の捉え方といったより特性的な要因、集団特性に注目することの必要性をあげた。そのような検討によって、複合的に自己評価を維持するという動機づけが自己カテゴリー化に影響しているメカニズムをさらに明確にするという今後の課題と展望について言及した。最後に、上記にあげた理論的貢献だけでなく実践的な貢献についても考察を行った。

本論文の要約

内集団を高揚させるような優れた内集団成員が他の成員から拒否されるのはどのようなときであり、逆に、その成員が賞賛され、受け入れやすくなるのはどのようなときなのであろうか。本論文では、優れた内集団成員に関するこのような問いに答えることを通し、自己カテゴリー化理論を見直すことを目的とした。

自己をどのように捉えるのかに関わる研究では、主に、自己を個人的アイデンティティと社会的アイデンティティとに区別し、議論を展開してきた。ここで、個人的アイデンティティとは、個人が独特で他の全ての人間とは違っているものとしての自己概念であり、個人間の相互作用に影響するとされている。一方、社会的アイデンティティは、自己を他の内集団成員と交換可能であるものとしての自己概念であり、集団間の相互作用に影響するとされている。そして、自己を社会的アイデンティティで捉えることが集団行動にどのようにして影響するかについて、自己評価維持動機に注目して説明を行ったのが社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) である。この理論では、自己を社会的アイデンティティで捉えている時には、内集団と外集団の比較を通して内集団を肯定的に評価しようという動機づけが働く、そのために、人は他の集団との肯定的な区別を可能にする集団間・集団内行動に従事すると説明されている。この理論を発展させた自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) では、そのような内集団を肯定的に評価しようという動機づけに基づく認知・行動がなされるためには、個人が社会的アイデンティティで自己を捉えることが必要であり、それを導くのは「状況における集団 (カテゴリー) の顕現化である」と述べている。

しかしながら、近年このような考え方が批判的に見直され、自己評価を肯定的に評価したいという動機づけが根本にあるのであれば、自己をどのように捉え評価するのかは、必ずしも状況にのみ依存するわけではないという主張が散見されるようになってきた (e.g., 遠藤, 1999)。また、個人が個人的アイデンティティと社会的アイデンティティを共に維持・高揚することを目指し、自己と環境に対して能動的に働きかけている可能性が示されつつある (Spears, 2001)。

本論文では、このような批判をふまえ、自己カテゴリー化の過程について、個人の動機づけという側面から検討した。具体的には、集団間比較の方向といった集団文脈と、個人が内集団をどのように捉えているのか、また個人的なアイデンティティがどのような状態

にあるのかといった個人内過程とが自己カテゴリー化過程に及ぼす影響について検討した。

加えて、本論文は、優れた内集団成員に関わる現象の解明も目的とするため、集団内の成員間関係について検討することを通し、自己カテゴリー化過程を見直した。集団内の成員間関係を説明するものとして自己評価維持モデル (Tesser, 1988) が知られている。この理論によると、その過程には以下の 2 つが存在するという。一つは、比較過程であり、比較の対象と自己を比べるというものである。もう一つは、反映過程であり、比較対象の成果を自己のものとして捉えるというものである。

自己カテゴリー化理論を考慮し、このような個人間比較の過程を集団という観点で捉えると、内集団成員との比較の際に、個人的アイデンティティが優勢である場合には比較過程が、社会的アイデンティティが優勢である場合には反映過程が生起しやすいといえる。そこで、本論文では、集団内での個人間比較の際に、これらのうちどちらの過程が示されたかを自己カテゴリー化の指標とし、上述した自己カテゴリー化過程へのアプローチを行った。

第 1 章 問題の所在

本章では、自己カテゴリー化過程に関わる諸理論・研究をレビューすることによって、自己カテゴリー化理論で説明された自己カテゴリー化の規定因を個人の自己評価への動機づけという側面から精緻化する必要性を示した。自己カテゴリー化過程を規定するものとして、‘集団文脈’とそれを個人がどのように捉えるのか・個人的アイデンティティがどのような状態にあるのかといった‘個人内要因’に着目することが重要であると考えた。また、カテゴリー化過程の検討において、集団内での個人間比較で示される効果を自己カテゴリー化の指標とする意義について述べた。最後に、本研究の基本仮説を述べた。

第 2 章. 集団間文脈が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

本章では、集団間文脈の違いが個人的アイデンティティと社会的アイデンティティのどちらの自己評価維持への関心を高めるかを決定することを検討した。個人の自己評価への動機づけを考慮すれば、自己カテゴリー化理論の主張とは異なり、外集団よりも劣っている「集団間上方比較状況」と内集団が外集団よりも優れている「集団間下方比較状況」とでは、その顕現化による効果は異なることが予想される (e.g., Brewer & Weber, 1994; Goethals & Darley, 1997)。

これらの仮説を検討するため、まず、研究1では、社会人を対象に、会社を内集団とした想定法による調査を行った。次に、研究2では、女子大学生を対象に学科を内集団とした準実験を行った。研究2においては、集団間上方比較状況が、集団内の個人間比較に及ぼす効果性に注目し、特性自尊心をさらなる要因として加えて検討を行った。

これらの結果をとおして、集団間文脈の顕現化は、その内容によってどちらの自己評価を維持・高揚するという動機づけへの関心を高めるかを決定し、結果として自己カテゴリー化に影響を及ぼすことが示唆された。

第3章. 集団間文脈と個人の内的要因が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響

本章では、知覚された集団間関係の変動可能性の知覚が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響について検討した。Blanton et al. (2002) の知見に基づけば、そのような変動可能性に気がつけば、集団間文脈において社会的アイデンティティへの関心が高まるが、変動可能性を低く見積もる場合には、集団間文脈においても個人的アイデンティティへの関心が高まると予想される。

この仮説を検討するため、研究3では、集団間比較の方向と日頃の内集団評価の高さの交互作用が、集団内での個人間比較に及ぼす影響について、大学生を対象に性別を内集団カテゴリーとした実験を行った。内集団を高く評価している人が集団間下方比較におかれた場合には集団間関係に慢心を感じやすく、また内集団を低く評価している人が集団間上方比較におかれた場合にはそれにあきらめを感じやすいと考えられる条件である。一方、内集団を高く評価している人が集団間上方比較におかれた場合、また内集団を低く評価している人が集団間下方比較におかれた場合には人は集団間変動可能性を高く見積もりやすいと考えられる条件である。

研究4では、特性的な集団間関係の変動可能性の知覚が集団内での個人間比較に及ぼす影響について、大学生を対象に、性別を内集団とする想定法による調査を行った。

以上の研究により、集団間文脈の顕現化に加え、個人がどのように集団間文脈を判断するかにかかわる個人の内的要因が、集団間関係の変動可能性の知覚への影響を介して、自己カテゴリー化過程に影響を及ぼすことが示唆された。

第4章. 個人的アイデンティティを維持高揚しようとする動機づけが自己カテゴリー化に及ぼす影響

本章では、より個人的な自己の側面が自己カテゴリー化過程に及ぼす影響を検討した。Mussweiler et al. (2000) に基づき、集団内での個人間比較による個人的な自己への脅威を低減するという動機づけによって、その比較対象とは共有しない別のカテゴリーに自己をカテゴリー化すると予想した。

この仮説を検証するため、研究5では、研究2と同じ準実験において、性別を別のカテゴリー共有度として操作した。さらに研究6では、上記で示された傾向が、特性自尊心により異なるかどうかを、性別を集団間比較、理系-文系カテゴリーを別のカテゴリー共有度の操作に用い、大学生に対して実験を行った。

これらの検討を通し、人は個人としての自己評価維持に向けた動機づけによって、能動的に自己をカテゴリー化する可能性が示された。特に、研究5では、状況によってある社会的アイデンティティへの関心が高められていた時でもなお、それとは別のカテゴリーでも自らを捉えることによって、個人としての脅威を低減している可能性が示された。このことより、個人的アイデンティティと社会的アイデンティティは相反するものではなく、それらを同時に維持・高揚しようとするメカニズムが自己カテゴリー化過程に存在する可能性も示唆された。

第5章. 総括と展望

本章ではまず、自己カテゴリー化の規定因の精緻化のために行った一連の研究の結果を総括し、個人が複合的に自己評価を維持・高揚しようとする動機づけの観点から考察を行った。また、自己の捉え方といったより特性的な要因、集団特性に注目することの必要性をあげた。そのような検討によって、複合的に自己評価を維持するという動機づけが自己カテゴリー化過程に影響しているメカニズムをさらに明確にするという今後の課題と展望について言及した。最後に、上記にあげた理論的貢献だけでなく実践的な貢献についても考察を行った。

引用文献

- Archer, D. (1980) *How to expand your S.I.Q. (Social intelligence quotient)*. New York: M. Evans. and Company.
(工藤力・市村英次 (訳) (1988) ボディ・ランゲージ解説法. 誠心書房.)
- Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992) Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, *63*, 596-612.
- Arroyo, C. G. & Zigler, E. (1995) Racial identity, academic achievement, and the psychological well-being of economically disadvantaged adolescents. *Journal of Personality and Social Psychology*, *69*, 903-914.
- Aspinwall, L. G. & Taylor, S. E. (1993) Effects of social comparison direction, threat, and self-esteem on affect, self-evaluation, and expected success. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 708-722.
- Bar-Tal, Y. (1994) The effect on mundane decision-making of the need and ability to achieve cognitive structure. *European Journal of Personality*, *8*, 45-58.
- Barreto, M., Spears, R., Ellemers, N., & Shahinper, K. (2003) Who wants to know? The effect of audience on identity expression among minority group members. *British Journal of Social Psychology*, *42*, 299-318.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. (2000) The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. In A. W. Kruglanski & E. T. Higgins (Eds.), *Motivational science: Social and personality perspective* (Pp. 24-49). Philadelphia: Psychology Press.
- Baumgardner, A. H., Kauffman, C. M., & Levy, P. E. (1989) Regulating affect interpersonally: When low esteem leads to greater enhancement. *Journal of Experimental Social Psychology*, *56*, 907-921.
- Blanton, H., Christie, C., & Dye, M. (2002) Social identity versus reference frame comparisons. *Journal of Personality and Social Psychology*, *38*, 253-267.
- Blanton, H., Crocker, J., & Miller, D. T. (2000) The effects of in-group versus out-group social comparison on self-esteem in the context of a negative

- stereotype. *Journal of Experimental Social Psychology*, 36, 519-530.
- Blanz, M. (1999) Accessibility and fit as determinants of the salience of social categorizations. *European Journal of Social Psychology*, 29, 43-74.
- Bodenhausen, G. V. & Macrae, C. N. (1998) Stereotype activation and inhibition. In R. S. Wyer, Jr (Ed.), *Stereotype activation and inhibition: Advances in social cognition* (Vol. 11, Pp. 1-52). Mahwah : Erlbaum.
- Boyanowsky, E. O. & Allen V. L. (1973) Ingroup norms and self-identity as determinants of discriminatory behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 408-418.
- Brewer, M. B. (1991) The social self: On being the same and different at the same time. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 475-482.
- Brewer, M. B. & Weber, L. G. (1994) Self-evaluation effects of interpersonal versus intergroup social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 268-273.
- Brewer, M. B. & Gardner, W. (1996) Who is this "We"? Levels of collective identity and self representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 83-103.
- Brickman, P. & Bulman, R. J. (1977) Pleasure and pain in social comparison. In J. M. Suls & Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (Pp. 149-186). Washington: Hemisphere.
- Brown, J. D., Collins, R. L., & Schmidt, G. W. (1988) Self-esteem and direct versus indirect forms of self-enhancement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 445-453.
- Brown, J. D. & Gallagher, F. M. (1992) Coming to terms with failure: Private self-enhancement and public self-effacement. *Journal of Experimental Social Psychology*, 28, 3-22.
- Brown, J. D. & Turner, J. C. (1981) *Interpersonal and intergroup behavior*. Oxford: Basil Blackwell and Chicago: University of Chicago Press.
- Bruner, J. S. (1957) On perception readiness. *Psychological Review*, 64, 123-152.
- Buunk, B. P., Collins, R.L., Taylor, S. E., Van Yperen, N. W., & Dakof, G. (1990) The

- affective consequences of social comparison: Either direction has its ups and downs. *Journal of Personality and Social Psychology*, *59*, 1238-1249.
- Cialdini, R. B., Borden, R. J., Throne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Saloan, L. R. (1976) Basking in reflected glory: Three (foot-ball) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, *34*, 366-475.
- Chialdini, R. B. & Richardson, K. D. (1980) Two indirect tactics of image management: Basking and blasting. *Journal of Personality and Social Psychology*, *39*, 406-415.
- Crocker, J., Major, B., & Steele, C. (1998) Social stigma. In D. T. Gilbert, S. T. Fisk, & G. Lindzey (Eds.), *The Handbook of Social Psychology* (Vol. 2, Pp. 504-553). New York: McGraw-Hill.
- Deshamps, J. C., & Brown, R. J. (1983) Superordinate goals and intergroup conflict. *British Journal of Social Psychology*, *22*, 189-195.
- Ellemers, N., Van Knippenbrg, A., & Wilke, H. (1988) Social identification and permeability of group boundaries. *European Journal of Social Psychology*, *18*, 497-513.
- Ellemers, N., Wilke, H., & Van Knippenbrg, A. (1993) Effects of the legitimacy of low group or individual status as individual and collective status-enhancement strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 766-778.
- 遠藤由美 (1999) 「自尊感情」を関係性からとらえ直す. 実験社会心理学研究, *39*, 150-167.
- Festinger, L. (1954) A theory of social comparison processes. *Human Relations*, *7*, 117-140.
- 古川久敬 (2003) 基軸づくり. 日本能率協会マネジメントセンター.
- Gaertner, L., Sedikides, C., & Graetz, K. (1999) In search of self-definition: Motivational primacy of the collective self, or contextual primacy, *Journal of Personality and Social Psychology*, *76*, 5-18.
- Gibbons, F. X. & Boney-McCoy, S. (1991) Self-esteem, similarity, and reactions to active versus passive downward comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, *60*, 414-424.

- Goethals, G. R. & Darley, J. M. (1987) Social comparison theory: An attributional approach. In J. M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (Pp. 259-278). Washington: Hemisphere.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986) The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R. F. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (Pp. 189-207). New York: Springer-Verlag.
- Grieve, P. G. & Hogg, M. A. (1999) Subjective uncertainty and intergroup discrimination in the minimal group situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 926-940.
- Heatherton, T. F. & Polivy, J. (1991) Development and validation of scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 895-910.
- 廣田君美 (1994) 訳者解説 廣田君美・藤澤等 (監訳) 集団凝集性の社会心理学 (Pp. 221-237). 北大路書房.
- Hogg, M. A. (1992) *The social psychology of group cohesiveness*. London: Wheat-sheaf.
(廣田君美・藤澤等 (監訳) (1994) 集団凝集性の社会心理学. 北大路書房.)
- Hogg, M. A. & Abrams, D. (1988) *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.
- 磯部智加衣・浦光博 (2004) 集団特性と個人性の一致・不一致が集団への対応に及ぼす影響. 日本心理学会第 68 回大会論文集, Pp. 235.
- Isobe, C. & Ura, M. (2004) The effect of two-component individuality on the group formation process. *Paper presented at 28th International Congress of Psychology*.
- Juola-Exline, J. A. & Lobel, M. (1999) The perils of outperformance: Sensitivity about being the target of a threatening upward comparison. *Psychological Bulletin*, 125, 307-337.
- 柿本敏克 (2001) 社会的アイデンティティ理論/自己カテゴリー化. 山本真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介(編), 社会的認知ハンドブック

- (Pp. 120-129). 北大路書房.
- Kampmeier, C. & Simon, B. (2001) Individuality and group formation: The role of independence and differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 448-462.
- Leary, M. & Downs D. L. (1995) Interpersonal functions of the self-esteem motive: The self-esteem system as a sociometer. In M. Kernis (Ed.), *Efficacy, Agency and Self-esteem* (Pp. 123-144). New York: Plenum press.
- Lee, Y-T. & Ottati, V. (1995) Perceived in-group homogeneity as a function of group membership salience and stereotype threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 910-619.
- Long, K. M. & Spears, R. (1998) Opposing effects of personal and collective self-esteem on interpersonal and intergroup comparisons. *European Journal of Social Psychology*, 28, 913-930.
- Luhtanen, R. & Crocker, J. (1992) A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 711-721.
- 前田賢一郎 (1998) 一致への志向性の強さが他者への反応に及ぼす影響. 広島大学総合科学部卒業論文 (未刊行).
- Major, B., Sciacchitano A-M., & Crocker, J. (1993) In-group versus out-group comparisons and self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 711-721.
- Mussweiler, T., Gabriel, S., & Bodenhausen, G. V. (2000) Shifting social identities as a strategy for deflecting threatening social comparisons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 398-409.
- 中村佳子・浦光博 (1999) 適応および自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果. *実験社会心理学研究*, 39, 121-134.
- 中村佳子・浦光博 (2000) ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から—. *社会心理学研究*, 15, 151-163.
- 中島健一郎 (2004) 自己脅威の有無と異なる自己概念が集団の評価に及ぼす影響の検討. 平成 15 年度行動科学実験報告書 (未刊行).

- Neuberg, S. L. & Newson, J. T. (1993) Personal need for structure: Individual differences in the desire for simpler structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 113-131.
- Oakes P. J. & Turner, J. C. (1980) Social categorization and intergroup behaviour: Dose minimal intergroup discrimination make social identity more positive? *European Journal of Social Psychology*, 10, 295-301.
- Oakes, P. J., Turner, J. C., & Haslam, S. A. (1991) Perceiving as group members: The role of fit in the salience of social categorization. *British Journal of Social Psychology*, 30, 125-144.
- 小川時洋・門地里恵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000) 一般感情尺度の作成. 心理学研究, 71, 241-246.
- 荻坂良二・梅本堯夫 (1973) 新訂京大 NX15-第 2 版. 大成出版.
- Pappo, M. (1983) Fear of success: The construction and validation of a measuring instrument. *Journal of Personality Assessment*, 47, 36-41.
- Pelled, L. H., Eisenhardt, K. M., & Xin, K. R. (1999) Exploring the black box: an analysis of work group diversity, conflict and performance. *Administrative Science Quarterly*, 44, 1-28.
- Pickett, C. L. & Brewer, M. B. (2001) Assimilation and differentiation needs as motivational determinants of perceived in-group and out-group homogeneity. *Journal of Experimental Social Psychology*, 37, 341-348.
- Pleban, R. & Tesser, A. (1981) The effect of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. *Social Psychology Quarterly*, 44, 278-285.
- Prentice, D. A., Miller, D. T., & Lightdale, J. R. (1994) Asymmetries in attachments to groups and to their members: Distinguishing between common-identity and common-bond groups. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 484-493.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton, Nj: Princeton University Press.
- Schlenker, B. R., Weigold, M. F., & Hallam, J. R. (1990) Self-serving attribution in

- social context: Effects of self-esteem and social pressure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 855-863.
- Schruijer, S. G. L. & Mostert, I (1997) Creativity and sex composition: An experimental illustration. *European Journal of Work and Organizational Psychology*, 6, 175-182.
- Schmitt, M. T., Silvia, P. J., & Branscombe, N. R. (2000) The intersection of self-evaluation maintenance and social identity theories: Ingroup judgment in interpersonal and intergroup contexts. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1598-1606.
- Spears, R (2001) The interaction between the individual and the collective self: Self-categorization in context. In C. Sedikides & M. B. Brewer (Eds.), *Individual self, relational self, collective self* (Pp. 171-198). Philadelphia: Psychological Press.
- Spears, R., Doosje, B., & Ellemers, N. (1999) Commitment and the context of social perception. In N. Ellemers, R. Spears, & B. Doosje (Eds), *Social identity: context, commitment, content* (Pp. 59-83). Oxford: Basil Blackwell.
- 鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. 心理学研究, 65, 34-41.
- Tajfel, H. (1969) Cognitive aspects of prejudice. *Journal of Social Issues*, 25, 79-97.
- Tajfel, H. & Wilkes, A. L. (1963) Classification and quantitative judgement. *British Journal of Psychology*, 54, 101-114.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. F., & Flament, C. (1971) Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-148.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979) An integrative theory. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (Pp. 33-47). Monterey : Books/Cole.
- 館有紀子・宇野善康 (2000) 日本版状態セルフ・エスティーム尺度の検討. 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 206-207.
- Taylor, S. E., Wayment, H. A., & Carrillo, M. (1996) Social comparison, self-regulation, and motivation. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.),

- Handbook of motivation and cognition* (Vol. 3, Pp. 3-27). *The interpersonal context*. New York: Guilford Press.
- Tesser, A. (1988) Towards a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 20, Pp. 181-227). New York: Academic Press.
- Turner, J. C. (1987) *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.
- (欄千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) (1995) 社会集団の再発見. 誠心書房.)
- 浦光博 (1999) 認知的構造化欲求と構造化能力が自尊心と他者の受容に及ぼす影響. 広島大学総合科学部紀要IV理系系, 25, 171-179.
- 浦光博 (2004) 対人行動の社会的起源 朝倉尚・坂田桐子・西村雄郎・布川弘・安野正明 (共編) 21世紀の教養4 制度と生活 (Pp.158-168). 培風館.
- 渡辺聡 (1994) 日本語版集合自尊心尺度構成の試み. 社会心理学研究, 10, 104-113.
- Webster, D. M. & Kruglanski, A. W. (1994) Individual differences in need for cognitive closure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 1049-1062.
- Wheeler, L. & Miyake, K. (1992) Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

付 録

ここでは、本論文で用いた尺度のうち独自に作成した尺度のみを掲載する。

第1章

研究1

1-1. 集団間関係に関する質問

◎ 以下の項目について、最もあてはまる番号に○をおつけください。

1. 世間一般では、あなたの会社とX社はどのくらい競い合っていると考えられていますか。
2. あなたは、あなたの会社とX社はどのくらい競い合っていると考えていますか。
3. あなたの会社の他の人々は、X社を、日頃どのくらいライバル視していますか。
4. あなたは、X社を、日頃どのくらいライバル視していますか。
5. 世間一般では、あなたの会社に比べてX社はどのくらい業績が優れていると考えられていますか。
6. あなたは、あなたの会社に比べてX社はどのくらい業績が優れていると考えていますか。

※ 項目1・2は、非常にライバル視している（1）～ 全くライバル視していない（5）

項目3・4は、激しく競い合っている（1）～ 全く競い合っていない（5）

項目5・6は、非常に優れている（1）～ 非常に劣っている（5）

で、それぞれ回答

1-2. Aさんに対する能力評価

◎あなたは、以下のそれぞれの項目が、Aさんにどれくらいあてはまると思いますか。あなたのお考えに最もあてはまるところに○をつけてください。

1. Aさんが持っている仕事の知識やスキルには、「さすが」と思うことがある
2. Aさんは、会社の業績に貢献している
3. 課題を先取りし、一歩先を行く仕事をする
4. どこでも通用する普遍的な能力が身に付いている
5. 仕事や役割を上手くこなしている
6. 会社から業務に関して、高い評価を得ている
7. 仕事の上で、失敗することはほとんどない

※ 非常にあてはまる（5）～ 全くあてはまらない（1）で回答

第3章

研究3

3-1. 事前・事後の課題の重要度

◎今のあなたの考えに近い数字に○をつけてください

1. 社会的知能テストは、人に対する判断能力を正確に測定することが可能である
2. 人に対する判断能力と将来の幸せや自分への満足感は、非常に関係がある
3. 私にとって、人間関係を正確に処理することは非常に重要である
4. 私にとって、社会的知能テストでよい成績を得ることはあまり重要ではない

(項目4は逆転項目)

※ 非常にあてはまる（5）～ 全くあてはまらない（1）で回答

研究4

4-1. 態度尺度

○あなたの周囲にいる同世代の仲間の中で、あなたにとって重要な領域において、あなたよりもたいてい優秀な成績を収めそうな同性の友人を思い浮かべてください。

もしそのような人が具体的に思い浮かばないときは、そのような人がいると仮定してください。その人はあなたにとってどのような存在ですか。以下の各項目にあてはまる番号に○印をつけてください。

1. 仲良く付き合いたい
2. その人と自分を比べると情けない気持ちになる
3. 他の人たちに親友として紹介できる
4. できれば近づきたくない
5. 周囲の人たちに自慢できる
6. 自分に劣位を抱かせる
7. 一緒にいることで自分にとって励みになる
8. ほかの人たちに自分の仲間として紹介したくない
9. 自分にとって誇りとなる
10. 周囲の人たちからその人と比較されるのが苦痛である
11. その人が自分の仲間であってくれてうれしい
12. 自分のそばに近づいてほしくない
13. 自分もがんばろうという気持ちにしてくれる
14. その人のことを考えると不愉快な気持ちになる

※ あてはまらない (1) ～あてはまる (5) で回答

※ なみ線の箇所は、条件によって異なる

第4章

研究6

6-1. 事前・事後の課題の重要度

◎ 今のあなたの考えに近い数字に○をつけてください

1. 社会的知能テストは、人の直感的な能力を正確に測定することが可能である
2. 直感的な処理能力と社会生活での成功は非常に関係がある
3. 私にとって、物事を直感的に処理することは非常に重要である
4. 私にとって、社会的知能テストでよい成績を得ることはあまり重要ではない

(逆転項目)

※ 非常にあてはまる(5)～ 全くあてはまらない(1)で回答